



始



14.9.25

14.9.25

31-795



# 戀

ツルゲエネフ作  
生田春月譯

□ 新潮社出版 □

大正  
7. 11. 29  
内交

譯者序

戀愛といふ言葉はイワン・ツルゲエネフにあつては恐らく最もいたましい言葉の一つであつたらう。夢想と現實との間の矛盾を、性格と境遇との間の撞着を、すべての存在の不如意と絶望とを、すべての人生の『おあいにくさま』を、ツルゲエネフほどによく描き得た人はない。常に不幸に終る戀愛の歴史、常に悲劇に終る戀物語ほどに、それをいたましく思はせるものはない。常に不幸に終る戀愛の歴史、常に悲劇に終る戀物語、その中に私はつひに獨身に終つたこの作家のいたましい告白を聞く思ひがする。あらゆる希望の破産と、生きる上の無力と癒やしがたき悔恨と、満たされざる慾望と、不可能を不可能としての諦めと——彼の物語、とりわけそのラヴ・ストーリーの示すところを抽象化したならば恐らくかやうな言葉になるであらう。こゝにはそれらのいたましい三つの物語が集められる。

『初戀』は彼のラヴ・ストーリーの代表的な作の一つで、平凡であり、夢のやうなものであるのが常であるすべての初戀の物語の中において、作者一流の詩趣は豊かであるが、すこしく異様な、刺戟的な物語である。少年の日の夢想の中には苦い一滴が落されてゐる。『女の愛を恐れよ、この幸福、この毒を恐れよ』と主人公の父親は遺言した。女主人公はジナイイダといふ美しい名前を持つてはゐるが、『煙』のイリナの別の姿であり、マノン・レススコオの情熱と虚榮心とを傳へてゐる。

『ファウスト』は、『春の波』のジェンマと等しく伊太利人の血を享けてゐる女主人公ヴェラの面影と共に、あの秘密な靈魂の世界の消息の一端を傳へたもので、ギョオテの『あきらめなければならぬ』はそのモットオであり、その結論である。

『クララ・ミリッチ』は然し最も重要な作である。それはこれが作者の最後の作品であるからばかりではない。この不思議な女優と、不思議な戀とは極めて強烈な花の香りをもつ。生に於て常に相別れ、常に不幸であつたすべての戀ののちに、こゝに死に於て一致し、死に於て幸福になる戀が描かれる。實にこれ作者の多くの戀物語のエピロオグである。この二篇はいづれもその『夢物語』――『夢』――『幻』『犬』等と同様に作者の夢幻的、神祕的な一面の作風を示す。殊に後者には死に相面してゐた作者の晩年の内心の消息が窺はれる。なほ、『初戀』はもと大正三年に獨譯より譯したものが、今度英譯全集版と對照して多少の訂正を施した。他の二篇は専ら英譯により、後者はのちにオトオ・ヤンケ版を參照した。

譯者

目	初
『ファウスト』……………	戀……………
クララ・ミリッチ……………	

初

戀

ツルゲエネフ作  
生田春月譯

…客はみな疾くに辭し去つた。十二時半が打つた。まだ残つてゐるのは、主人なら  
びに、セルゲイ・ニコラエキッチと、ウラヂミル・ペトロキッチとに過ぎなかつた。

主人は呼鈴を鳴らして、晚餐の残物を取りさげるやうに命じた。

『それぢや決りました。』と彼は言つた、肘掛椅子に樂々とすわり直しながら、その葉巻  
に火をつけながら、『お互ひに自分の初戀の話をすることにしませう。順番は貴下ですよ、  
セルゲイ・ニコラエキッチ君。』

セルゲイ・ニコラエキッチと云ふのは、丸くふくれた顔をした肥つた男であつたが、ま  
づ主人を眺めて、それから眼を天井へ向けた。

『私には初戀なんかありません。』彼はつひに口を開いた。『私は直ぐに二度目ので始めた  
のです。』

『どうしてそんな事があり得るでせうか？』

『事實は極く簡単ですよ。私が始めてある極めて綺麗な婦人の寵愛を得ようと骨折つた  
のは十八歳の時でしたが、まるでこんな事がもう珍しくもないやうな工合に追従をした  
ものです——後に他の女に追従したのちつとも變りはありませんでした。一層嚴密に

申しますと、私は六つの歳に子守女に惚れたのが最初で最後です——が、それももうずつと昔のことですから、その事件の細々したことは私の記憶から消えてしまひました。よしまたそれを思出したところで、誰が面白がるのですか？』

『それぢやどうしたものでせう？』と主人が口を切つた。『私の初戀も御同様あまり興味はありません。私はアンナ・ニコラエフナと、——つまり今の妻と知合ひになるまで、一度も戀をしたことはありません——それに私達の方では萬事、型のごとく行つたのです。雙方の父親が私達のために結婚の申込みをしてくれ、私達はやがて互にもう非常に氣に入つたので、そこで直ぐ様結婚してしまひました。だから私の話は二言ですんでしまひます。皆さん、打明けて申しますが、私は初戀の問題を持出したとき、あなた方に望をかけてゐたのです——あなた方は老人とは云へませんが、もう若くはない獨身者でいらつしやるから：：何か面白い話をして下さるでせう？ ウラヂミル・ペトロキッチ君。』

『成程私の初戀はありふれたものではないやうです。』と聊かためらひ氣味にウラヂミル・ペトロキッチは答へた、黒いしかしもう灰色がかつた髪をした四十恰好の男である。『ああ！』主人とセルゲイ・ニコラエキッチとは同時に叫んだ。『愈々妙だ！：：お話し下

さい！』

『よろしい：：いや、待て。いつそ話すのはよしませうよ。私は話と來たらとんと名人でない。私が話す乾燥無味な短いものになるか、だら／＼して間違つたものになるかです。だがあなた方さへ許して下さいれば、私は記憶に存してゐることを残らず手帖に書き込んで來て、あなた方の前で読み上げませう。』

友人等は最初は承知しなかつた。けれどもウラヂミル・ペトロキッチは彼の條件を主張した。彼等が二週間の後再び相會したときに、ウラヂミル・ペトロキッチは本當にその約束を果した。

手帖には次の事が書かれてあつた。

一

私は當時十六歳であつた。それは千八百三十三年の夏のことであつた。私はモスクワ



初  
の両親のもとに住んでゐた。彼等はカルウガ門の附近に、ネスクチニ公園にむかひ合つて、一つの別荘を借りてゐた。私は大學に這入る準備中であつたが、大して勉強もせず、またそれを格別急いでもゐなかつた。

531  
誰も私の自由を妨げなかつた。殊に最後の家庭教師からもはや監督を受けなくなつてからは、私は好きなことをしたものである。その家庭教師といふのは佛蘭西人で、自分が「爆裂弾のやうに」Comme une bombe—露西亞に落ち込んで来たと思はれるのをひどく氣にしてゐた、そして終日苦い顔をして寢臺の上ところがつてゐた。父は私をなげやりの親切な態度で取扱つてゐたが、母は私が一人息子だつたのに拘はらず、少しも私をかまつてくれなかつた。他の心配が彼女の全心を奪つてゐたからである。

まだ若くて頗る好男子だつた父は、打算上、彼女と結婚したのである。彼女は彼より十歳も年上であつた。母は悲しい生涯を送つた。始終昂奮した状態にゐて、嫉妬しては腹を立てゝゐた——しかし父の眼の前ではなかつた。彼女は彼をひどく恐れてゐた。彼の方では厳格な冷淡なひかへ目の態度を取つてゐた：私はあれ程落着きはらつて、自信が強くて、あんなに遺憾なく自己を抑へて行く人を見たことがない。

私は別荘で送つた最初の數週間を決して忘れぬであらう。天氣はうらゝかであつた。

私達は五月九日、ニコライ聖者の日に引越したのである。私は散歩をした——あるひは別荘の庭を、あるひは柵のうしろを。そしてその折には何かしら本を手にしたものである——大抵はカイダノフの世界史教科書であつた——けれどもそれが開かれたのは極く稀れだつた。これに反して、私はもう屢々高い聲で詩を朗讀した、私は随分澤山の詩を諳記してゐたのである。血潮は身うち煮え立つてゐるし、胸は哀愁に充ちてゐた——甘い、しかし同時に喜ばしい哀愁に充ちてゐた。常に何ものかを期待し、かつ恐れてゐた。あらゆるものに驚嘆し、あらゆるものを待ちかまへてゐた。私の空想は止む時なく速かに活動してゐた、云はば朝紅の時に、水燕が寺院の塔のまはりを飛ぶのと同じ工合に、たえず私の周圍を翔り廻つてゐた。私は思ひ沈んで悲しくなり、涙さへも流した。けれども、あるひは歌が、あるひは夕の美しさが、私の心の中に呼び醒ましたこの涙、この悲みから、春の緑のやうな泡立つ青春の生命の喜ばしい感情が湧き出るのであつた。

私は一頭の乗馬をもつてゐた。私はそれに自分で鞍を置いて、ひとりで何方かの遠方へ乗り出し、馬を疾驅させては、自ら競技中の騎士をもつて任じてゐた——風はどんな

にか喜ばしく私の耳のあたりを吹いたであらう！——いかなる楽しみをもつて、私は顔を空に向け、その輝く光と空色とを、私の多感な心に吸ひ込んだであらう！

思ひ出して見ると、當時は女の姿や、女の愛の概念は、殆んど一度もはつきりした形をして、私の胸に浮んで来なかつた。けれども私の考へたすべてのものの中に、私の感じたすべてのものの中に、半ば意識されない、もの恥かしいやうな、ある新しいもの、ある名状しがたく甘いもの、ある女性的なものの豫感が隠れてゐた……

この豫感は、この期待は、私の全身にしみわたつた。私はそれを吸ひ込んだ、それは各の血の滴しづくとともに私の脈管を押し流れた……そしてそれは間もなく實現せられたのである。

私達の別荘は柱廊ちゆうらうのついた木造きぞうの母屋と、二つの低い翼とで出来てゐた。左手の翼には安物の壁紙をこしらへる小さな工場があつた……私はよく其處へ行つて見た、十人ばかりの病身らしい縮毛ちぢれけの男の兒が、よごれた上衣を着、肉の落ちた顔をして、壓搾機の四角な棒を押しつける木製の楯てこ杆こにしよつちう飛び上り、そしてこの方法によつて、彼等の弱い身體からだの重みで、きらびやかな壁紙の標本を押し出すのを見るために。

右手の翼は空いてゐて貸家に出てゐた。一日あるひ——五月九日から三週間位の後に——この翼の窓の扉とが開けられて、二人の女の顔が現れた——何處かの一家がこの翼に越して来たにちがひない。私は母がこの日晝餐ひるめしのをり、料理番に私達の新しい隣人が誰だか聞いてゐたのを思出した。そして私がザシエキン公爵夫人の名前を聞いた時、彼女は一種の尊敬を表しなくてもなく、『ああ、公爵夫人ですか！』と言つた、……しかし彼女はそれにつけ加へた。『極く貧乏な公爵夫人に違ひない。』

『あの御宅では三臺の辻馬車でお出でになりました。』と料理番は恭しく皿を差出しながら言つた。『馬車は一臺も御持ちでないやうですし、道具も極く御粗末なもので。』

『さうですか。』と母は答へた。『けれども兎に角結構ですよ。——』

父は彼女を冷かに眺めてゐたので、母はだまつてしまつた。そして實際ザシエキン公爵夫人は裕福な筈がなかつた。彼女の借りた翼は幾分でも餘裕のある人達ならその中に住まない程に、古びて狭苦せまぐるしくて低かつた。——もつともこの一切のことは私の耳を掠めてすぎた。公爵の稱號は私には殆んど何等の印象をも與へなかつた——私はその少し前にシルレルの『群盜グロイセル』を讀んだのである。

## 二

私は毎日夕方に鳥をつけねらふために小銃をさげて自分の家の庭をうろつきまはる癖があつた。この用心深くて貪慾で狡猾な鳥に對して、私は疾くに深い憎惡を感じてゐた。その日も私は同じやうに庭へ行つた——そして無益に凡ての並木をさまよひ通したあげく、(鳥は私を見知つてしまひ、たゞ遠方で短い鳴聲を立てるばかりだつた。)私は偶然にとある低い垣根に近づいた。それは本來右手の翼の後にひろがつてゐて、その翼に附屬してゐる狭く細長い庭から、私達の領分を區分してゐるものである。頭を垂れて私は歩いて行つた。不意に人聲が耳に入つた。私は垣越しに目を放つと、化石したやうになつた——私の前には一種獨特の光景がはじまつてゐた。

私のまへほんの數歩のところ——緑の覆盆子の叢の間に、條の入つた薔薇色の着物を着て、頭に白い手巾を巻き付けた脊の高いすらりとした少女が立つてゐた。彼女の周圍には四人の青年が立つてゐた。そして少女は、かの、私はもう名前を忘れたが、子供達には甚だよく知られてゐる小さな灰色の花を取つて、順番に彼等の額を打つた。この花は小さな袋の形をしてゐて、それをもつて或るかたい物にぶつつけると、高い音を立ててはじけるのである。

青年等は喜んで彼等の額を差出した——そして少女の舉動には(私は側面から彼女を見てゐたのだが)何やら人を魅するやうな、命令するやうな、愛撫するやうな、快活なやうな、愛らしいやうなところがあつたので、私は驚嘆と喜悅とのために、殆んど叫び出さうとした程で、若しそのふるひ付きたいやうな指で、私の額をも打つてくれたなら、世界中のものを與へてもよいと思つた。小銃は私の手を這つて草の中へ落ちた。私は凡てを忘れてゐた。私の目はこのすらりとした姿、この頸、この美しい両手、この軽くほどけて白い手巾の下からこぼれ出てゐるブロードの髪、この半ば閉ぢられた大きな目、この睫毛、このやさしい頬に釘付けにされてゐた……

『君、若いお方、』と突然私の傍で誰かの聲がした。『そんな風に知らない婦人を見つめるのは一體禮儀にかなつたことでせうか?』

私は全身をふるはして、かたくなつてしまつた：私の傍の垣根のうしろに、黒い髪を短く刈つた一人の男が立つてゐて、私を嘲るやうに眺めてゐた。おなじ瞬間に、かの少女も私の方を振り返つた：私は、昂奮した生々した顔の中に大きな灰色の眼を見た——そしてこの顔中は俄かにふるへて笑ひ出した、白い齒は輝いた、眉毛はいさゝか滑稽につり上つた：私は火のやうに赤くなつて、小銃を取上げて、高いがしかし意地悪くはない笑に追はれて、私の部屋に走つて行き、寢臺に身を投げて、両手で顔を蔽うた。胸は烈しく鼓動した。私はひどく恥かしく感じた、がしかしうれしい氣持であつた。私はまだちつとも知らなかつた激動を感じた。

私は休息してから、身じまひをし、身體を綺麗にして、茶を飲みを下りて行つた。かの若い少女の姿は私の目の前に漂うてゐた。私の胸の鼓動はやんだ、が一種異様な快感が身にしみ通つた。

『お前どうかしたのか？』と父は不意に訊ねた。『鳥は打てたか？』

私は進んで彼に凡ての事を話してしまひたかつた。けれども私は自ら制して、たゞ微笑を洩らすのみだつた。

私は寢臺に行くと、自ら何故とも知らず、一本足で立つて三度ぐるりと身を廻はし、香油をふりかけて、身を横たへると、夜つびてぐつすりと思つた。夜明方に一寸の間目を覺まして、頭をもたげ、恍惚として身のまはりを見まはしたが、すぐまた寢入つてしまつた。

## 三

ELGIN

どうして彼女と知合になつたものだらう？——これが朝起きたときの私の最初の考であつた。

お茶の前に私は庭へ行つた、けれども垣根にはあまり近寄らなかつた。私は何人をも認めなかつた。

お茶の後に、私は別荘の前の街路を二三度往つたり來たりした、そして遠方から例の窓の方を横目で見た：窓掛のかけに彼女の顔が見えた、それで私は恐ろしくなつて、

急ぎ足にまた遠ざかつて行つた。けれども、私は彼女と近づきにならなければならぬと考へた、ネスクチニ公園前に展開してゐる砂原の上を不安らしく歩いて行きながら……しかし『どうして?』これが問題である。私は昨日の私達の邂逅の極く小さな出来事までも記憶に喚び起した。不思議にも私は、彼女が私を笑つたことをことさらはつきりと思ひ出した……

けれども私が昂奮して、いろ／＼な計畫を立てゝゐる間に、運命は既に私の爲めに世話を焼いてくれてゐた。

私の不在中に母は彼女の新しい隣人から、僅かに郵便爲替に使はれるやうな灰色の紙に書いて、焦茶色の封蠟で封じた一通の手紙を受け取つた。この汚ない手蹟と文法を無視した文章とで認めてあつた手紙の中で、公爵夫人は私の母に彼女の保護を願つた。

公爵夫人の斷言するところに依ると、彼女が甚だ重大な訴訟を提起してゐるため、彼女親子の運命を手中に握つてゐる、ある有力な方々と私の母が深い昵懇の間柄だと云ふのである。

『妾は身分ある貴婦人として、』と彼女は書いた。『身分ある貴婦人たる御許様におすがり

まゐらせ候。さればこの機會を利用致し候ふは、妾にとりては喜ばしき次第に御座候。』

結末に彼女は私の母をお訪ねしてもよろしきやうにと許容を乞うてゐた。私は母を不愉快な氣分に於て見出した。父は家にゐなかつた。それで彼女はその相談相手になつてくれる人を持たなかつた。身分ある貴婦人に、しかもその上公爵夫人ともある人に返事をしないと云ふのは出来ないことである。けれどもどうして返事をしよう——それが母を途方に暮れさせた。佛蘭西語で招待状を認めるのも彼女にふさはしくは見えなかつた。また、露西亞語の綴字と來ると、母は同様にあまり得意ではなかつた、彼女はそれをよく知つてゐたから恥のさらしくらべをしようとは思はなかつたのだ。

彼女は私の來たのをひどく喜んだ。彼女は私に直ぐに公爵夫人の許へ行つて、彼女に私の母が常に彼女の力の及ぶ限り、「閣下」のために盡力いたしますと云ふ事を口頭で申上げ、かつ一時頃に彼女のところへお出でになるように願つて來いと命じた。

私の祕密の願がこんなに思ひがけなく充たされると云ふことが、私を驚かし、同時に喜ばせた。けれども私はこの私をとらへた、當惑を面にあらはさなかつた、そして新しい襟飾と上衣とを着けるためまづ私の室へ行つた——私は家では、いやで仕様がなかつた

けれど、まだジャケットと折襟とをつけて飛び廻つてゐたのである。

## 四

かの翼の狭いむさくるしい控室へ入つて行つた時、私は思はず全身をふるはした。私  
は其處に暗い銅色の顔と、小さくて氣むづかしげな豚のやうな目をした、額と額に深  
い皺——私は私の生涯にまだこんな皺を見たことがない——のある一人の白髪の老僕を  
見出した。彼は皿の上にしやぶり盡くした鯡の脊骨を載せて、とつっきの室へつゞく扉  
のまへに足をとどめて、ときれ聲で言つた。

『何か御用ですか？』

『ザシエキン公爵夫人は御在宅でせうか？』と私は訊ねた。

『ウオニファティ！』と戸のうしろで脅かすやうな女の聲が叫んだ。

下僕は一言も云はないで私に背を向けた、そのをり私はたつた一つの赤い定紋入りの

ボタンのついた法被が背の方でひどくすり切れてゐるのを認めた。それから彼は皿を床  
板の上に置いて奥へ入つて行つた。

『お前は警察署へ行つてくれたのかい？』とおなじ女の聲でくり返した。

下僕は何やらぶつぶつ言つてゐた。

『何？ お客さまかい？』とその聲は再び耳についた……『お隣の若様だつて？ よろし  
い、お通し申せ！』

『さあどうぞ客間へお通り下さい！』と下僕は再び現れて言つた、それから彼は皿をま  
た床の上から取り上げた。

私は胸の動悸を強ひて抑へて、上衣と襟飾とをつまみ直して客間へ入つた。

それは小さなあまり綺麗とも言へない部屋で、貧乏くさいまづ急に掻き集めたとも言  
ひたいやうな道具が置いてあつた。

窓のところの取手のこはれた肘掛椅子には、凡そ五十前後の婦人がかけてゐた。醜い  
女で頭飾りもなく、緑色の古びた着物を着て、頸のまはりには、駱駝の毛糸で出来た派  
手な布を巻いてゐた。彼女はその小さな黒い目を射通すやうに私に向けた。

私はずつと進み寄つて、身をかどめた。

『私はザシエキン公爵夫人にお目にかゝる光榮を有しませうか？』

『ええ、私がザシエキン公爵夫人ですよ。あなたは、たしかW様の御息子さんでしたね？』

『全くそのとおりで。私は母に言ひつかつてまゐりました。』

『どうぞ、おかけなさい：：ウオニファティ！ 私の鍵は何處にあるんだい？』

私はザシエキン公爵夫人に、彼女の書面に對する母の返事を述べた。彼女はしまひまで私の言ふ事を聞いてゐたが、その折太い赤い指で窓板をこつこつ叩いてゐた。そして私が話し終つた時、彼女は今一度その目を私に向けた。

『本當に有りがたう。私はきつと上りませう。』と彼女はつひに言つた。『しかしあなたはまだほんにお若いことね！ ……失禮ですが、あなた一體おいくつです？』

『十六です。』と私は思はず躊躇して答へた。

公爵夫人は二三枚の書類らしい汚い紙を衣囊から取り出して、鼻のすぐまへにくつつけて整理をはじめた。

『それはいゝ年頃です。』と彼女は突然言つた、椅子の上で身をねぢ向けたり、彼方此方に動かしたりしながら。『どうぞね、ちつとも御遠慮なさらんように。私の家では極くかまひませんからね。』

あまりかまはなさずぎると私は考へた、無意識の嫌惡を抱いて、彼女の不恰好な一帯の姿を見わたしながら。

この瞬間に突然客間の他の方の扉が開いて、敷居の上に昨日の夕方庭で見た少女が現れた。彼女は片手を舉げた、彼女の顔を皮肉な微笑が掠め去つた。

『これは私の娘です。』と公爵夫人は、肘で少女をさし示しながら言つた。『ジノチカ、此方はお隣のW様の御息子ですよ。失禮ですが、あなたの御名前は？』

『ウラヂミル：：』と私は答へた、立上りながら、昂奮のために聲を細めながら。

『それからあなたの父名は？』

『ペトロキッチ。』

『私達の知合にも、やはりウラヂミル・ペトロキッチと云つて、有名な警部がありました——ウオニファティ！ 鍵は探さなくてもいゝよ。私の上衣にはひつてゐたから。』

若い娘は私を冷かすやうに眺めつけてゐたが、そのをり彼女は軽く瞬いたり、顔を少しばかり傍へ傾けたりした。

『私はもうウォルデマールさんにお目にかゝつたのよ。』と彼女は口を開いた。(彼女の聲の銀のやうな響は甘い痙攣のやうに私の身にしみわたつた。『こんなにお呼び申しても許して下さるわね?』)

『どういたしましたして!』と私はどもつた。

『どうしたわけで?』と公爵夫人は言つた。

彼女の娘は答へなかつた。

『あなたは今おいそがしくつて?』と彼女は言つた、やつぱり私を眺めながら。

『いゝえ、ちつとも。』

『ぢや、絲巻の手傳ひをして下さるでせう? 此方の私の部屋へいらしつて下さいな。』

彼女は私に顎で合圖をして、客間を出ていつた。私は彼女について出た。

私達の入つた室はいくらかましで、よりすぐれた趣味をもつて道具を配置してあつた。たゞし、私はこの瞬間に殆んど何も認める事は出来なかつた。私は夢を見てゐるやうに

身を動かした。私は全身に限りなき幸福を感じた。

若い公爵令嬢は腰をおろして、赤い毛絲の束たばを持出して、彼女の向うの椅子をさし示しながら、それを骨折つてほどいて、私の両手に置いた。彼女は一種のふざけたやうな、悠々たる態度をもつて、形ばかり開いた唇のまはりに、依然たる嬉しげな、さうな人の悪い微笑をうかべて、無言のまゝ、このすべてをなした。彼女は毛絲を一枚の折り曲げた骨牌のまはりに巻き出した。そして、突然すゞしいはれやかな目で私を眺めたので、私は思はず眼を伏せた。彼女の殆んど全く閉ぢられてゐた眼が、一杯におし開くと、彼女の顔はすつかり變つてしまつた——一道の光明が顔の上に注がれたとも言はうか。

『ウォルデマールさん、昨日あなたは私のことを何と御考へになつて?』と彼女は短い沈黙のちに言つた。『あなたはきつと私のことを悪くお思ひになつたでせう?』

『私は：：お嬢さん：：私は何も考へませんでした：：どうして私がそんな：：』と私はどぎまぎして答へた。

『まあお聞きなさい。』と彼女は答へた。『あなたは私をまだ御存知ないのよ。私は本當に不思議なのよ、私はいつとも人に眞實のことを言つて貰ひたいの。あなたは十六だつて言



ひましたね、それに私はもう二十一でせう。私はあなたよりずっと姉さんよ。だからあなたには私にいつも本當の事を言はなくちやいけませんよ……それから私の言ふ事をお聞きなさいよ。』彼女はつけ加へた……『私の顔を見るんですよ……なぜあなたは見ませんか？』

私は一層狼狽したが、しかし思ひ切つて眼を彼女に向けた。彼女は微笑した。しかしそれは以前のとは違つて好意を見せた微笑であつた。

『私の顔を御覧なさいよ。』と彼女は親切さうに聲をひそめながら言つた。『私は不愉快ぢやありませんもの。あなたの顔は、私氣に入つたのよ。私達は友達になりますわね。それから私は、私はあなたに氣に入つて？』と冗談のやうにつけ加へた。

『お嬢さん……』と私は口を開いた。

『まづ第一に、あなたは私のことをジナイイダ・アレクサンドロフナと呼んで下さいな、それから第二に——子供のくせに。』——（彼女は云ひ直した。）——『若い男のくせに、感じた事を眞直に言はないなんて、何と云ふ辯でせう？ そんなことは大人にゆづつてしまはなくちやいけません。私はあなたの氣に入らないでせうか？』

彼女がこんなに色々私に話してくれるのは非常に愉快だつたけれど、私は少しく侮辱されたやうに感じた。私は彼女の相手がもう子供でないといふ事を示さうとした、それで出来るだけ率直な眞面目な顔付をして云つた。

『もちろん、あなたは私の氣に入りました。ジナイイダ・アレクサンドロフナさん。私はそれをちつともかくさうとは思ひません。』

彼女はしづかに頭を振つた。

『あなたには家庭教師が付いておますか？』と彼女は不意に訊いた。

『いゝえ、すつと前にもう家庭教師はゐなくなりました。』

私は嘘を吐いた。私が佛蘭西人の教師の指導をはなれてから、まだ一月もたつてゐないのだ。

『ああ！ さうですか。成程、あなたはすつと大人になつていらつしやるのね。』  
彼女は私の指をかるく叩いた。

『手を眞直にしてゐて下さいな。』さう言つて彼女は熱心に總糸を解きはじめた。

私は彼女が目を上げないでゐるのをもつけの幸ひに彼女を観察しはじめた、——はじ

めはこつそりとやつた。それからだん／＼と大膽に無遠慮になつた。彼女の顔は私には昨日の夕方よりは一層チャアミンダに見えた。顔中はすべて美しく、利口さうで、愛らしかつた！

彼女は白い巻帷ルンドロの掛けてある窓の方に背を向けてゐた。この巻帷を通して射し込む日光は、彼女の黄金色に輝く綿毛わたげのやうな捲髪や、處女らしい頸や、しなやかな撫肩なでかたや、靜かに息づいてゐるやさしい胸に軟かな光を注いでゐた：私は彼女をぢつと見てゐた——そして彼女はどんなに私の間近まぢかにゐたであらう！——私はもうすつと昔から彼女と知合ひの間で、彼女と知合ひになる迄は、何も知らず、何も經驗しなかつたやうな氣持がした：彼女は黒みがかつたもう疾とくに着古きふるした着物を着て、前掛まえかけをかけてゐた。私はどんなにかこの前掛と着物との皺を一つ一つ撫でてやりたかつたらう。彼女の小さな靴の先きはその着物の下からのぞいてゐた。私は一種の尊敬をもつてこの小さな靴にお辭儀じぎをした。此處こゝに私は彼女の前にすわつてゐるのだと私は考へた、今私は彼女と知合ひになつたのだ：ああ、何と云ふ幸福だらう！私は恍惚うつろひとしてほとんど椅子から飛上らうとした、けれども盗み食ひする子供のやうに、少しばかり兩足をぶら／＼させた

ばかしであつた。

私は水の中の魚のやうにいゝ氣持であつた。そして永久にこの部屋から出て行きたくなく、この場所を見捨てたくなかつた。

彼女はゆつくり目蓋まぶたをもたげた、彼女のはれやかな眼は親しげに輝きながら再び私を眺めた。そして彼女は再び微笑した。

『まあよく私の顔を見てらつしやるのね。』と彼女は言つて、指でおどして見せた。

私はあかくなつた：彼女はすべてを悟り、すべてを見る、と云ふ考が私の頭に閃ひらめいた。またどうして彼女がすべてを悟らず、また見ないわけがあらう！

突然隣の部屋で何かの物を叩く音がした——軍刀サベルがちや／＼鳴つた。『ジイナ！』と公爵夫人が客間サロンで呼んだ。『ベロフゾロフさんがお前に猫の兒を持つて来て下すつたよ。』

『猫の兒ですつて！』とジナイイダは叫んで、電光のやうに速かに椅子から飛上つて、總糸かさいとを私の膝の上に投げつけて驅け出して行つた。

私も同じやうに立上つて、毛糸の束と總糸かさいととを窓板の上に載せて置いて、客間サロンに入ると、驚いて立ちどまつた。部屋の眞中まんなかには前足の爪をむいて一匹の小さな猫の兒が横はつ

てゐた。

ジナイイダは猫の前に膝をついて、用心ぶかく小猫の口を持上げてゐた。公爵夫人の傍には、殆んど窓と窓との間の壁中を占領して、ブロンドの縮れ髪に、薔薇色の頬をした、眼玉の大きな一人の頑丈な若い驃騎兵が立つてゐた。

『何て滑稽な獣でせう！』とジナイイダは幾度か叫んだ。『それに眼は灰色ぢやあなくつて緑色よ、それに、まあ大きな耳だこと！ 本當に有りがたう、ヴィクトル・イェゴリッチ！ あなたは本當にいゝ人だわね！』

私が昨日の夕方見た若い人達の一人だつたその驃騎兵は微笑して、腰を屈めた。そのをり彼は拍車を打ち合せ、軍刀の輪をがちや／＼鳴らした。

あなたは昨日耳の大きいぶちの小猫が欲しいとおつしやつて下さいましたね——これがそれですよ。御分りでせう、あなたのお望みは私には命令なのです。』  
そして彼は又も身を屈めた。

小猫は微かに鳴いて、床板を嗅ぎはじめた。

『ひもじいんだわ！』とジナイイダは叫んだ。『ウォニファティ！ ソニヤ！ 牛乳を持つ

てお出で！』

古びた黄色な着物を着て、色の褪めた布を頸に巻きつけた小間使が牛乳を一杯入れた皿を持つて部屋へ入つて来て、それを小猫の前に置いた。小猫は飛上つて目をばちばちさせて、それから舐め出した。

『まあ何て薔薇色の小さな舌でせう！』とジナイイダは言つた、殆んど床板にくつつく位の頭を傾けながら、すぐ猫の鼻の下から斜にのぞき込みながら。

小猫は満腹して、ごろごろ喉を鳴らし出した、そして可愛らしく前足をひつくり返した。ジナイイダも起上つて、小間使に向いて、無造作に言つた。

『これを彼方へ連れてお行き。』

『小猫の代りに私はあなたの御手を願つてもよろしいでせう？』と驃騎兵は言つた、笑ひを装ひながら、その新しい制服にかたく押し入れた大きな全身を伸ばしながら。

『両方とも。』とジナイイダは答へて、彼に両手を差出した。彼がその両手を接吻してゐる間に、彼女は私を肩ごしに眺めてゐた。

私はおなじ場所に身動きもせず立つてゐた、そして笑つたものか、それとも何とか

口に出したものの、それとも黙つてゐたものかわからなかつた。突然控室の開いた戸から、自宅の下僕のフヨオドルの姿が私の目に附いた。機械的に私は彼の處へ出て行つた。

『何か用事か?』と私はたづねた。

『あなたのお母様の御言ひ付けでまゐりましたが、』と彼は小聲で言つた。『お母様はあなたが返事を聞いてお歸りにならないので御立腹ですよ。』

『ぢや私はもう長いこと此處にゐたのかしら?』

『一時間あまり。』

『一時間あまり!』と私は思はず鸚鵡返しに言つて客間へ歸つて行つて、別れを告げながら、兩足をばたばたさせ初めた。

『何處へいらつしやるの?』と令嬢は訊ねた、驃騎兵のうしろからのぞきながら。

『私は家へ歸らなくちやなりません。それでは私。』と私は老夫人に振り向いてつけ加へた。『奥様が二時頃にお出でになりますと申してよろしいのですね?』

『ええ、さう仰しやつて下さい!』

公爵夫人は急いで艀煙草入を取り出して、騒々しく嗅ぎ出したので、私は身顫ひした。

『ええ、さう仰しやつて下さい!』と彼女は繰返した、むせながら、濡れた眼で瞬きながら。

今一度私はお辭儀して身を返して部屋を出て行つた、若い者が他人に後を見られてゐるなど思ふ時に覚えるあの不愉快な感情を背負ひながら。

『また自宅へいらつしやることを忘れちやいけませんよ、ウォルデマールさん、』とジナイイダは叫んで、更らに笑ひはじめた。

何だつてあの人はよく笑ふのだらう? と私は考へた、私に一言も口を利かないで、黙つた不満らしい顔付をして後からついて来るフヨオドルと一緒に家へ歸りながら。

母は私を叱り飛ばした、そして私の歸つて來なかつたのをひどく驚いてゐた。一體何が私をあんなに久しく公爵夫人の住居に引留めたのだらう?

この事について私は母に答をしないでしまつた。それから私の部屋へ入つた。突然私はひどく悲しい氣持になつた：私は辛うじて涙を抑へることが出來た：私はかの驃騎兵が嫉ましかつた。

## 五

その約束通り公爵夫人は私の母を訪れた。彼女は母に氣に入らなかつた。私は彼等の會談には立會はなかつたが、食事の折り母は父にむかつてザシエキン公爵夫人が：『*femme très-vulgaire*』(種々雑人。)に見えたといふことや、彼女が自分のためにセルゲイ公爵によろしく取りなしてくれと願つてひどく退屈させた事や、彼女が色々な取引や訴訟——『*vilaines affaires d'argent*』(金銭上の難)——に従つてゐることや、彼女が非常な悪人に違ひないと云ふことなどを物語つた。けれども母は彼女を令嬢と一緒に明日午餐に招待したことを附け加へて言つた——『令嬢と一緒に』といふ言葉を聞いた時私は鼻を皿に突つ込んだ。——彼女は兎に角隣人でもあり、名ある人でもあるからと云ふのであつた。

すると父は、この婦人が何人だか今漸く思ひ出したと言つた。彼はその青年時代に死んだザンシエキン公爵を知つてゐたさうである。それはすぐれた教育は受けてゐたが、空虛な腐敗した人物だつたさうで、長いこと巴里に滞在してゐたため、交際社會では彼のことを『*le Parisien*』(巴里)と呼んでゐたと云ふ。彼はすこぶる金持であつたが、その全財産を賭博ですつてしまつた、それから何等かの理由から、多分金のために、ある行政官吏の娘と結婚した——もつとも彼はもつといふ選擇をする事が出来たのだがと父は冷かな微笑をもつてつけ加へた——それから投機に手を出して、形なしに破産してしまつたといふ事であつた。

『どうか金を貸してくれと云はなければいゝんですがね。』と母は言つた。

『それは随分言ひかねないね。』と父は落着いて答へた。『夫人は佛蘭西語を話すかい。』

『まづいつたらないですよ。』

『ふむ。もつともそんな事はどうでもいゝんだ。令嬢も招待したつて言つたね？ きつと何だよ、令嬢の方は極く愛らしい教育のある娘だらうよ。』

『ああ！ ぢやお母さんには似てゐないに違ひありません。』

『それに父親にも似てゐない。』と父は答へた。『あの男はなるほど教育はあつたが、しかし馬鹿だつた。』

母は嘆息して、物思はしげな風になつた。

父はそれきり黙つてしまつた。私はこの對話の間にひどく不愉快な氣持になつた。

食事がすむと私は庭へ行つた、が小銃はもたなかつた。私は「ザンエキン家の庭」には近づきまいと決心をした。けれどもある抗ひがたい力が私を彼方へ引寄せた——そしてそれは無駄ではなかつた。まだ垣根まで行かぬうちに、私はジナイイダを認めた。此度は彼女は一人でゐた。彼女は小冊子を両手でもつて、小徑をゆるやかに彼方へ歩いてゐた。彼女は私を認めなかつた。

私は彼女に自分の傍をほとんど通りすぎさせようとしたが、突然他の考を起して咳ばらひをした。彼女はふり返つた、が立止らないで、その圓い麥藁帽の幅の廣い鮮青色のリボンを片手で整へて、私を眺めると、殆んど目に付かぬ位の微笑をして、またその書物に目を注いだ。

私は帽子を取つて、暫く立止つてゐたが、それから身を返して、沈んだ氣持で立去つた。

“Que suis-je pour elle ?” (彼女は私をどう思つてゐるだらうか!) と私は考へた——何故かは知らず——佛蘭西語

で。

其時私は私の後に聞き馴れた足音を耳にした。振返つて見ると、——父が例の速い軽い足どりで私の方へ歩いて來るのだつた。

『あれが公爵夫人の娘か?』と彼は私に訊いた。

『さうです。』

『お前はあの娘を知つてゐるのか?』

『今朝公爵夫人の處であの人に逢ひました。』

父は立止つた、それから急に靴の踵で身體をぐるりと廻して、また引返して行つた。

彼はジナイイダに近づくと丁寧に挨拶をした。彼女も挨拶を返した、が一種の驚きがないでもなく、書物を取落してしまつた。私は彼女が父を目送してゐるのを見た。父は常に極めて優雅な一種獨特の歩き方をしたが、服装は質素にしてゐた。彼の姿が私にこんな恰好よく見えた事はなく、彼の灰色の帽子がほんの少しばかり光らせた縮れ髪の上にこんなに美しく載つてゐた事はなかつた。私はジナイイダの處へ行つて見ようと思つたが、彼女は私の方には目もくれず、書物をまた取上げて、そして立去つてしまつた。

## 六

その晩とその翌朝中を、私は一種落膽したやうな無感覺の状態にあつた。思出して見ると、私は勉強しようとしてみて、カイダノフを取上げた——けれどもこの有名な教科書の長つたらしい行や頁は、徒らに私の目の前に輝いてゐた。私は続けさまに十度も、『ユウス・ケエザルは戦士の勇敢によりて卓越したり。』といふ文句を読んだ、——私は何も理解しなかつた、そしてたうとう書物を投出してしまつた。

午餐前に私は再び香油をふりかけて、再び燕尾服を着け、襟飾を巻きつけた。

『何故そんなことをするんだい？』と母が訊いた。『お前はまだ大學生ぢやないんだよ、それに試験に及第するかどうか知れたものかね。そのうへほんのついでに此間ジャケットを新調したばかりぢやないか。あれを譯なしに投げすてることはなりませんよ！』

『お客様が来るんでせう。』と私はほとんど絶望してつぶやいた。

『馬鹿をいふ！ 一體どんな客だと思つてゐるんです？』

私は服従しなければならなかつた。私はまた燕尾服をジャケットに取り替へた。けれども襟飾はそのまゝにして置いた。

食事時間の半時間ほど前に公爵夫人は娘を連れて姿を現した。老夫人は私にもう馴染になつてゐるあの緑色の着物のほかに、緑色の肩掛をまとうて火焰色のリボンのついた古風な冠り物をかぶつてゐた。彼女は自分の手形のことから話し出した。彼女は自分の貧乏を嘆息したり、愁訴したり、悲んだりして、ちつとも遠慮をしなかつた。彼女は自宅にゐる時と同じやうに、騒々しく鶯煙草を嗅いだり、椅子の上で氣儘に振向いたり、身を動かしたりした。彼女は自分が公爵夫人だといふことを少しも思出さないやうであつた。

これに反してジナイイダは極めて嚴格な、殆んど高慢とも云ふべき態度を取つてゐた。彼女は眞實の公爵の令嬢らしく振舞つた。彼女の顔の上に私は眞面目と冷かな落着とを讀んだ——私は彼女を、彼女の目付を、彼女の微笑を再び認識することは出来なかつた、彼女はこの新しい姿でも私に極めて美しく見えたのだけだ。

彼女は青白い色の模様のついた軽いバレエ服を着けてゐた。彼女の髪は長い捲毛まきげをなして英吉利風に頬の上に垂れてゐた。この縮れ髪がとりすました顔の表情と相ならんで極めてよく見えた。

食事中父は彼女の傍かたはらに坐して、彼特有の優雅な落ち着いた鄭重をもつて、その隣となり客をもてなしてゐた。たゞ折々彼は彼女を眺めた——そして彼女もまたたゞ時々彼を眺めた、しかし妙な工合に、いな殆んど敵對するやうに！ 談話は佛蘭西語で行はれた。私の記憶によると、ジナイイダは彼女の發音の正確によつて私を驚かした。これまで同様、公爵夫人はちつとも遠慮をしなかつた。彼女は澤山食べては食物を讀ほめ立てた。母はたしかに彼女が腹立たしくなつたらしく、一種の悲しげな侮蔑をもつて彼女に答へてゐた。父は折々殆んど目につくかつかぬ位眉をひそめてゐた。

ジナイイダも母の氣に入らなかつた。

『あれは高慢ちきな娘ですね。』と彼女は次の日言つた。『何だつてあんなに高慢ちきなんでせうね？ 私はその本當に知り度いんです——avec sa mine de Grisette！』(あんなにグリゼット  
うな顔付をしてさう)』

『お前はまだグリゼットを見たことはないんだらう。』と父は言つた。

『仕合せにまだ見ません！』

『勿論仕合せなことさ……だがそれぢやどうしてお前はグリゼットなんかを引合ひに出せるね？』

ジナイイダは私には聊かの注意も拂はなかつた。食事がすむと間もなく公爵夫人は別れを告げた。

『私はあなた方の御庇護を希望いたします、マリヤ・ニコライエフナさんに、ピョートル・ワシリッチさん。』と彼女は息もつがずに母や父に向つて言つた。『どうなるものですか！ 苦しい時も多かつたが、もう過ぎてしまひました。それでも私は閣下と呼ばれる身分なのですがね。』と彼女は不愉快な笑ひ方をしてつけ加へた。『でも何も食ふ物がなくちや、名譽も何もあるものですか！』

父は彼女のまへに恭しく身を屈めて、控室の扉のところまで見送つて行つた。私は短かいジャケツを着て、其處に立つたまま、死刑囚のやうに前の床の上を見てゐた。ジナイイダの私に對する様子は私をすつかり悄氣させてしまつた。けれども彼女が通りすぎ



る時に急しく、彼女の目に以前の親切な表情を見せて、私にかう囁いた時には、私の驚きはどんなに大きくなつたらう。

『八時頃自宅へいらつしやいな、——だが間違なくね、よござんすか！』と……

私は僅かに両手をもち上げることが出来たばかり——けれども彼女は白い飾帯を頭に巻きながら、もう立去つてゐた。

## 七

正八時に私は例の燕尾服を着、髪たばの束を高く額の上にかきあげて、公爵夫人の住まつてゐる翼の控室へ入つて行つた。下僕しもべは私を氣むづかしげに眺めて、いやいやながら腰掛から立上つた。客間では愉快さうな聲がしてゐた。私は扉を開くと、吃驚びっくりして引下つた。部屋まんなかの眞中には若い公爵令嬢が椅子の上に立つて、紳士帽を前に捧げてゐた。椅子のまはりには五人の男が押し合つてゐた。彼等が両手をその帽子の中へ差し入れようと試み

ると、彼女はそれを高く持上げて烈しくゆすぶつた。彼女は私を認めると叫んだ。

『お待ちなさい、お待ちなさい！ 其處に新しいお客様が見えたから、あの方にも札を上げなくちやいけません！』そして身輕に椅子から飛下りながら、彼女は私の上衣の袖口をつかまへた。『まあこちらへいらつしやいよ！ 何故そこに立つていらしつやるの？』

：：皆さん、あなた方を互に御紹介いたしますことを御許し下さい！ 此方このみかたはウォルデマールさんとおつしやつて、宅のお隣の御令息さんです——それから此方は。』とつけ加へて、彼女は私の方に向き直り、順々に紳士諸君を紹介した。——『此方はマレフスキ伯爵、ドクトル、ルウシンさん、詩人のマイダノフさん、退役大尉のニルマッキイさん、それからあなたがもう御存知の驃騎兵フザアルのペロフゾロフさんです。どうぞ、皆さん、お互に仲よくしあつて下さい！』

私は誰にも挨拶しなかつた程にもう狼狽しきつてゐた。ドクトル、ルウシンと呼ぶのは、庭であんなに用捨なく私に恥をかゝせたあの黒鳶色の紳士だと云ふことを認めた。残りの人々は未知の人であつた。

『伯爵。』とジナイイダは言葉をつゞけて、『ウォルデマールさんのために札を一枚お書き

下やう。』

『それは不當です。』と伯爵は軽い波蘭土のアクセントをもつて答へた。彼は上品の服装をした頗る綺麗なブリュネットの男で、表情の豊かな鳶色の眼と、小さな幅の狭い鼻とをして、小さな口の上に薄い髭を蓄へてゐた。『あなたは我々と一緒に賭事はなさらないでせう。』

『それは不當です。』とペロフゾロフと退役大尉も繰返した。大尉は醜いと云ひたいほどの菊眼石面に、アラビヤ人のやうな縮髪をした、やゝ猫背で、足の曲つた四十前後の男で、肩章のない軍服を釦をしめずに着てゐた。

『札を一枚お書き下さいと申しますのに。』ジナイイダは繰返した。『何といふ反抗でせう？』

『ウォルデマールさんは始めて來られたのだから、今日は法律を適用することは出来ません。』

『不平を言はないで書いて下さい、私の希望ですよ！』

伯爵は肩をそびやかしたが、素直に頭をかどめて、筆を手にとり、紙を一切れ引裂い

てそれから書き初めた。

『ぢや少くとも私がウォルデマール君にこの事件が何だか説明して上げる事をお許し下さい。』とルウシンは嘲るやうな調子で言ひはじめた。『お若い方、御らんない、我々は賭事をするのです。御令嬢は罰を甘受なさるんで、仕合せな札の當つた者は御令嬢の御手に接吻する権利を得るのです：私の言つたことがわかりましたか？』

私は彼を一寸見たばかりで、相變らず昏迷した人間のやうに其處に立つてゐた。ジナイイダはまた椅子へ飛び上つて、あらためて帽子をゆすぶり出した。皆の者は彼女を取巻いた。私もつめ寄つた。

『マイダノフ。』と若い公爵令嬢は、やせた顔と、小さな疲れた眼と、ことの外長い黒髪とをもつたすうりとした若い男に言つた。『あなたは詩人だから寛大でなくちやいけません、だからあなたの札をウォルデマールさんにゆづつてお上げなさい。さうすればあの方は一度の代りに、二度の機會があるわけですからね。』

けれどもマイダノフは拒むやうに頭を動かして、髪をゆすぶつた。私は他の人々のする通り手を帽子の中へ差入れて、一枚の札を取つてそれを開いて見た：ああ、その中

を見て、『接吻』と云ふ言葉を読んだ時私の心持はどんなであつたらう！

『接吻！』と私は覺えず叫び立てた。

『萬歳！ あの方が當つた！』と若い公爵令嬢は口をはさんだ。『まあ嬉しいのね！』

彼女は椅子から下りて、はれやかに愛情を含んで私の顔を見るので、私は心臓が裂けさうであつた。

『そしてあなたも、あなたも矢張り嬉しくつて？』と彼女は私に訊いた。

『私？』私はどもつた。『私……』

『君の札を私に賣つて下さい！』と私の耳の直ぐ傍で、突然ベロフゾロフが怒鳴り立てた。『私は君にその代り百ルウブリを呈する！』

私がひどく怒つた眼付をもつて驃騎兵に答へたので、ジナイイダは手を拍つた、そして、ルウシンは叫んだ。

『萬歳、萬歳！ ……然し。』と彼は言ひつゞけた。『すべての規則が嚴重に守られるやうに警戒するのは、式部長としての私の義務です。ウォルデマル君、君は片膝をつきなさい、それは我々の法律ですから。』

ジナイイダは私の前に立つて、少しく頭を横に傾けてゐた——見たところどうしても私をよりよく觀察するためらしかつた——そして勿體振つた顔付をして私に手を差し出した。私は目の前が茫となつた。私は片膝をつかうとしたが、兩膝について、不器用千萬に唇をジナイイダの指に觸れたため、彼女の爪が、軽く鼻の先を引つかいた。

『よろしい！』とルウシンは叫んで、私を助け起した。

賭事は續けられた。ジナイイダは私の隣にすわつた。

いかなる罰を彼女は案出しなかつたらう！ 其中でも彼女は「立像」を表現しなければならなかつた——それで彼女は臺座に醜男のニルマッキイを選んだ。ジナイイダは彼に横になるやうに、尙其上、顔を下に向けるやうに命令した。

高い笑聲は暫くやまなかつた。几帳面な上品な家庭に育つて、孤獨に内氣に生ひ立つた子供の私に取つては、すべてのかうした喧騒や、この放逸な、殆んど亂暴とも云ふべき歡樂や、この未知の人々との馴れぬ交際やが、いたく頭にのぼつた。

私は酒に酔つたやうであつた。私は外の人々より、より高く笑ひ、より騒ぎ出した。それでイウエルスキイ門の吏員と何事か協議中だつた老公爵夫人が、私を見るためその男

と一緒に出て来た程であつた。けれども私はあらゆる事に無頓着になつて、他の人々の嘲弄や猜疑の眼に少しも注意を拂はなかつた程に限りなき幸福を感じてゐた。

ジナイイダは矢張り私を特別扱ひにして、少しも自分の傍から離さなかつた。何かの罰の時、私は彼女と並んですわつて、同じ一つの絹布で身體を覆はなければならなかつた。私は彼女に「私の秘密」を洩らさずにはゐられなかつた。私達二人の頭が突然蒸暑い、半ば透明な匂はしき闇の中ですり寄つたことや、この闇の中で彼女の眼が近くにやさしく輝いたことや、開かれた唇が燃えるやうな息をしたことや、齒が輝いたことや、彼女の髪の端が私をくすぐつて、燃え立たしたことを私は記憶してゐる。私は沈黙した。彼女は意味ありげにするさうな微笑をして、やがて私の耳に囁いた。「さあ、まだなの？」けれども私はたゞ赤くなつたばかりで、笑つて傍を向いた、そして殆んど息をすることも出来なかつた。

私達は賭事にも飽いてしまつて、細繩を撚り始めた。ああ、私はいかなる歡喜を感じたであらう、私が彼女を眺め入つて我を忘れ、彼女に激しく指を打たれた時、また後で放心してゐるやうな顔付をしようとなつたとわざと骨折つた時に、——けれども彼女は私をから

かつて、私の差出した手にも觸れなかつた。

その間にも、私達は此の晩ありとあらゆることを爲さざるはなかつた！私達はピヤノを弾いたり、歌つたり踊つたり、それからジプシイの群を演じたりした。ニルマッキイは熊の變装をさせられた。皆は彼に鹽を入れた水を飲ませた。マレフスキイ伯爵は色々なカルタの藝當をやつて見せたが、最後にカルタをかきまぜてから、ウイスト(カルタの一種)をやつて、のこらずの切札を一人占めにした。それに對してルウシンは『彼に祝辭を呈するの光榮を有した。』マイダノフは彼の詩「殺人者」の斷片を私達に朗讀してきかせた。

——(私達は當時はまだいはばロマンティックの情熱に驅られてゐたのだ。——彼は此詩に黒い表紙と、深紅の表題とを附けて出版しようとなつて居た。イウエルスキイ門の吏員は膝の間から帽子を盗まれた、そして其れを返して貰ふためには、コサックの踊を踊るようにと強ひられた。老人のウオニファティは頭巾で飾られ、若い公爵令嬢は男の帽子を被つた：：のこらずの事を數へ上げるのは到底不可能のことである。たゞベロフゾロフだけは絶えず隅の方に引込んでゐた：：時々彼は血が眼にまで上つて何だか今にも私達の方へ飛びかゝつて来て、私達を鋸屑のやうに八方に投げ散らして仕舞ひさうに見えた。

併しジナイイダが彼を眺めて指で脅すと、再び隅の方へ這ひ込んだ、陰氣な激昂した顔をして。

つひに私たちは疲れてしまつた。令嬢は彼女自身の言つたやうに疲れることを知らなかつた——どんなに叫んでもさわいでも彼女は取亂すやうなことはなかつた——しかし同様に非常な疲労を覚えて休息をのぞんだ。夜の十二時ごろ、晚餐が出た。それは一片の古い乾いた乾酪と、それから何だか冷たい打肉に細かくきざんだ火腿を混ぜたものから成立つて居たが、それは私にこれまで食つたあらゆる打肉よりは一層うまいやうに思はれた。葡萄酒は一瓶しか出なかつたが、瓶は至極珍らしく見えた。色は暗くて頸はふくれてゐた。中味の葡萄酒は薔薇色の香ひがした。もつとも誰もこれを味ふ人はなかつた。極度の疲労と言ひたい程に疲れて、且つ幸福に、私は例の翼を見捨てた。別れに臨んでジナイイダは力をこめて私の手を握り、又もや謎のやうな微笑をして見せた。

重く濕つぽい夜氣が私の顔へ吹き附けた。何だか嵐が起りさうに見えた。黒雲が立昇つて絶えずその煙に似た輪郭を變じながら、空をすぎ去つた。暗い木々の間には、そよ風が不安らしくふるへて、地平線の彼方のどこか遙かなところでは、雷が怒を洩らすやうに鈍くごろごろ鳴つた。

私は後部の階段をすぎて自分の部屋に入つた。私の給仕は板敷の上に横はつて寝てゐた。私は彼の上を踏み越えざるを得なかつた。すると彼は目を醒まして私を眺めてゐたが、それから母が又私に對して腹を立て、又もや私を迎へにやらうとしたが、しかし父がそれを止めたと云ふことを告げた。(私はこれまで一度も母に『おやすみなさい。』を言はずして、且つ其のまへに母のめぐみを乞はずして寝たことはなかつた。)しかし何とも仕様がなかつた!

私は給仕に、自分で着換へるからと云つて燈火を消した。けれども着物も脱がず、横になることもしなかつた。

私は椅子に腰を掛けた、そして魔法をかけられたやうにして長いこと坐つてゐた。私の感じたことは甚だ新しく且つ甘かつた……殆んど不愉快な程。私はまあはにかむとも言ひたい氣持で、いさゝか振り向きながら、其處に坐つたまゝ、徐かに呼吸をし、そして黙つたまゝで時々笑ふばかりだつた、私の經驗したことを思ひ出しながら。それから私は私が戀をしてゐるので、彼女がその相手で、これが戀と云ふものではあるまいか

と考へては心も凝結する思ひであつた：ジナイイダの顔は闇の中で絶えず私の周囲に漂うてはなれようもしない様に思はれた。彼女の唇は相變らず謎のやうに微笑した。彼女の眼はいさゝか傍の方から私を見つめた。何かたづねるやうに、物思はしげにやさしく——私が別れを告げたその瞬間とまるつきり同じやうに。

たうとう私は立上つて、爪先で寢床のそばに歩み寄つて、激しい動搖によつて自分の身體を充たしてゐるあるものを妨げはせぬかと氣遣ひでもするかのやうに、着物を脱がうともしないで、用心して頭を枕の上にのせた。私は眼をも閉ぢないで横になつてゐた。間もなく一種の弱い光線が、たえず室にさして居るのを認めた：自分は起上つて窓の方を眺めやつた。横木は明らかに鈍く輝やく圓板から見わけがついた。

嵐だなと私は思つた。そしてそれは本當に嵐だつた。しかし間もなくすつかり止んでしまつて、雷鳴さへも聞えなくなつた。たゞ空には長い枝葉に分れた、輝きのない電光が閃いてゐた。否むしろ閃いてゐたと言ふよりも、ふるへてゐた、そして臨終の鳥の翼のやうにたゞまれたまゝにびくびくしてゐた。

私は起上つて窓ぎはに寄つて、朝までそこに立ちつくしてゐた：電光は一瞬間も癒

癒を止めなかつた。それは俗に云ふ通り雀の嵐であつた。私は無言の砂つ原や、ネスクチニ公園の暗い木立の影や、遠方の家の黄色な前面などを見たが、それ等は弱い閃きのする毎に、同様に震へるやうに見えた：私は絶えず前方を見つめて離れ去ることが出来なかつた。この無言の稻妻の絶え間なき光線は、私の心中に痙攣する彼の無言の祕密の激動に相應する様に思はれた。

薄明るくなりはじめた。朝焼けが深紅の汚點の姿で現はれた。太陽ののぼるにつれて、電光はだん／＼とより青白くなりより短くなつた。やがてだん／＼閃くのが稀になつてたうとう消え失せた、夜明の無味な疑惑なき光のために呑み込まれて。

また私の心中にも電光は消えてしまつた。私は非常な疲労と安心とをおぼえた：しかしジナイイダの姿は依然として私の心のまへに漂うてゐた。たゞこの姿も今やひとりでに落着いた様に見えた。遠く逃げてゆく白鳥が沼の草をはなれるやうに、其の姿も、他のそれを取りめぐらしてゐる引き付ける力のない外の姿から離れてしまつた。私は寢入りながらうちとけた尊敬の念を以て、その姿にこれ限りと迫り寄つた：：おお、やさしき感情よ、柔らかき調子よ、感動させられる魂の穩かなるおちつきよ、戀の最初の激

動の人知らぬ喜びよ！——汝等はどこに行つたか、汝等はどこに行つたか？

## 八

翌朝、私がお茶に降りて行くと、母は私を叱つた、——けれども豫期してゐたほどに激しくはなかつた——そして私に昨晚のことを話すようにと要求した。私は言葉少なに報告をして、その際いろいろな細目は省いてしまひ、その全體に罪のない色彩を與へようと骨折つた。

『兎に角それは決してComme il faut(よこぎ)な人達ぢやありません。』と母は注意した。『お前は試験の準備をして、爲めになることもしないで、あの人たちのところで、遊び廻つてはいけません。』

私は私の仕打に對する母の心配はこの數語で盡きるのを知つたので、返事をする必要はないものと思つた。ところがお茶の後で、父は私を腕に抱へて一緒に庭に行つて、ザ

シエキン家で見たま柄をのこらず私に話させた。

父は不思議な印象を私にあたへた——一體私たち父子の關係は極めて異様なものであつた。彼は私の教育には殆んど全く關係しなかつた。のみならず、私の話をする事さへも極めて稀であつた。併し一度も私をいぢめたことはなく、一度も恥かした事はない。彼は私の自由を重んじたのである。のみならず彼は、さう言つてもいゝならば、私に對して丁寧であつた：：たゞ彼は私が特に彼に接近することだけを許さなかつた。彼は私を愛して居て、いくら見ても飽くことはなかつた。彼は私には男子の模範とおもはれた——そして、ああ、私が常に彼の拒絶的の手に感じなかつたら、私はいかに熱情的に彼と結合したであらう！ 彼が欲しさへしたならば、彼は殆んど瞬く間に唯の一言で、ほんの一寸動いただけで、私の心中に無限の信賴を喚起することが出来たであらう：：私の魂は彼に開かれた、私は聰明な友達か、思慮ある教育者に對する様に彼と無駄話をした：：すると彼は突然私を見すてゝ了ひ、彼の手は再び私を突き退けて了ふ、親しく靜かではあるが——然し其手は私を突き退けて了ふのであつた。

時折、彼は愉快な心持に襲はれると、自分の方からやつて来て、子供のやうに馬鹿に

なつて、氣儘放題に私と一緒にさわぎまはるのであつた。(彼はあらゆる烈しい身體の運動を受けてゐた。)或時——これはたつた一度であつたが！——彼は私が殆んど泣出し

さうになつた位、優しく私を可愛がつてくれた：

けれども彼の愉快な氣持や、且つ又彼のやさしさは何等痕跡もとゞめないで消えてしまつた。そして二人の間に起つた事柄は何等の未來の希望をも私にあたへなかつた——それは宛かも私が凡てのことを夢にでも見たかのやうであつた。時々、彼の聰明な、美しい、生々した顔を見てゐると、私の心はふるへて私は全心を彼に打込んだものだ：：彼は私の心中に起ることを感じて居る様であつた、それは彼が通り過ぎながら、私の頬を撫でるのを常とし、それから遠ざかるかそれとも何事かを始めるか、それとも突然すつかり冷淡になるかしたからである——彼が冷淡になり出すと、私は直ぐに引退つて、そして同様に冷淡になるのであつた。

私に對する彼の愛情のまれな發作は、決して私の無言の、しかし了解し得らるゝ嘆願によつて喚び起されはしなかつた。それはいつでも不意に来るのであつた。後になつて父の性格について考へて見ると、私は、私や家庭生活は彼に取つてどうでもよかつたの

だといふ結論に到達した。彼は何か外の事を受し、此事で十分の慰安を見出してゐた。

『お前が出来る事なら何でも自分でそれを取れ、然し自分を他の人にやるな、自分自身自身のものであると云ふこと——その中に一切の處世術はあるのだ。』と彼はある時私に言つた。又ある時は私は若い民主主義者としての資格で、彼の前で自由に就いて談ずる非禮をさへ敢てした。(彼は其の日は私の名づくる通り「機嫌がよかつた。」そんな時には何でも彼と話すことが出来るのである。)

『自由！』と彼は繰返した。『だが、お前は一體何が人間に自由を與へ得るか知つてゐるか？』

『それは一體何ですか？』

『意志だよ、——自分の意志だよ。それが自由よりも尊いある力を貸すのだ、意欲することを知れ、さうしたらお前は自由であり、且つ支配する事が出来るだらう。』

父は何よりも先きに先づ生きんことを欲した——そして彼は生きた：：恐らく彼は、例の「處生術」を享受することが長く自分に許されてゐないことを豫覺してゐたのであらう。——彼は四十二歳といふ齡で死んでしまつた。



ザンエキン家を訪ねたことを、私は詳細に父に物語つた。半ば注意して、半ばぼんやりして、彼は私の話を聞いてゐた。其の折には腰掛に坐つて、乗馬用の鞭の先で、砂の上いろいろな形を畫いてゐた。時々微笑した、全く妙な親しげな樂しげな風に。そして私に對して會釋して、短い問や答をもつて私にからかつた。はじめ私はどうしてもジナイダの名前を言ふことが出来なかつた。けれど私は辛抱が出来なくなつて、彼女を褒めだした、父は微笑をつゞけてゐた。それから彼はもの思はしげになつて、伸びをして、そして立上つた。

私は父が家を出掛ける時に、馬に鞍を置けと命じた事を記憶してゐる。彼は卓越した騎手のりてで、ラリー氏よりもずつとより早く悍馬を馴らしてしまふことが出来た。

『お父さん、私も御一緒に乗つて行つちやいけませんか？』と私は訊いた。

『いけません。』と彼は答へた、彼の顔は例の冷淡な表情をした。『お前が乗りたいなら、ひとりで乗るがよい、それからね、おれは馬車で行かないつて馱者に言つてくれ。』

彼は私に背を向けて急いで遠ざかつた。私は彼を目送した——彼は門のかけに消えてしまつた。私は彼の帽子が生垣に沿うて動いて行くのを見た。彼はザンエキン家に行つ

たのである。

彼はあの家に一時間以上止つてゐなかつたが、しかしそれから直ぐ町に行つて、夕方になつてやつと歸つて來た。

晝食後私はザンエキン家に行つた。客間サロには公爵夫人ばかりが居た。夫人は私を見ると、留針で頭の頭巾の下を搔いて、突然私に嘆願書を寫しては下さらんかと頼んだ。

『喜んでいたします。』と私は答へて椅子の端に腰かけた。

『たゞね、少し力の這入つた字で書いて下さらなさいけませんよ。』と公爵夫人は汚ない紙を渡しながと言つた。『それからね、直ぐ今日の中に出て来ませんか？ 若様。』

『ええ、今日中に寫して上げます。』

隣室につゞく戸がやつと分る位に開いて、其の間からジナイダの顔が現れた——蒼白で、思ひ沈んだ様子で、髪はなげやりに後に垂らしてあつた。彼女は大きな、冷やかな眼をして私を見て、それから再びそつと戸を閉めた。

『ジナ——ジナや！』と老夫人は呼んだ。ジナイダは返事をしなかつた。

私は夫人の嘆願書を受取つて家へ急いだ。それからその晩その筆寫にかゝつてゐた。

## 九

此の日から私の「狂熱」は始まった。それは始めて官職につく人と同じ様な感じだったので私は記憶してゐる。私はもう子供ではなくなつた。私は戀をしたのである。私はこの日から狂熱がはじまつたと言つたが、又それに附け加へて、私の苦悶もこの日から始まつたと言ひたいのである。

ジナイイダと離れて居ると、私は苦惱に食ひつくされた。頭は最早や何事をも理會することが出来ず、何事にも手が着かず、終日止む時なく、孜々として、たゞ彼女の事ばかりを思つてゐた：：苦惱は私を食ひつくした：：しかし私は彼女の前に行つても、少しも軽い心持にはならなかつた。私は嫉妬を起した。私は私の價値のないのを意識した。私は馬鹿のやうにふくれて見たり、馬鹿のやうに彼女に奴隸的の服従をして見たりした——しかしそれにもかゝはらず、私は一種不可抗の力によつて彼女の方に引寄せられた、

それでその度に内心の幸福の無意識のふるへを覚えながら、彼女の部屋の敷居をまたいだ。

ジナイイダは私が彼女を戀してゐることを直ぐに悟つた、私もそれを彼女にかくさうとは思はなかつた。彼女は私の熱情を楽しんで、慰みものにし、私を墮落させては苦しめた。他人のために最大の歡喜と最深の苦痛との唯一の源泉となり、無拘束無責任なる原因となるのは、非常に楽しい事である——そして私はジナイイダの手玉にかゝつては軟かい蠟のやうなものであつた。

しかし私のみが彼女に戀したわけではない。彼女の家を訪ふ凡ての男子は、彼女に對してまるで狂人のやうになつて——彼女は彼等凡てを鎖につないで握つてゐた——彼女の足下に伏した。或は希望を、或は心配を彼等の心中に起させて、自分の機嫌次第で、彼等をもてあそぶのが彼女を楽しませた。——（彼女はそれを稱して「人々をぶつつけ合はす」と言つてゐた。）——併し彼等は自分を防禦しようとは考へずに、喜んで彼女に服従してゐた。

彼女の力のある美しい性格には、狡猾と呑氣とわざとらしいところと無邪氣なところ

と、安靜と活潑との、一種の妙な魅力ある混合があつた。凡て彼女が爲たり言つたりすることや、あらゆる動作には、一種軽い魔力が漂ひ、あらゆることに獨特の戯れる力があらはれてゐた。彼女の顔は始終變つたが、やはり同じく戯れてゐた。それは殆んど同時に嘲弄の念や、心ありげの物思や、情熱やらをあらはした。例へば日光の輝いてゐる風の日に雲の影が漂ふやうに、いろ／＼な感情が絶えず彼女の眼や唇の上を軽く且つ速かに漂ひ去るのであつた。

彼女の崇拜家は皆な彼女には缺くべからざるものであつた。彼女はベロフゾロフの事は、屢々「私の猛獸」と呼んだり、時には又單に、「私の人」と呼んだりしてゐたが、彼は彼女のためなら火の中へでも飛びこみさうだつた。彼は精神的な能力から言つても、其の他の特長から言つても、何等の見込はなかつたが、外の人々はたゞ戯談じやうだんにやつてゐるにすぎないと言つて、始終彼女に結婚を申込んでゐた。マイダノフは彼女の心の詩的方面に相應してゐた。彼は殆んどすべての作家と同じく、かなり冷淡な人間ではあつたが、彼女に向つて、又恐らく自分自身に向つて、彼女を神様にしてゐると云ふ確言を絶えず與へてゐた。彼は果しもない詩に於て彼女を歌ひ、奇妙な半ば不自然な半ば眞實の感激

を以て、彼女の前で朗讀するのであつた。彼女は實際に對して同情を有し、そして彼を愚弄することは極めて少なかつた。しかし彼女は特に彼を信仰して居た譯ではない、そして彼の作物を聞き終つた時には、彼をしてプウシキンの或る詩を朗讀させた。それは言ふ所によると、空氣を清潔にする爲めなのである。

ドクトル・ルウシンは口先きでは嘲笑家で皮肉家であつたが、誰よりもよく彼女を知つて居り——陰でも、面と向つても小言は言つたけれども、他の人々よりは餘計に彼女を愛してゐた。彼女も彼を尊敬はしてゐたが、さればとて用捨はしなかつた——そして時々彼も自分の勢力範圍だと云ふことを感ぜしめて、妙に意地の悪い娛樂にしてゐた。

『私は浮氣もので、心なんか持たないのよ。私は喜劇役者のやうな性格ですわね。』彼女はある時私の目の前で彼に向つて言つた。——『ああ、それで結構よ。だから何うぞ手を私に下さいな、私は留針を突込むわ、そしたら貴下あなたもこの若い人に對して耻ぢなさるでせう。きつと貴下は痛いけれども御笑ひなさるに違ひない、さあ、眞理の友さん。』ルウシンは顔を赧めて、後ろを振向いて、唇をかみしめた、けれどもたうとう手を差し出した。彼女が留針を刺すと、彼は本當に笑ひ出した：：彼女も笑つた、留針をかなり深

く刺して、そして徒らに彼方此方に動かしてゐる彼の眼を眺めながら。

私のもつとも了解に苦しんだのは、ジナイイダとマレフスキイ伯爵との關係であつた。彼は姿がよくて、器用で、聰明であつたが、併し十六歳の子供の私でさへ、彼の性格には何だか疑はしい點、偽りの點を見出した、そしてジナイイダがそれに氣が付かないのを不思議に思つた。しかし多分彼女は此の虚偽の點を認めてはゐても、それを嫌はなかつたのかも知れない。彼女の不規則な教育や、異様な交際や、習慣や、始終母親の留守なことや、貧乏や、家庭の亂脈や——この若い娘の喜んだ自由を始め凡てのものが、其の周圍全體に立ちまさつてゐるといふ意識が、彼女の心中に妙な、物事を輕蔑するところのやりつばなしや、なげやりを増長させた。何んなことが出来ても、ウォニファディが來て砂糖が足りませんと申し出ても、何かきたならしい無駄話が始まつても、お客同志が喧嘩をはじめても、——彼女はたゞ縮れ髪をふるはせて、『馬鹿らしい！』と言ふだけで殆んど氣にしなかつた。

これに反して私はマレフスキイが狐のやうに狡猾らしくおづ／＼と、彼女の傍に進み寄つて、愉快さうに彼女の椅子の凭手にもたれかゝつて、得意顔に媚びるやうな笑ひ方を

して、何か彼女の耳にさゝやくのを見ると、身體中の血潮が煮えくり出した。其の折彼女は兩腕を胸の上に組んでぢつと彼を見つめて、自分も微笑して頭を振つた。

『一體何が面白くてマレフスキイさんを歓迎なさるんですか？』と私はある時訊いて見た。

『ええ、あの人はあんなに美しい上髭をもつて居るでせう。』と彼女は答へた。『しかしそれは貴下の知つたことぢやありませんよ。』

『然しね、私があの人を愛してゐると思つちや駄目よ。』と彼女は又或時私に言つた。『いやなこと。私上から見下さなきやならんやうな人間を愛することは出来ないわ。私は私を制馭するやうな男が欲しいの：しかしそんな男は見附かりつこはないわ。神様は有難いこと！ 私は誰の手にも陥らないでせう。誰にも誰にも！』

『あなたはそれぢや一度も人を愛さないのでですか！』

『だつて私はあなたを愛して居るんぢやなくつて？』と言つて彼女は手袋の端で私の鼻を打つた。

さうだ、ジナイイダは私を慰みものにして居るのだ。三週間もつゞけて私は毎日々々

彼女を見た——彼女は私に對して爲さないことはなかつた！ 私の家に來るのは極めて稀であつた、又私は少しもそれを悲しまなかつた。私の家に來ると、彼女は世間並の女、公爵の令嬢に變つてしまふ。そんな時には私は彼女を避けた。私は母に氣附かれはしないかと恐れてゐた。母はジナイイダに對して、何等特別の好意を抱かず、且つ信用しないやうな目付で私たちを監視してゐたのだ。

父を恐れることは遙かに少なかつた。彼は何だか私には氣が附かない様だし、又母と話すことも殆んど無かつた。けれどもこの僅かばかりの話はきはめて聰明で意味のあるものに見えた。私は勉強を止めてしまつて、足を縛られた甲蟲の様に、絶えずなつかしい翼の周圍をうろついてゐた。私は永久にそこに留まりたい様な氣がした：：けれどもそれは不可能であつた。母が小言を言ふし、それにジナイイダまでが私を屢々追拂つた。そんな時には私は部屋の中に閉ぢこもつてゐるか、さもなければ庭の一番端のところを探して、ある高い石造の温室の廢墟によぢのぼつて、兩足を街路にむいた壁にぶらさげて、さうして幾時間もそこに坐つて、何ものも見すにすつと前方に目をこらしてゐた。私の傍には壁にまみれた細葉刺草いらくさの上をもものうげな白い蝶がとびまはつてゐた。厚顔な雀

が一羽私より遠くない、壊れた赤煉瓦の上にとまつて、腹一杯に囁りはじめた、絶えず全身を振ぢまはしながら、尾を擴げながら。二三羽の鴉が始めはこわくであつたが、ある樺の木の裸の梢に高くとまつて鳴き出した。風と太陽とは其の木の細い枝におだやかに戯れてゐる。ドン寺院の鐘の響が折々、靜かに陰氣にひゞいて來る——私はそこにちつと坐つて、或は見或は聞いた。私の胸は一切のもの、苦惱や歡喜や、未來の事物の豫感や、人生の憧憬や人生の恐怖やを合せた名づけがたき感情に充たされてゐた。私は當時はまだこのことに就いては理解も持たず、心中に湧き立つ一切のものに名を附けることは出来なかつた——さなくばたゞ一つの名前をもつてそれに名をつけたであらう、ジナイイダと云ふ名前をもつて。

ジナイイダは相變らず私を弄んでゐた。私は昂奮して渴望した。忽ち彼女は突然私をつき放してしまふ。すると私は彼女に近寄ることも、彼女を眺めることも敢てなし得なかつた。

私は彼女が數日間つゞけて私に對して極めて冷淡であつたことを記憶してゐる。私はすつかり臆病になつてしまつた。そして卑怯にも翼に忍んで行つて、老夫人を味方にし

ようと試みた、彼女は丁度そんな時にはひどく喧嘩したり、どなつたりするのに願慮せず。彼女は手形一件がうまく行かないので、もう二度も知事と争論をした：

ある時私はおなじみの垣沿ひに庭を歩いて行き、ジナイイダを認めた。彼女は両手にからだ身體を支へて、ちつとも動かずに芝生に坐つてゐた。私は用心して再び遠ざからうとした、然るに彼女は突然頭をもちあげて、何か命ずるやうな合圖をした。私は根が生えたやうに立止つた。私は直ぐには彼女の心を理解しなかつた。彼女は其の合圖をくりかへした。直ぐ様私は生垣を飛びこえて、大喜びで彼女の方へ駆け付けた。けれども彼女は一瞥をもつて私を突き戻して、彼女から二歩ほど前の地面をさし示した。私はどきまぎして、何うしていゝか分らず道の端に跪いた。彼女の顔色はいたく蒼ざめて、あらゆる顔付は悉く、非常な激しい苦惱と非常な疲労とを語つて居るので、私は胸を押しつけられるやうで、思はず『あなたはどうかすつたのですか?』と囁いた。

ジナイイダは手を私に差出し、それから草の莖をむしつて噛み碎いて、出来るだけ遠くへ投げ棄てた。

『あなたは私を愛して下さつて?』とつひに彼女は問うた。『さう。』

私は返事をしなかつた——又何の爲めに返事をする必要があらう?

『さう。』と彼女はくり返した、いつもの調子で私を見つめながら。『さうだ。まるで同じ眼だわ。』と言ひ足して思ひに沈み、両手で顔を掩うた。『私もう何もかも厭になつた。』と彼女はさゝやいた。『私は世界のはてまでも行つて仕舞ひたい、とても辛抱が出来ない、私はもうどうしていゝか分らない：：それから彼の行末はどうなることだらう! ああ私は苦しい氣持になつた：：ああ、ほんとに苦しい!』

『どうしたのです?』と私はおづ／＼尋ねた。

ジナイイダは返事はしないで、たゞ肩をそびやかした。私は跪いたまゝで、一層深く心配して彼女を見つめた。彼女の言葉はいづれも私の心に深くきざまれた。此の瞬間において私は彼女の悲しんでゐるのを見なくてもよければ自分の命でも喜んで投げ出したやうな氣がした。私は彼女を見上げた。そして彼女がこんなに苦しい氣持のする理由わけは分らなかつたが、それでも私は想像することが出来た——その時突然彼女は堪へがたき苦悶の發作ほつきに驅られて、庭へ行つて、死んだやうに地上にぶつ倒れた。

周圍はことごとく明るくそして緑であつた。風は木立の葉にさわさわして、たゞ時々

蝦夷莓の長い枝をジナイイダの頭上にゆすぶつた。どこやらでは鳩が鳴いてゐるし、蜂は乏しい草の上を低く地に添うて飛び廻りながら唸つてゐた。上には空が青く輝いてゐた——そして私はいたく悲しかつた……

『私に何か詩をよんで聞かして下さいな。』とジナイイダは言つて、臂を突いた。『私はあなたの詩の朗讀をきくのが好き。あなたは歌の調子でおよみなさるのね、けれどもちつともかまひませんわ。それは若いしるしですもの、「グルジエンの丘の上に」を讀んで下さいな。けどまあお坐りなさいよ。』

私は坐つて、そして「グルジエンの丘の上に」を讀んだ。

『愛しいではゐられないから！』とジナイイダはくり返した。『詩といふものは實際にないものを私達に言ふから美しいんだわ、それは在るものよりも好いばかりでなく、眞實にも近いものですわね……愛したくても愛することの出来ないものを、愛しいではゐられないんだわ！』

彼女は再び沈黙したが、突然身ぶるひをして立上つた。

『行きますせうよ。マイダノフがお母さんのところに来てゐるから。あの人は私に詩を持

つて来たんだけれども、私が出てしまつたの。あの人も今は同じやうに悲しんでゐますよ……だつて仕方がないんだもの！ つかあなたも経験なさるのでせうから……私を怒らないで頂戴！』

ジナイイダは激しく私の手を握つて、先に立つて急いだ。私たちは彼女の翼へ歸つて行つた。マイダノフは私たちの前で丁度版になつたばかりの彼の「殺人者」を讀み出した。けれども私は彼を傾聴しなかつた。彼は歌ふやうな調子で彼の四脚長短韻をどなつた。變化のある韻は、空洞のやうな高聲で、鈴の音のやうに響いた。私は始終ジナイイダの方ばかり見つめてゐた、彼女の最後の言葉の意味を理解しようとして絶えず骨を折りながら。

『あるひは秘密なる競争者が

思ひもよらず汝を突き落せしか？』

と突然マイダノフは例の鼻聲で叫んだ——私とジナイイダの視線は出會つた。彼女は目を伏せた。そして彼女の頬にはかすかな紅をさした。私は彼女の顔の赧くなつたのを認めると恐ろしさのために全く凝結した。この前から私は彼女のために嫉妬を起してゐたのが、此の瞬間に於て始めて、彼女は戀をしてゐるのだと云ふ考が私の頭にひらめいた。

『ああ、彼女は戀をしてゐるのだ!』

## 十

この瞬間から、私の本當の煩悶ははじまつた。私は頭をめちゃ／＼にして考へたり鑿穿したりして、出来るだけこつそりではあつたが、目を離さずにジナイイダを觀察してゐた。彼女は變化した、それは明白である。彼女は獨りで散歩を——長い散歩をするやうになつた。ちつとも客に顔を見せない事さへ屢々あるし、自分の室に幾時間も獨りで居ることもある。こんなことは以前は少しもなかつたのだ。突然私は非常に鋭敏になつた——若しくは少くともさうなつたやうに信じた。『あの人ぢやないかしら、それともあの人はまださうぢやないかしら?』と私は自分に問うて見た、頭の中でいそがしく彼女の崇拜家を一人々々思ひ出しながら。マレフスキ伯爵は（これを認めるのはジナイイダのために耻づるところだが）外の何人よりも危険だと私はひそかに思つた。

しかし私の鋭い眼光は自分の鼻の先までしかとどかなかつた。そして私の不審な様子は誰の目にも觸れたらしい、少くともドクトル・ルウシンはもう直様私の心を見抜いてしまつた。もと／＼彼も近頃同じやうに變化してゐる。瘦せてしまつて、もと／＼通りよく笑ひはするが、しかし其の笑は妙に空虚な、意地の悪い短い聲であつた。そして以前彼特有のものだつた輕妙な反語や放縱な皮肉は我にもあらぬ神經的な短慮に變つてしまつた。

『君は始終こゝで何をなさるので、若いお方?』と或時彼は私と二人きりでザシエキンの客間にゐた時、私に言つた。(家の令嬢はまだ散歩から歸つて來ないし公爵夫人の叫聲は中二階から聞えてゐた、彼女は小間使と喧嘩をしてゐた。『君は年の若いうちに物事をならつて勉強なすつた方が爲になりますよ——一體君は何をしてゐるんです?』

『私が家で勉強して居るか居ないか、何うして御存知です?』私の答はいくらか尊大ではあつたが、しかし聊か狼狽氣味がないでもなかつた。

『それは結構な御勉強でせう!』しかし君はそれに對して興味をもたれないやうに思はれますね。いや、私は君と争はうとは思ひません——君位の年頃ではそれがあたりまへ



です。けれども君は極めて不幸な選擇をなすつた。此處がどんな家だか、君は分らないのですか？』

『私はあなたのお言葉がわかりません。』と私は言ひ返した。

『これが分らないのですか？ それはます／＼いけません。我々のやうな獨身ものはこへ來てもいゝのです。何の不都合なことがありません。我々はすれつからしの人間です。どうしたところで我々を屈服させることは出來ないので。ところが君はまだ皮が軟かい。此處の風は君には毒ですよ——私の言ふことをお信じなさい。君はこゝの風に中<sup>あ</sup>てられるかも知れませんが。』

『何うしてそんな？』

『君は今の所では先づ健全でせうね？ 君はまづ／＼ノルマルな状態でせうね？ 君が感ぜられることは君に取つて有益で効能のあることでせうか？』

『でも私が一體何を感じてゐるのでせう？』と私は訊いた——が、心の中ではドクトルの言ふのが尤もだと白状せざるを得なかつた。

『ああ、お若い方！』ドクトルは此の言葉の中に何か私に對して非常な侮辱になること

でもあるかのやうな表情をもつて言ひ續けた。『君の心におこることをいくら隠さうとなさつても、有難いことには君の顔の上にもやんと書いてありますよ。それに何だつて言ひ争ふのです？ 私だつて此處に來るんぢやありません若し何なら……（ドクトルは齒を食ひしばつた。）……若し私がこんな愚物でなかつたらね。私は君の様な聰明であつて、此處で君の周圍に起つてゐることが分らないと云ふのは不思議でなりませんね！』

『では一體此處では何事が起つたのです？』と私は急いで口をはさんで、そして耳を聳てた。

ドクトルは一種獨特のアイロニカルな同情をもつて私を眺めた。

『私のことだつていけないが。』と彼は獨り言のやうに言つた。『君にそれを言ふ必要は充分ある。一言で云へば、』と聲を勵ましてつけ加へた。『くり返して言ひますが、此處の空氣は君のためにならんです。君は此處で好い氣持がするでせう、成程、温室は氣持のいゝ匂がする——しかし其の中に生活することは不可能です。分りましたか、君はもう一度カイダノフを手にしなさい！』

公爵夫人は室へ入つて來て、ドクトルに向つて齒が痛いと言へ出した。後からジナイ

イダも出て来た。

『あれだ。』と公爵夫人は附け加へた。『ドクトルさん、何うぞあの子をお叱りなすつて下さい。終日氷水ばかり飲んでゐるのですよ。あんなことをして、あの弱い胸がたまつたものでせうか？』

『何故、あなたはそんなことをなさるのです？』とルウシンは問うた。

『それは何んな悪い結果になるのでせう？』

『何んな悪い結果だと仰しやるのですか？ あなたは風邪かぜを引いて死なないとも限りません。』

『本當ですか？ 實際？ ぢやあ、かまふことはないわ——私はそれでも結構！』

『さうですか！』とドクトルはつぶやいた。公爵夫人はもう出て行つてゐなかつた。

『さうですよ！』と彼女は繰り返した。『一體世の中のものはそのそんなに愉快なものでせうか？ まあ、まはりを御覧なさいな……何うです、美しいでせうか？ それともあなたは私がそれを悟りもせず、感じもしないものと御考へなさいますの？ 氷水を飲むのは私楽しみなのですもの。あなたなどは一瞬間ひとときの楽しみのために失つてはならぬ位、この

人生を尊いものと眞面目に斷言なさるでせうよ——私はもう幸福なんてものは、話にさへしたくないわ。』

『ふん、成程。』とルウシンは答へた。『我儘と片意地……此の二言で貴女あなたの性格は言ひ盡されます。此の二言の中にあなたの性質の凡てがあるのです。』

ジナイイダは神経的に笑ひ出した。

『あなたは遅れておしまひでしたのね、ドクトルさん、あなたは間違つた觀察をしていらつしやる。あなたは眼がとどかないのよ……眼鏡をお掛けなさいな。私は我儘ですのぢやありません。あなたと私自身とをからかふ——それは何て面白いこととせう！……それから片意地と云ふことに就いては——ウォルデマルさん。』と彼女は突然言ひ足して、足をばた／＼させ、『あなた、そんな陰氣に顔をなさるもんぢやありません。私、人に同情せられると我慢がしきれなくてよ。』

彼女は急に室から出て行つてしまつた。

『此處こゝの空氣は君には有害です、お若い方。頗る有害です。』とルウシンは今一度私に言つた。

## 十一

其日の晩ザシエキン家には常時の連中が集まつてゐた。私もそこにゐた。

話はマイダノフの詩に及んだ。ジナイイダは全く正當な賞讃をした。

『けど、どんなものでせう。』と彼女は彼に言つた。『若し私が女詩人だつたら、もつと違つた材料を選ぶでせう。多分、それは皆馬鹿げてゐるでせうけれど、私は時々妙な考が頭に浮んで來ます。殊に寢入れない時、夜明前、空が灰色や薔薇色になり始める時分に……たとへば私が……あなた方、お笑ひなさらんでせうね?』

『いや何うして、何うして!』と私たちは皆同音に叫んだ。

『私なら。』と彼女は言ひつゞけた。兩手を胸に組み、眼を傍へ外らしながら。『私なら若い娘たちの大勢が、夜、靜かな河にうかんでゐる大きな端艇ボートに乗つてゐるところを歌ひますわ。月は照つてゐるし、娘たちは皆白い着物を着て、頭には白い花環を載せて、唄

を歌つてゐるのですよ——あの、そら、一種の讚歌をね。』

『いや、わかりました、わかりました、さ、それから。』とマイダノフは意味ありげにまた夢見るやうに言つた。

『突然岸邊きしべに、騒聲や、笑聲や、松明たいまつや、太鼓の音がする……それはバックカント（註。希臘神話の酒神バックスに仕ふる女神）の群れで、歌ひ騒ぎながら駆けつけて來たのだわ。詩人さん、この光景を寫し出すのはあなたの本領ですわ……たゞ松明が赤くて、煙がさかんに立つて、それからバックカントたちの目が花環の下にきらきら光つてゐることだけは是非書いていたゞきたいのよ。それからね、花環は暗くなくちやいけません。それからあなたは、虎の皮や、酒盃や、それから黄金、澤山の黄金をお忘れなすちやいけません!』

『その黄金はどこにあるんです?』とマイダノフは平たい髪の毛を後に撫で下ろし、鼻の穴を大きくしながら問うた。

『何處つて、肩やら手やら足やら、身體中にだわ。昔時の婦人は足の關節にはみな金の指輪をはめてゐたと云ふでせう。バックカントたちは端艇の娘たちを呼び戻します。娘たちは讚歌をうたふのを止めます——そのさきを歌ふことは出來ないので、よ、けれども身

動きもしません。流れはみなを岸へ連れて行きます。するとまあ、突然そのうちの一人がしづかに立上るのです……これは大變美しくうつさなくちやいけませんよ……娘が月光のもとにしづかに立上つて、その友達が驚いてゐるところはね……娘が船の縁を越えようと、バックントたちは娘を取り巻いて、夜の闇の中に連れて行つてしまふ……此處で圓柱の間の煙を書いて下さい……それからみんなごつちやになつてしまふ、たゞ娘の叫聲だけがまだ聞えて、その花環は岸邊に残されてゐるのです。』

ジナイイダは沈黙した。『おお、彼女は戀してゐる！』と私は再び考へた。

『それで全體ですか？』とマイダノフは訊いた。

『ええ全體よ！』と彼女は答へた。

『題目が大きな詩にはちとつまらなすぎますね。』と彼は眞面目な顔付で言つた。『しかし抒情詩にはあなたのお考を用ひませう。』

『ロマンティック風にですか？』とマレフスキイが訊いた。

『勿論、ロマンティック風に、バイロンの詩風で。』

『私の考ではバイロンよりもユウゴオの方が一層適切だらうと思ひますね。』と若い伯爵

は氣乗りのしないやうに言つた。『彼の方が一層面白い。』

『ユウゴオは第一流の作家です。』とマイダノフは答へた。『そして私の友達のタンコシエエフは彼の「エル・トロバドル」と云ふ西班牙小説で——』

『ああ。あの疑問點をあべこべにしてある本ですか！』とジナイイダが遮つた。

『さうです。それは西班牙人の習慣ですよ。まあお聞き下さい、タンコシエエフは——』

『ああ、あなたは又古典派と浪漫派の議論をはじめなされるのね。』とジナイイダは彼の話を遮つた。『いけませんよ。それよりも何か遊び事をしませうよ！』

『賭事でも？』とルウシンが言つた。

『いゝえ。賭事は退屈だわ。「くらべつこ」をしませうよ。』

（此の遊戯はジナイイダが自分で發明したのである。それは何か品物を名ざして、皆それを何か外のものと比較しようと努める、そして一番いゝ比較を見出したものが褒美を貰ふのだ。）

彼女は窓のところに寄つた。太陽は今しも沈んだところである。空の高いところにはまだ長い赤い雲がかゝつてゐた。

『あの雲は何に似てゐます?』とジナイイダは問うた。そして我々の返事も待たないで、自分で言つた。『私はクレオパトラがアントニイを迎へに乗つて行つた黄金の船に懸つてゐたあの紫の帆に似てゐると思ふわ。マイダノフさん、あなたはつい此間私にその話をなすつた事を、覚えていらつしやるでせうね?』

「ハムレット」に出て来るポロニヤスのやうに、私たちは皆、あの雲はたしかにその帆を思ひ出させると、私たちの中の一人も之れ以上の比較を見出すことは出来ないと決めてしまつた。

『アントニイは其のときいくつでしたらう?』とジナイイダが訊いた。

『兎に角彼はまだ若かつたのです。』とマイダノフは人を信じさせるやうな調子でくり返した。

『失禮ですが、』とルウシンは口を出した。『彼はもう四十を越してゐましたよ!』

『四十を越してゐたのですつて!』とジナイイダはくり返した、彼にちらと目をくれながら……

其の後間もなく私は家に歸つた……『彼女は戀してゐる!』と、私の唇は覺えずさゝや

いた……『しかし誰を?』

## 十二

幾日か過ぎ去つた。ジナイイダは益々不思議に、益々譯が分らなくなつた。ある時私が彼女の居間に入ると、彼女が藁椅子にすわつて頭を机の縁にもたせかけてゐるのを見た。彼女は立上つた……彼女の顔中は涙の中に漂うてゐた。

『ああ、あなたですか!』と彼女は恐ろしいやうな笑ひ方をして言つた。『もつと此方へおいでなさいな。』

私は彼女の傍に寄つた。彼女は手を私の頭の上に載せて、突然それを髪の中につき込んで、かきむしり出した。

『痛いぢやありませんか。』と私はたうと言つた。

『ああ、痛いでせう! そして私は痛くないでせうか?』と彼女は答へた。――

『あら！』と彼女は自分が私の頭からちよつと一かたまりの髪の毛を引むしつたのを見ると、突然叫んだ。『まあ大變なことをしたのね。かあいさうなウォルデマルさん！』

彼女は引むしつた髪の毛を丁寧に整へて、指に巻き付け、それから小さな輪にうまく丸めてしまつた。

『私あなたの髪の毛を私のメダルに入れて、身に付けてゐませう。』と言つた、彼女の眼には依然として涙がかゞやいてゐた。『これで少しはあなたを慰めることになるでせう；；それぢやもう左様なら！』

私は家に歸つた。すると其處には不愉快な事件が私を待構へてゐた。母は父と言ひ争ひをしたのである。彼女は何かのことで父に非難をしてゐた。私はいつもの習慣どほり冷やかな丁寧な沈黙を守つてゐたが、それから間もなく出掛けていつてしまつた。私はどんな次第だか、もはや聞かなかつた。また氣にする譯もなかつた。たゞ腹の立つたのは、母が言ひ争ひの後に、私を自分の部屋に呼んで、私が屢々公爵夫人の家を訪問するのが非常に不満だと言つたことであつた。夫人は母の言ふところによれば *Une femme capable de tout* (どんなことでも仕業な女) であつた。私は母の手に接吻して——話を切らうと思ふと私

はいつでも斯うするのだ。——そして私の室へ行つた。ジナイイダの涙は私を全く途方にくれさせた。私は何う考へていゝか、ちつとも譯がわからず、ほとんど泣きさうになつた。私は十六歳にもなつてゐながら、やつぱり子供であつた。私は最早マレフスキイの事は考へなかつた、ベロフゾロフは日に日により威嚇的になつて、羊を見る狼の様に狡猾な伯爵を睨んでゐたけれども。然り、私は人間についても、事柄についても考へなかつたのだ。私はたゞ夢想に耽つて常に寂しい場處を探しまはつた。あの温室の廢墟はとりわけひどく好きだつた。大抵私はその高い壁によぢのぼつて、坐つて、そしてそこで不幸な、孤獨の、苦惱に沈んだ青年として自分を感じ、自分自身を憐れむのであつた——そしていかにこの悲しい感情が私を慰めたことであらう、いかに私は此の感情に酔つたことであらう！……ある時私は例の壁の上に坐つて遠方を眺め、それから鐘の響を聞いてゐた：：突然何ものかが私の身體に沁みわたつた——それは一陣の風ではない、又身ぶるひでもなかつた、何だか息のやうなものであつた、いはば誰かが傍に來たのを覺えたやうな感情であつた：：私は見下した。その下の方には、軽い灰色の着物を着て薔薇色のパラソルをさしてジナイイダが急いで通りすぎるところであつた。彼女は私を

認めて立止り、その麥稈帽子の縁を後の方へやりながら、その天鵝絨のやうな眼で、私の方を見上げた。

『そんな高いところで何をしていたらつしやるの?』と彼女は全く不思議な微笑をうかべて訊いた。『さあ。』と彼女はつゞけた。『あなたはいつも私を受するつて断言していらつしやつたが——眞實に私を受していらつしやるなら、私のところまで飛び下りていらつしやいな。』

ジナイイダが此の言葉を言ふか言はないうちに、私はもう飛び下りてゐた、丁度誰かがつき落してもしたかの様に。壁の高さは二尋もあつた。私は兩足で地面に下りはしたものの、震動がはげしかつたので、眞直に立つてゐることが出来なかつた。私はぶつ倒れて暫くは意識を失つた。私が再び我に返つた時に、眼を開けもしなかつたが、ジナイイダが自分の傍に居る事を感じた。

『かあいゝ子供。』と彼女は言つた、私の上に身をかがめながら——そして彼女の聲には非常に心配さうなやさしさがあつた!——『よくまあこの人はやつてくれたのね、よく言ふ通りになつてくれた……だが私はあなたを可愛がるわ、さあ起きなさい……』

彼女の胸は私の胸に近くより添うて息をしてゐた、彼女の手は私の頭に觸れた、それから突然——私はどんな目に遭つたらう!——突然彼女の軟かい、鮮かな唇は私の顔中を接吻でうづめてしまつた……それは私の唇にも觸れた……しかし其の時ジナイイダは、(私は目をまだ開けなかつたけれども)多分私の顔の表情で、その既に再び正氣づいたことを推測したのであらう——急に立上りながら言つた。

『さあ、お起きなさいよ、この馬鹿さん! 何故そんな塵の中に寝てゐるんです!』  
私は立上つた。

『私のパラソルを取つて頂戴。』とジナイイダは言つた。『まあ、あんなに遠くへうつちやつてたんだわ。それからそんなに私を見ちやいや……何て馬鹿げたことでせうね? あなた怪我はなさらなくて? おや、あなたは細葉刺草に刺されなすつたの? ねえ、そんなに私を見ちやいけません……もう、此の人は何にも解らなくなつたわ、この人はもう返事さへしなくなつたのね!』と彼女はひとりごとの様に言ひ足した……『ウォルデマールさん、家へ歸つて身體をお拭きなさい。それからもう私の處へいらしつちやいけませんよ——さうでないと私は怒りますよ、そしてらもうあなたは二度と再び——』

彼女はその言葉も言ひ終らないで、次の瞬間にはもう電光のやうに消え失せた。私は道端にすわつた……私は兩足で立つことが出来なかつた。刺草は私の手を刺した、背中  
は痛んだ、頭はぐらぐらした。けれども其の時私の覺えた幸福の感情は、私の全生涯で  
二度とは覺えなかつたものであつた。私の身體中には、ある甘い苦痛のやうなものが横  
はつてゐた。そして私はつひには嬉しさのあまり飛び上つたり、叫んだりして氣を晴ら  
した。私は實際まだ子供であつた。

## 十三

私は此の日終日非常に愉快で誇らしかつた。私の顔にはジナイイダの接吻の感じが生  
生と残つてゐた。私は非常の歡喜を以て、彼女の一々の言葉を思ひ出した。私のこの思  
ひがけなき幸福を非常にたゞへた。それで私が彼女に、此の新しい感情の創造者に會ふ  
ことの出来ないのが、直に心配になつた位であつた。私は今「最後の深い嘆息をして、

それから死んでしまはねばならぬ」事よりも、より大なる幸福を、運命から要求すること  
は出来ないかのやうな思ひがした。

これに反して翌日翼へ行つた時、私は非常な當惑の中に自分を見出した。その當惑を、  
私は祕密を守ることの出来る人だと思はれたがる人のよくやるやうに、控へ目な率直さ  
の假面のもとにかくさうと試みたが駄目だつた。ジナイイダは少しの昂奮も見せず、極  
めて靜かに私を迎へた、たゞ彼女は指で私をおどして、私が青い斑點を受けはしなかつ  
たかを問うた。私の控へ目な率直さといはくありげな態度とは突然消えてしまつた。し  
かし同時に私の當惑も消えてしまつた。勿論私は何も特別の事を期待してはゐなかつた  
けれども、ジナイイダの冷靜は突然冷水でもかぶせられたやうな感じを私に與へた。私  
は自分が彼女の眼から見ればたゞの子供にすぎないのだと知つた。そして胸が非常に苦  
しくなつた。ジナイイダは室の中を歩きつ戻りつした。そして私を見る度に、彼女の顔  
にはちらと微笑が閃いた。けれども彼女の考は遙かに私より遠ざかつてゐた、それは私  
も明らかに見て取つた……私はこちらから昨日の出來事を話し出して見ようか、それと  
も彼女があんなに急いでどこへ行つたのか問うて見ようかと熟考した……私は、それが



はつきり知りたかつたのである……しかし直ぐに再びこの計畫を放棄して、私は室の隅に坐つた。

ペロフゾロフが這入つて來た。彼の來たのは私には好都合であつた。

『私はあなたに似合つたおとなしい乗馬を見付けることは出来ませんでした。』と彼は粗暴な聲で言ひ出した。

『金曜日なら一頭は請合だけれど、しかし私は此の事柄にあまり信用を置きません。心配なことがある——』

『失禮ですが何が心配なんです？』とジナイイダは彼の言葉を遮つた。

『私の心配ですか？ 左様、あなたは馬に乗れますまい。まあ、何んな事が起らないとも限りませんからね。あなたはまあ、突然何と云ふ妙な事を思ひ付かれたのです。』

『はゞかりながら、それは私の勝手ですよ。さういふことなら、私はビヨートル・ワシリエキチさんにお願ひしませう……』(これは私の父の名であつた。私は彼女が事もなげに勝手に彼の名を口にしたのを不思議に思つた、何だか父が彼女の爲に喜んで勞を取るものと確信してでも居るやうに。)

『まあ、考へて御覧なさい。』とペロフゾロフは答へた。『それではあなたはあの人と一緒に出掛けようと思つていらつしやるのですか？』

『彼の人とだらうが、其の外の人とだらうが——それはちつともあなたの知つた事ぢやないでせう。たゞあなたとだけは出掛けません。』

『私とだけは出掛けない。』とペロフゾロフは繰返した。『何うぞ御勝手に……それぢや、私は馬を調達しませう。』

『だけど老いぼれた瘦馬でないやうに願ひますよ、私は前以て申して置きますが、驅けさせたいんですから。』

『宜しい、宜しい、驅けさせなさい……けれども一體誰と御一緒ですか？ マレフスキイとでも一緒に出掛けようと思つていらしやるんですか？』

『あの人と一緒に出掛けちやいけないのですかしら、軍人さん？ まあ、まあどうぞ落着いて下さい。』と彼女は言ひ足した。『そんなに眼をぐるぐるさせなすつちやいやですよ。あなたも御一緒にお連れ申しますから。あなたも御存知でせう、マレフスキイは今ぢや私にとつては——厭なこと？』

そして彼女は頭を振った。

『あなたは私を慰めようとて、そんなことをおつしやるのでせう。』とペロフゾロフは言  
つた。

ジナイイダは眼たゞきをした。

『それがあなたを慰めるでせうか？……まあ……まあ……この軍人さん！』彼女はたう  
とう外に言葉がなかつたやうに斯う言つた。

『それからあなた、ウォルデマルさん、あなたも御一緒にお出掛けなさるでせう？』

『私は大勢で乗るのは好きません……』と私は顔を上げずに口の中で言つた。

『あなたは *Tate a Tate* (たてあ)の方が好きなんですか？……いや、それなら、「自由

な人には自由を興へよ、往生した人には極樂を興へよ。』(の詩) だわ。』と彼女は言つて嘆

息した。『それぢやお行きなさい、ペロフゾロフさん、そして馬を世話して下さいな、明

日、私は一頭欲しいんですから。』

『さうかえ、だがお金は何處から取つて来るんだい？』と公爵夫人が口を挿んだ。

ジナイイダは暗い顔をした。

『私、あなたからは何も要求しやしません。ペロフゾロフさんが私に信用貸して下さる  
でせう。』

『信用貸、信用貸だつて。』と公爵夫人はつぶやいた、そして突然喉一杯の聲をあげて、  
叫んだ。『ヅニヤシカ！』

『お母さん、私はあなたに呼鈴よびりんを上げたぢありませんか。』と娘は言つた。

『ヅニヤシカ！』と老夫人は繰返した。

ペロフゾロフは暇を告げた。私も辭し去つた。ジナイイダは私を引留めてはくれな  
かつた。

十四

翌朝私は早く起き上つて、杖を切つて、城門の外に出掛けた。私の目論見はこの苦悶  
を追拂はうと云ふのであつた。それは極めて好天氣で晴れ晴れしてしかもあまり暑くは

なかつた。喜ばしげな、新鮮な風が地上を撫で、微かに音を立て、は戯れて、あらゆる自然を動揺させたけれども、これを騒がすやうなことはなかつた。長いこと私は山や森をさまよひ歩いた。私は幸福には感じなかつた、私はたゞ憂愁にふけるために家を出たのである。しかし青春や、天気や、新鮮な風や、せはしい歩行の樂みや、ひとりで草の茂みの中に横はる樂しさや、これらのことが各自その働きを示した。あの忘れることの出来ない言葉や、接吻の思出は、又もや私の心に迫つて來た。ジナイイダが私の決心や私の勇氣を公平に處置し得ないのを考へるのは私に愉快なことであつた……ジナイイダは私よりも外の人々を好いてゐるのだと私は考へた、それはどうでもいゝ！ しかしその代り他の人達は私がしてしまつたことを、したいと口で言つてゐるばかりなのだ。それに私はなほ此の上にも爲し得ない事ではないんだ！

私の想像力は働きはじめた。私は、彼女を敵の手から救ふことや、私がすつかり血まみれになつて、彼女を牢屋から救ひ出すことや、彼女の足許で死ぬることなどを想像した。私は自家の客間に掛けてあつた——マレク・アデルがマティルデを誘ひ出すところの繪を思ひ出した。それから、骨を折つて細い樺の木の前によぢ上り、たえず樺の木

の後から、丁度コントラバスの背後から音樂師がのぞくやうに、或は右を覗き、或は左を覗きする一羽の啄木鳥を私は見守つてゐた。

それから私は「白雪ならで」と云ふ歌を歌つた。それから今度は其の頃誰でも知つてゐる史詩の「西風そよぐ時に我は君を待つ」と云ふのになつた。それからまた私は高聲に、ホミヤコフの悲劇の中から、イェルマアクの星に寄する言葉を朗讀した。又自分でも感傷的な一篇の短い詩を作らうと思つて、全篇の終を結ぶべき一句を考へて見た。それは『おお、ジナイイダ！ ジナイイダ！』と云ふのであつた。しかしそれはたうとう物に成らなかつた。

其のうちに晝食の時刻になつたので、私は谷に降りて行つた。狭い砂道が谷をうねつて、市へ續いてゐた。私はその道を取つた……鈍い蹄鐵の音が私の後で聞えた。私は振り返つて、思はず立止つて帽子を取つた。それは父とジナイイダとであつた。二人は相並んで馬を驅せてゐた。父は上半身をすつかり彼女の方に寄せ掛けて、片手で馬の頸の上に身をさゝへながら、何か彼女に言つてゐた。彼は微笑してゐた。ジナイイダは黙つて彼の話を聞いて、眞面目に目を伏せて唇をかみしめた。最初は彼等だけが目に付いたが、

數分間もすると、谷の曲り角のところに、ベロフゾロフが驃騎兵の制服を着て騎兵外套をもち、荒々しい黒馬に乗つて現れた。馬は頭を振り、鼻息をしてははねた。騎者は手綱を引いて拍車をあてた。私は路傍にさけた。父は手綱をつかまへてジナイイダから身をはなした。彼女はしづかに目を上げて彼を見た——それから二人は疾驅し去つた：：ベロフゾロフは、軍刀をがちや／＼いさせて彼等のあとを追つかけた。『あの人は蟹の様に赤いな。』と私は考へた——『さうして彼女は：：何故彼女はあんなに蒼白いんだらう？ 朝中馬に乗つてゐるのに、何うしてあんなに蒼白いのだらう？』

私は足をはやめた、そして晝食の少し前に家に着いた。父はもう着物を着換へ沐浴して、晴々しく、母の椅子の傍わきに坐つて、例の滑かなよく響く聲で彼女に「ジュルナル・ド・デバア」の小説欄を讀んで聞かしてゐた。しかし母は氣のなささうに聞いてゐた。そして私を見ると、一日何處にゐたのだと訊きいて、それから、何處とも知れぬところを誰ともわからぬ人と一緒に一日ほつき廻つてゐるやうなことは嫌ひだと附け加へた。

しかし私は獨りで散歩をしたのですと答へようとしたが、父を見ると黙つてしまつた。私は何故だか自分で分らなかつた。

## 十五

私はその後の五六日間ジナイイダの顔を殆ど全く見ることが出来なかつた。彼女は病氣だと告げさせた。然し例の翼の訪問者達が彼女の所謂、日參に来るのには妨げなかつた。たゞマイダノフだけを例外に皆やつて來た。彼は感激の機會がないと、忽ち勇氣を失つて、退屈を感じた。ベロフゾロフはボタンを全部しめて、眞赤まっかな顔をして不平さうに片隅にすわつてゐた。マレフスキイ伯爵の纖細な顔には絶えず一種妙な、氣味のわるい微笑が漂つてゐた。彼は實際ジナイイダの御おぼえが目出度くなくなつたので、特別の熱心を以て老公爵夫人の氣に入るようにと努めてゐた、彼はその上彼女と一緒に貸馬車で總督のところに行つた程であつた。しかし此の訪問は何等の効果を奏せず、其の上マレフスキイに取つては、不愉快なことさへ生じた、彼は自分と或る交通兵士官との間に起つた面白からぬ事件のことを言はれたので、それを辯解するために、其の時分はまだ年

が若くて経験が足りなかつたのだと言はなければならぬ場合に立至つた。

ルウシンは毎日二度づつ、馬車で乗りつけたが、しかし長くは留らなかつた。此の前の議論以來私は少しく彼がこはくなつた。そのくせ私は彼に對して、一種の素直な愛情を感じてゐた。一日彼は私と一緒にネスクチニ公園を散歩したが彼は非常に友情に厚く親切で、色々な草や花の名前や性質を私に説明してくれた。それから彼は何のつきほもなく突然自分自身の頭をたゞいて言つた。『ああ、己は馬鹿だ。彼女を浮氣ものだと信じてゐた！』ところがあの様子は……自分を犠牲にするといふことは或種の人にとつてはたしかに愉快なことに違ひない。』

『それは何のことをおつしやるのです？』と私は問うた。

『あなたには何も言ひますまい。』とルウシンは手短かな答をした。

ジナイイダは私を避けた。私が顔を出すと一種不愉快な印象を彼女に與へた。それを私は悟らずに了ふ事は出来なかつた、彼女は自然に私から遠ざかつて行つた……自然に。丁度この事が私の苦痛だつた、丁度この事が私の胸を嚙んだ！ しかしそれを如何する事も出来なかつた。それで私は彼女の眼前に出ないように努めた。そしてたゞ遠方から

眺めるばかりだつた、けれどもなか／＼さうは行かなかつた。彼女には何だか譯の分らない變化が起つたやうである。彼女の顔、否彼女の全體の様子は變つてしまつた。

或る靜かな濶い晩にこの變化が特に私の目に附いた。私はある廣い接骨木（にはとこ）の下の低い腰掛に坐つてゐた。私は此の場所が好きであつた。其處から私はジナイイダの窓を見ることが出来た。さて、私がそこに坐つてゐると、私の上では暗くなつた木の葉の間を、一羽の小鳥が忙しげに飛び廻つてゐた。一匹の灰色の猫が自分の背中をなめた後に、用心深く庭に忍んで來た。最初の金龜子（こぶきこがね）は、もう明るくはないが、まだ見すかし得る空中を重苦しくぶらぶら飛び廻つてゐた。私はそこに坐つて窓の方を眺め、開くだらうかしらと待つてゐた——案の定、それは開かれて、その中にジナイイダが現れた。彼女は白い着物を着けてゐた。そして彼女自身は、彼女の顔や、彼女の肩や手は殆んど白墨のやうに白かつた。長い事彼女は身動きもしないでゐた、長いこと彼の女の眼はぢつと見つめた儘引よせた眉毛の下に動かなかつた。こんな眼付は私が是迄彼女に於て認めたことのないものである。それから彼女は兩手を握り合せて、激しく、極めて激しく、それを唇や額に押しつけた——その時突然彼女は兩手で髪を頸筋へ投げてそれを振り、何か決心した

やうに頭を低く垂れて、そしてそれから窓を閉めた……

其の後三日して彼女は庭で私に出逢つた。私は身を返さうとしたが、彼女の方で私を引留めた。

『あなたの手を下さいな。』と彼女は以前の親切さをもつて言つた。『私たちは久しく一緒にお話をしなかつたのね。』

私は彼女を眺めた。彼女の眼は異様な柔かい輝きを帯び、彼女の顔は微笑してゐた、しかし霧を通して見るやうに。

『あなたはまだお悪いんですか？』と私は訊いた。

『いゝえ、もうすっかりよくなりました。』と答へて、彼女は小さい赤い薔薇を摘んだ。『まだいくらかだるい氣持がしますけども、それももうなくなるでせう。』

『したらあなたはまたすっかり以前のやうになれるでせうか？』と私は訊いた。

ジナイイダは薔薇を顔へもつていつた、それが私には咲き誇つた草花の花環が彼女の手の上に落ちて來たやうに見えた。

『私は一體變つたでせうか？』と彼女は訊いた。

『さうです、あなたは變りました。』と私は半ば聞えぬやうな聲で答へた。

『私はあなたに冷淡でしたわね。自分でも知つてよ。』とジナイイダは答へた。『けれどもそんな事を氣にしちやいけないことよ……私外ほかに仕様がなかつたんだから……あゝ、もうこんな話は止めませう！』

『あなたは私に愛されるのはいやなんです——さうですとも。』私は悲しげに我知らず激して叫んだ。

『いゝえ、私を愛して下さいな、けれどもこれ迄のやうではいけないわ。』

『ぢや、どうして？』

『二人は友達になりませう——ねえ、お友だち！』ジナイイダは私に薔薇を嗅がせた。

『聞いて下さいよ、私はあなたよりずっと年が上ですもの——私はあなたの伯母様ですわね。さうね、伯母様ぢやないんだけど、あなたの姉さんよ、そしてあなたは——』

『私はあなたには子供です。』と私は彼女の言葉を遮つた。

『それぢや子供でいゝわ、けれど可愛い好い子供よ、ねえ、さうでせう？ 今日から私はあなたを私の小姓にしてよ。それからあなたは小姓といふものは奥方の傍をはなれち

やならぬ事を忘れちやいけませんよ。これがあなたの新しい稱號のしるしだわ。』と彼女は付け加へた、薔薇を私のジャケットのボタンに刺しながら。『これこそ自らが御身に賜はる恩恵のしるしぞよ!』

『この前はこれとは違つた恩恵のしるしをあなたから受けました。』と私は口の中で言つた。

『ああ!』とジナイイダは答へて、傍の方から私を見つめた：『まあこの人の記憶のいゝこと! いや、私だつて今も用意はしてありますよ。』

そして彼女は私の上に身を屈めて、私の額に純潔な、靜かな接吻を與へた。

私は彼女ばかりを見てゐた——すると彼女は身を振向けて、かう言つた。『さあ、小姓さん、私についていらつしやい。』彼女は翼へ行つた。私は彼女に従つた——私はやつぱり譯が分らない。一體これは有り得ることかしらと私は考へた、此の素直な利巧な娘が——これがあの同じジナイイダかしら! それから彼女の歩き振りは、より落付いて見え、彼女の全體の姿は、より威嚴があつて、そしてよりすらりとして居るやうに見えた：ああ、私の心の中にどんなに新しい力を以て、愛情が燃え立つたことであらう!

## 十六

食後翼には再び客人が集まつた、そして令嬢も彼等のところへ出て來た。連中はすっかり揃つた。それは丁度私が忘れることの出来ないあの最初の晩と同じ人數であつた。ニルマッキイさへも非常な奮發でやつて來た。マイダノフは今度は早く來てゐた——彼は新作の詩を携へて來たのである。皆は、またもや賭事をやり出したけれども、以前のやうに異様な思附もなく、馬鹿げたこともなく、さわぎもかなつた——ジブシイ風の要素は消え失せてしまつた。

ジナイイダは私達の仲間に一つの新しい氣分を與へた。私は小姓の資格で彼女の傍にすわつた。いろ／＼あつた中で、彼女は籤に當つたものが、その見た夢を話したらと云ふ建議をした。けれどもそれは彼女に興味を興へなかつた。夢は面白くないものか——(ペロフゾロフは馬に鮎を喰はしたら馬の首が木の首になつた夢を見た)——さもなければ

不自然でわざとらしくかった。マイダノフは全然作り話をして私たちを非常に喜ばした。其の話の中には墓穴や、七絃琴を持った天使や、もの言ふ花や、遠方から響いてくる物音などが現れた。ジナイイダは彼の話をしまひまでさせなかつた。『かうして一度作り話に陥つた以上は、』と彼女は言つた。『みな何か頭からこしらへた話をすることにしませうよ。』——ベロフゾロフは又も最初に話さなければならなかつた。

若い驃騎兵フザアルは當惑してしまつた。『私は何も作り出すことは出来ません！』と彼は叫んだ。

『何て智恵のない言ひ譯でせう！』とジナイイダは答へた。『まあ、たとへばあなたが結婚をして、お嫁さんと一緒に暮すことを皆さんに話すと考へて御覧なさい、あなたはお嫁さんをしつかり押し込めておしまひなさるでせう。』

『私は押し込めておきますよ！』

『そしてあなたはお嫁さんの傍にくつついていらつしやるでせうね？』

『私は勿論傍にくつついて居ます！』

『それぢやお嫁さんがそれが退屈になつて來てあなたにそむいたら？』

『そしたら殺してしまひます。』

『しかしあなたの家から逃げてしまつたら？』

『そしたら私は追窮してやはり殺してしまひます。』

『さう。それぢや私がおあなたのお嫁さんだつたとしたら——あなたはどうかさいます？』  
ベロフゾロフは沈黙した。

『そしたら私の方で自殺してしまひます！』

ジナイイダは高い聲で笑ひ出した。

『あなたは遠慮をなさる方ぢやあないのね、わかつてよ。』

次に出た籤はジナイイダに當つた。彼女は眼を天井に向けて考へ込んだ。

『さあ、私の考へ出したことをお聞き下さい。』と彼女はたうと言ひ出した。

『皆さん、夏の夜の壯麗な宮殿での美しい舞踏會を想像して下さい。此の舞踏會は一人の若い女王の催しなのです。何處を見ても黄金、大理石、水晶、絹、火、金剛石、花、香料——一口で言へばありとあらゆる贅澤の仕放題です。』

『あなたは贅澤がお好きですか？』とルウシンが口を挟んだ。



『贅澤は好いわ。』と彼女は答へた。『そして私は何でもいゝものが好きですわ。』  
『美しいものよりも?』と彼は問うた。

『そんなことは私にむつかしすぎます、私はそんなことは知りません。人の話の邪魔をしちやいけません——それから其の盛んな舞踏會です。大勢のお客がゐる、みんな若くて、美しく、勇敢なのです、そしてみんな死ぬ位女王に戀してゐるのです。』

『お客様のうちには婦人は一人も居ないんですか?』とマレフスキイが問うた。

『いゝえ——いやお待ちなさいよ——ああ、居たわ!』

『みんな醜いんですか?』

『いゝえ。美しいんです。けれども男たちはみんな女王に戀してゐるんです。女王は脊が高くすうりとして居ます。そしてその黒い髪の上には大きい金の頭飾たまごかぶりを載せてゐます。』

私はジナイイダを見た——そして此の瞬間には、彼女は私たちの誰よりもはるかに背高いやうに見えた。彼女の白い額や、動かない眉毛は非常に聰明な理性と、私が『あなた自身がその女王だ?』と考へた程の力とをもつてゐた。

『みなが女王のまはりに詰め寄つて来て、』と彼女は語りつゞけた。『彼女の前で息のつく限り追従を言ふのです。』

『女王は追従が好きですか?』とルウシンが訊いた。

『まあ、いやな人? よく人の話の邪魔をする人だわね! ……追従を好かない人があ

るものですか?』  
『最後にも一つおたづねしますが、』とマレフスキイが言つた。『女王には夫はないんですか?』

『其のことは私まだ考へてゐないの。いゝえ——何のために夫なぞ持つものですか?』  
『勿論です。』とマレフスキイは彼女を遮つた。『何のために夫なぞ持つものですか?』

『Silence! (だれも)』と佛蘭西語の下手なマイダノフが言つた。

『Merci (ありがとう)』とジナイイダは彼に言つた。『それで女王はそれらの話を聞いたり、音楽を聞いたりするが、一人の客の顔も見ません。六つの窓は上から下まで、天井から床まで開けてあります。そしてその後には暗い空に大きな星が出て、暗い庭には大きな木があります。女王は庭を見てゐます。庭には木の間に噴水があつて、それが闇の中に輝いて

おます——長い長い幽霊のやうに。女王は人の聲や音楽の騒ぎの中にも、水の微かな音を聞き分けます。女王が外を見て考へますには、皆さん、あなた方はみな貴族の家柄で、それに利口で金持で、あなた方は私を取巻いて、私の言ふ言葉を一々恭しく聞いて下さる。あなた方は皆私の足下で死なうとしていらつしやる。私はあなた方を支配してゐるのです……然しあそこの噴水の傍には、あのさわさわ云ふ水の傍には、私が愛してゐる人、私を支配する人が立つて私を待つてゐます。その人は立派な着物も着ず、貴い寶石も付けてゐません。誰もその人を知つてゐるものはありません、けれどもその人は私を待つてゐて、私の來ることを信じてゐるのです——だから私も出て行きます。そして私を引留める力と云ふものはないのです。私はその人の傍に行つてそこに留まり、その人と一緒に、あそこの庭の暗がりに木立のそよぎの下に、噴水のさわさわ云ふ下に、消えて行つてしまひたい……』

ジナイイダは黙つてしまつた。

『それは考へ出したことですか?』とマレフスキイが丁寧に問うた。

ジナイイダは見向きもしなかつた。

『それでは、諸君、』とルウシンが言ひはじめた。『もし我々もそのお客の中におゐて、そしてその噴水の傍の仕合せものの事を知つたとしたら、我々はどうしたでせうな?』

『まあ、お待ちなさいな! お待ちなさいな!』とジナイイダが遮つた。『私が自分で、あなた方が何をなさるか申しませう。ペロフゾロフさん、あなたは其の人に決闘を申し込むでせう。マイダノフさん、あなたは彼に對して諷詩<sup>エピグラム</sup>を作るでせう……尤も、えゝと

——あなたは諷詩はお作りにならないから、屹度バルビエ風の長い長短韻を作つて、それを「電報」にお載せになるでせう。ニルマッキイさん、あなたはあの人に金を借りに行くでせう——いや、彼に金を貸して利子でもお取りになるでせう。ドクトルさん、あなたは……』彼女は言ひ淀んだ……『さう、あなたはどんなことをなさるか私は知りません。』

『私は侍醫としての資格で、』とルウシンは答へた。『女王に向つて、もし女王がお客のためになさるのでなければ、決して舞踏會を催されてはいけませんとお諫めしますよ。』

『さう、多分あなたのおつしやる通りでせう。それから伯爵さん。あなたは……』

『私ですか?』と例の無氣味な笑ひ方をしてマレフスキイは繰り返した……

『あなたは彼に毒を入れた砂糖漬をやるでせう。』

マレフスキイは顔を少ししかめて、ちよつとの間、猶太人のやうな表情をしたが、しかしすぐに又笑ひ出した。

『ウォルデマールさん、あたたは……』とジナイイダは語りつゞけた……

『いや、もう澤山。何か外の遊びをはじめようぢやありませんか。』

『ウォルデマール君は小姓の資格で、女王が庭へ駆け出す時に裾を取るでせう。』とマレフスキイは毒々しく言つた。

私は立上つた。けれどもジナイイダは急に手を私の肩に置いて、立上つて、そして微笑かにふるへる聲で言つた。

『私は閣下にもちつとも厚顔になつてもいゝと云ふ権利を與へたことはありません。だからどうぞお歸りなすつて下さい。』

それから彼女は彼に扉を示した。

『どうぞ、御令嬢。』とマレフスキイは吃りながら言つて、まつさをになつた……

『御令嬢のおつしやることは尤もだ。』とペロフゾロフは叫んで、同様に立上つた。

『これは私は實際少しも豫期しませんでした。』とマレフスキイは續いて言つた。『私の

言つた言葉には少しもあなたを侮辱しようと云ふ考へはありませんですから……どうぞお許しなすつて下さい。』

ジナイイダは氷のやうな眼付で彼を見て、冷かに微笑した。

『どうせあなたがいらしたつていゝのだけれど、』と、彼女は輕蔑するやうな手付きをして言つた。『ウォルデマールさんと私とは理由なしに腹が立つたのです。少しばかり人を傷けるのが貴下には愉快なのです——それは貴下には似合つたことですよ。』

『どうぞお許し下さい。』とマレフスキイは繰返した。そして私は、私はジナイイダの手を動かすのを見て、又もや、實際の女王とてもこれ以上の威嚴を以て厚かましい奴を追拂ふことは出来まいと考へた。

此の些細な事件の後は、賭事ももう長くはつゞかなかつた。皆のものは此の出来事のためや、また外のはつきりとはしてゐないが重苦しい感情のために少し不愉快に感じた。何人もそれについて話さなかつたが、各のものはそれを感じた、たゞ自分だけ感ずるばかりでなく、隣の人の心まで感じた。マイダノフは私たちに彼の詩を朗讀した、そしてマレフスキイは誇張した熱心をもつてそれをほめた。『彼奴が今度は好意を表しようとし

てるぢやないか。』とルウシンが私に囁いた。私達は間もなく分れ去つた。ジナイイダは突然物思に沈んだ。老公爵夫人は頭痛がするといふことだつた。ニルマッキイはその儂麻質を訴へ出した。

私は久しく寝入る事が出事ず、絶えずジナイイダの話に心を騒がせてゐた。

『是は何の寓意を含んでゐるのだらうか？』と私は自分に問うた。『そして一體誰のことを、何の事を寓してゐるのかしら？ もし本當に寓意だとすると、彼女はどうしてまあ……いやいや、そんな筈はない。』と私は呟いた、寝返りをしながら、熱い頬の他の側を下にし乍ら……私はジナイイダが話してゐる間の顔の表情を思ひ出した……私は又ネスクチニでルウシンの口から滑つた叫び聲や私に對するあの突然の變化を思ひ出した——そして私は我を忘れて推量を逞しくした、それは一體誰だらう？ 此の三つの言葉は、丁度不吉な低い雲が私の上に漂ふやうに、闇の中に明るく私の眼に現れてゐるとでも云ふべきであつた——私はその雲の壓迫を感じた、そしてそれが間もなく散つてしまふだらうと期待した。私は近來いろいろなことに慣れた、私はいろいろな事をザシエキン家で見た。其の亂雑や、脂蠟の燃えさしや、壊れた小刀や肉叉や、陰氣なウニフアテイや、

襪を着た小間使や、老公爵夫人の癖や——凡て是れ等の異様な生活はもう少しも私には不思議に見えなかつた……けれども今おぼろげにジナイイダに就いて想像する事柄だけは合點が行かない……母はかつて私に彼女を大膽不敵な女だといつた。大膽不敵な女——彼女は私の偶像であり、私の神體であるのに！ 此の名目は私の胸の上にもえた、私はそれを避けようと試みた、頭を枕にかくした、憤激した——それにもかゝらず、私はあの噴水の傍の仕合者しあはせものでありさへすれば、何事でもしよう、そのためには何物でも惜むまいと思つた！……

血潮は身うちに湧き立つて、激しく血管を流れた、その庭……その噴水……私は考へた……一度庭に降りて行つて見ようか……

私は着物を着て家を忍び出た。夜は暗く、木々はほとんど聞えない位にざわめいてゐた。空からは軽い涼氣が落ちてゐる、野菜畑からは茴香の匂ひがする。私はあらゆる徑を横ぎつた。私の足音の軽い響は私を昂奮させ、勇氣づけた。私は立止つて、待つて、自分の心臓の鼓動するのを聞いた——それは強く速かに打つてゐた。私は垣根に近づいて、細い棒に倚りかゝつてゐた。突然——それともたゞさう思つただけなのかしら？

——私の數歩前に、一人の女の姿が現れた：私は鋭く闇の中を見つめて呼吸をひそめた。あれは何だらう？ 人の足音だつたのかしら、それとも私の心臓の鼓動だつたのかしら？ 『一體あれは何だらう？』と私は殆んど聞えぬ位につぶやいた：『おや、また何だらう？ 抑へてしまつた笑ひ聲かしら？ それとも木の葉のそよぎかしら？ それとも私の直ぐ耳の傍で嘆息したのか知ら？ ……私は氣づかはしくなつた：『誰だ？』と私は一層低い聲でくりかへした。

空氣は一瞬の間微かな運動をはじめた。空には火のやうな一線の輝きが見えた。流星が落ちたのである。

『ジナイイダ？』と私は訊かうとしたが、その音は私の唇の上で死んでしまつた。すると突然周圍は深い靜寂に陥つた、夜半に屢々おこるやうに：『卓蟲さへも木の間に鳴くのを止めた——たゞどこかで小さな窓ががた云つたばかり。私はちつと立ち盡してゐたが、やがて自分の室に歸つて行き、冷たくなつた寢床に入つた。私は何だか密會に行つて、空しく待つて、そして他人の仕合せの傍を通りすぎでもしたかのやうな妙な昂奮を感じた。』

## 十七

翌日、私はたゞ一寸ジナイイダを見たばかりである。彼女は彼女の母親と一緒に辻馬車でどこかへ行つた。それに反して私はルウシンにあつた。もつとも私は、彼に殆んどあいさつさへしなかつた。それからマレフスキイにも會つた。若い伯爵は私にお辭儀をして、親しげに話しかけた。翼を訪れる客のうち彼ばかりは私たちの家にも媚びへつらふことを心得て居た。彼は母には氣に入つた。父は彼を許容す事が出來ず、侮辱と思はれる程、丁寧に取扱つてゐた。

『ああ、Monsieur le Page (註小)』とマレフスキイが言ひ出した。『お目にかゝつて非常に嬉しいです。あなたの美しい女王様はどうなさいましたね？』

彼の生々した綺麗な顔も此の瞬間には非常にいとほしかつた。彼は輕蔑するやうな嘲笑的の目付で私を見たので、私は返事さへしなかつた。

『貴下は相變らず御立腹ですか?』と彼は語り續けた。『それは御無理です。貴下を小姓に任命したのは私ぢやありませんよ、そして小姓といふものは、特に女王様のおそばに居なくちやいけません。失禮なことを言ふやうですが、貴下はお役目をおろそかにしてわられますね。』

『どうしてさうおつしやるのです?』

『小姓は女王から離れてはならないものです。小姓は女王のすることを残らず知つておなくてはならない、のみならず女王を見張つておなくてはならないのです。』と、それから彼は一層聲を低くして附け加へた。『晝も、夜も。』

『一體それはどういふ意味ですか?』

『どう云ふ意味かとおつしやるんですか? はつきり言ひませう、私の考はかうです。晝も——それから夜もです。もつとも晝間はまあいゝです。晝間は明るくて人が居ますから。しかし夜になると——たちまち不幸が起ります。それで御忠告いたしますが、あなたは夜は眠らないで見張りをしなくちやいけません。出来るだけ目を鋭くして。おぼえていらつしやるでせう——庭で、夜分、噴水のそばで——そんな處に待伏まちかまちをして居なく

ちやいけません。きつとあなたは私に感謝なさるでせう。』

マレフスキイは笑ひ出した、そして私に背を向けた。恐らく彼はその私に言つたことに何等特別の價值を置いたのではあるまい。彼は人を迷はせることがうまいといふ評判を受けてゐた。そして彼は假面舞踏會で人を翻弄する術に長じてゐた。そんな時には彼の全身にしみ渡つてゐる殆んど無意識的の運動が殊の外役立つた……彼はたゞ私をからかはうとしたのだ。けれども彼の言葉の一々は私のあらゆる血管にいはいば毒を吹き込んだやうなものであつた。血は私の頭に上つた。ふん、さうかなあと私は自分に言つた。よし! 昨日の私の豫感やはり正當だつたんだ! して見ると私が庭に引寄せられたのは無駄ではなかつたのだ! 『そんな事があつてたまるものか!』と私は高く叫んだ、そして拳で胸を叩いた、もつとも私は何があつてはたまらぬかはよく知らなかつた。或はマレフスキイ自身が庭に来るのかも知れぬと私は思った、(恐らくは彼は自分で喋つてしまつたのかも知れぬ、あいつはそんな事をしかねないほど厚顔な奴だから。それとも誰か外のものだらうか——庭の垣根は極く低いだから、それを乗り越える位何でもないんだ。)——しかし私の手中に落ちた奴は可哀さうなものだ! 誰でも私に出遭はないよ

うにしろ！ 私は全世界と、それから彼女に、あの裏切ものに、（私は本當に彼女を「裏切もの」と呼んだ。）復讐の出来る事を知らしてやらう！

私は室に歸つて、机の中からこの頃買ったばかりの英吉利小刀を取出して、刃尖に觸つて見て、それから冷やかな、かたい決心をもつて、額に皺をよせてそれを衣囊に收めた——こんな事は少しも珍しくはなく、またこれが始めてではないと云つた様な風で、私の心臓は固くなつた。晩になるまで私は眉毛を陰氣にひそめ、唇をかたく噛みしめて、絶えず行つたり來たりしてゐた、尖つた小刀を衣囊の中でしつかり握りしめて、何か恐しいものに立向ふ用意をしながら。此の新しい異常な感情は全く私の心を囚へて、其の上愉快な氣持さへ起させた。それでジナイイダの事はあまり思はなかつた。私の頭には絶えずかの若いジプシイのアレコの事がうかんだ——『何處へ行くぞ、美しき若者、横たはり止まれ！——汝は全身血まみれなり……おお、汝は何をなせしぞ？……何もせず！』——私はいかなる恐ろしき微笑をもつて、此の何もせず！を、くりかへしたことであらう！

父は……なかつた。しかし近頃絶え間なき昂奮の状態にあつた母は、私の思ひ切つ

た様子に氣が付いて私に問うた。

『何故お前は鼠が挽割麥を覘ふやうに、陰氣さうに睨んでゐるんだい？』

その答として私はたゞ憫れむやうな笑ひ方をして、そして考へた、若し母が知つたらどうだらう！……十一時が打つた。私は室へ入つた。が、着物は脱がなかつた。そして眞夜中を待つてゐた。たうとう十二時が打つた。『もう時分だ！』と口の中で呟いて、喉のところまで上衣の釦をしめて、その上、袖までまくつて庭へ出かけた。

私は見張をしようと思ふ場所をあらかじめ探して置いた。庭の果てにザンエキン家の庭と私たちの家との境界になつて垣根が共同の壁によりかゝつてゐる處に、一本の寂しげな縦の木が立つてゐる。その木の低い繁つた枝の下から、夜の闇の許す限りは周圍に起る一切の事を極めてよく見通す事が出來た。其處には一條の小徑がうねつてゐた。それが私には始終怪しいと思はれたのだ……小徑は垣根に沿うて蛇の様に曲つてゐたが此處で何だか人がそこを通りすぎて、そしてある丸く繁つたアカシヤの茂みに行つたらしい痕跡があつた。私は縦の木に歩み寄つて、その幹にもたれて、様子を窺ひはじめた。夜は前夜のやうに靜かであつた。しかも空にはあまり雲がなかつたので、木立の輪郭

や、それに、大きな草花まで明かに認められた。待ちかまへてゐた最初の間は壓しつけられるやうで、殆んど恐しい位であつた、私はすべての事に對して決心してゐた、いきなり『貴様は何處へ行くんだ？ 待て！ 白状しろ、でない』と怒鳴らうか、それとも何とも言はずに突きかゝつたものか、どちらを取らうかと考へたばかりであつた……物音といふ物音、木の葉のそよぎ、風の音のすべてがみな私には意味のあるもの、異常なものとおもはれた……私は用意をして……私は身を前にかゞめた……けれども半時間すぎた、一時間すぎた。私の血はいくらか落付いて来て、頭は冷靜になつた。私は少しく滑稽に思はれた、マレフスキイが私をからかつたのだといふ意識が私をとらへ始めた。私は自分の隠れ場を見捨て、庭を横ぎつた。わざとたくさんだやうに何處にも微かな物音さへ聞えなかつた。まはりには深い静けさがあつた。自家の犬さへも繩につなされて門の傍に寝てゐた。私は温室の廢墟によぢ上つて、廣い野原を見渡し、ジナイイダとの出會を思つて、沈思に耽つた……突然私は縮みあがつた……私は戸の開かれた音を聞いた、それから微かな木の枝を折る物音を聞いた。二とびで私は廢墟から飛び降りた——そして凝結したやうに立つてゐた。急しい輕快なしかし用心深い足音が庭では

つきり聞えた。それは私に近づいて来る……『来たぞ！ たうとうやつて来た！』胸がどきりとした。

私は痙攣的に小刀を衣囊から取出して、痙攣的にそれを開けた——異様な赤い焰が眼の前にかゞやいた。私は恐れと怒りとのために頭髮が逆立つた……足音は丁度自分の方へやつて来た……一人の男が現れた……何事ぞ——それは私の父であつた！

彼は黒い外套に全身をつゝんで、帽子を目深に被つてゐたけれども、私はすぐに彼だと知つた。彼は足を爪立て、通りすぎた。私は隠れてはゐなかつたけれども、彼は私を認めなかつた。しかし私は小さくなつて地面に接するばかりに身を縮めてゐた。嫉妬深い殺害を企て、ゐたオセロは忽ち一個の學校生徒に變つてしまつた……私は父が不意に現れたのにいたく驚いて、始めは彼がどこから来てどこへ消えたかも知らない程であつた。彼が全く行つてしまつた後ではじめて私は身體を持ち上げて、そして考へた、一體、何故父は夜中に庭へ出るだらう？——まはりがすべてまた靜かになつた時に……恐怖のために私は小刀を草の中に落してしまつた、しかし私はそれをまた見附けようともしなかつた。私は非常に耻かしくなつた。俄かに私は全く臆病になつてしまつた。私は家



へ歸つた、けれども先づ接骨木の籤の下の私の腰掛の傍に行つて、ジナイイダの窓の方を見渡した。少し飛び出してゐる、小さい窓の圓板は夜の空から落ちて来る弱い光に青く輝いてゐた。突然圓板の色が變つた：其の背後で——私はそれを明瞭に認めた——用心深く靜かに、白い卷帷スクロワが下された。それは窓板のところまで降りて、それから動か  
なかつた。

これは何を意味するのだらうと私は殆んど無意識に高聲で言つた、再び私の部屋へ入つた時に。これは夢かしら、偶然の出来事かしら、それとも……突然私の頭に浮んだ推量は極めて新しく異様なものであつた、それで私はそれに耽ることを敢てしなかつた。

## 十八

翌朝起きると頭痛がした。前夜の昂奮は消えてゐた。其のかはりに鈍い疑惑と、今まで少しも知らなかつた悲哀とが現れた——私は何ものかを死なしたやうであつた。

『どうしてあなたはそんなに、脳髓の半分を取り去られた家兎ウサギか何ぞのやうに、ぢつと見てゐるのですか？』とルウシンは私に出遭つた時に訊いた。

朝食の折私はこつそりと父と母の方を交る交る眺めた。彼はいつものやうに落付いてゐた、彼女はいつものやうに内心で昂奮してゐた。私は父がよくあるやうに親しげに話してくれないかしらと待ち望んで坐つてゐた。けれども彼は平常の親しさですら私をあやしてくれなかつた。ジナイイダに残らず話してしまはうかしら？ と私は考へた……私はもうどうでもいゝと思つた——二人の間はすつかり駄目になつたのだ。

私は彼女の處に行つたが、しかし何にも言はないばかりか——私が痛く望んでゐた、彼女と話をする事さへも出来なかつた。公爵夫人の令息で、十二位の幼年學校生徒が、休暇でペテルブルグから歸省してゐた。ジナイイダは直ぐ弟を私に紹介した。

『私の可愛いウオロヂヤさん。』——（彼女がかう呼んだのはこれが始めてだ。）——『あなたのお仲間が出来ましたよ。』と彼女は私に言つた。

『これもやはりウオロヂヤと云ふんですよ。どうか、可愛がつてやつて下さいな。腕白ものだけでも、氣立は好いんですよ。どうぞネスタチニを見せてやつて下さい、一緒に散

歩に行つて保護してやつて下さいな。ね、さうして下さるでせう！ あなたは好い見ですもの！』

彼女は両手を親しげに私の肩に置いた——そして私はすっかり狼狽してしまつた。この子供の到着は私をも子供に變じてしまつた。私は黙つて幼年學校生徒を見てゐた、彼も同様に黙つて私を眺めてゐた。ジナイイダは笑ひ出して私たちを互にぶつつけ合はせた。

『さあ、抱き合ひなさい、子供たち！』

私たちは互に抱き合つた。『庭へ出たければ連れて行つて上げませうか？』と私は幼年生に訊いた。

『あなたが連れて行つて下さるなら、どうぞ。』と彼は暖れ聲で——正しく幼年學校生徒の聲で答へた。

ジナイイダは又もや笑ひ出した：：：これまでまだ一度も私は彼女の顔にこれほど魅力のある赤味を認めなかつた。私は幼年生と一緒に遠ざかつた。私たちの庭には古いぶらんどがあつた。彼を細い板に乗せて、そして私は彼をゆすぶり始めた。彼は厚い布製の

廣い金の縁を取つた制服を着て、身動きせずになつてしつかり繩につかまつて居た。『襟のボタンを外した方がいゝでせう。』と私は言つた。

『いゝです。僕等は慣れてゐるんです。』と彼は言つて、そして咳嗽をした。

彼は姉に似てゐた。特に眼はまるで同じであつた。私は彼に親切をつくすのが愉快であつた。けれども同時に同じ憂鬱な哀愁が靜かに私の胸をかんだ。今では私は本當に子供だと私は考へた——それに昨日は：：：私は昨晚小刀を失つたところを思ひ出して、再びそれを探した。幼年生は私の小刀を貰ひ、うどの木の莖を切り取つて、それで笛を作つて吹き出した。オセロも一緒になつて吹いた。

しかしこの同じオセロは、其の晩泣いてゐた、そして、ジナイイダは彼を庭の一隅で見付け出して、何故そんなに悲しいのかと訊いた。私は彼女が驚く程烈しい涙を流した。

『どうなすつたの？ ウォロヂヤさん。』と彼女はくりかへした。私が返事もせず、泣き止みもしなかつたので、彼女は私の濡れた頬に接吻しようとした。しかし私は身を振り離して泣きじやくりのもとにさゝやいた。『私はみな知つてゐます。何故あなたは私を弄んだのです？ ……あなたは私の愛を何の用に立てたのです？』

『私はあなたにすまない事をしたわね、ウォロヂヤさん。』とジナイイダは言つた：『ああ、私は本當にすまない事をしたのね、みんな私が悪いのです。』と言ひ足して兩手を組み合せた：『まあ、何て性の悪い、暗黒な、罪惡めいたものが私の胸にひそんでゐるんでせう：：しかしもう私はあなたを弄びはしません。私はあなたを愛します：：あなたには何故だか、何う云ふ風にだかお分りにならないけれども：：でも、あなた何か御存知ですか？』

私は彼女に何を言ふことが出来たらう？ 彼女は私の目の前に立つて、私を眺めた——私は彼女が私を眺めたばかりで、もうすぐ頭から足先まですつかり彼女のものになつてしまつた。

十五分も経つと、私はもう幼年生やジナイイダと一緒に駆けつくらをしてゐた。私のはれ上つた睫毛のところからは涙がころがり落ちたけれども、私はもう泣きはせずに、笑ふやうになつた。私は襟飾の代りにジナイイダのリボンを頸に捲き付け、そして彼女の胸衣のまはりにつかまつた時には、晴れやかに叫び出した。彼女は私に對して何でも好きなやうなことをした。

## 十九

私の失敗に歸した夜の遠征の後の一週間のうちに、私の身の上に起つたことを詳しく話せと言はれたら、私は非常な當惑に陥るであらう。それは不思議な熱病じみた時であつた。まるで反對の感情や、思想や、恐怖や、希望や、喜びや、苦しみが暴風の如くに渦巻いてゐる一種の混沌カオスであつた。私は自分の心に一瞥を與へることさへも敢てしなかつた、——もつとも十六の子供でも自分の心を窺ふ事が出来るものならばだが。私はもう何事かについて判断を與へる勇氣もなくなつた。出来るだけ速かに晝を夜にしてしまはうと努めた。それに反して夜の間は眠つた——自分の子供らしい輕卒は此の際頗る都合だつた。私は愛されてゐるのか何うかは知りたくなかつた。私は愛されてゐない事を自分にも告げたくなかつた。私は父を避けた——が、ジナイイダを避ける事は出来なかつた：：彼女の前に出ると私は火の様に燃えた：：しかし私の心中に燃えて私を食ひ

つくした火がどんな火だかを何のために知る必要があらう。燃えたり、くひつくされたりするのは私にとつて非常に楽しいことだつたのだから。私は私の心をあらゆる印象にゆだねてしまつた。私は自分をあざむき、記憶から身をそむけて、自分の豫覺したものの前に眼をふさいだ：：此の苦惱は思ふにながくはつゞかなかつたらう、一つの落雷が突然一切の事に結末をつけて、そして私を新しい軌道へと投じた：：

ある時かなり遠い散歩からお晝に歸つてくると、私はひとりで晝飯は食はねばならぬと聞いて驚いた。父は外出してゐるし、母は不快だつた。彼女は食事を欲しないで、その寢室へ閉ぢこもつてゐた。召使たちの顔色で、私は何かとんでもないことが起つたのだらうと推量した：：私はそれを彼等に聞きたゞすだけの勇氣がなかつた。けれども、私にはフィリップと云ふ名の若い友達があつた。彼は食堂のかゝりであつた、そして詩に熱情的の愛好を持つてゐたし、また其の上にギタルラを弾いた。私は彼にたづねた。そして彼から父と母との間に恐ろしい一幕が演じられたことを知つた——（女中部屋では些細な言葉にいたるまで残らず聞くことが出来たのである。その多くは佛蘭西語で言はれたけれども、小間使のマアシヤは五年ほど巴里から來た裁縫女のうちに住み込んでゐ

たので残らずわかつたのだ。——母は父に其の不忠實と、公爵夫人の令嬢と懇意になつた事とを非難した。父は最初のうちは辯解してゐたが、やがて腹を立て、同じやうに何か激しい言葉を口に出した。「何か母の年について」言つたので母は泣き伏してしまつたさうである。母はまた手形が老公爵夫人に與へられたやうに言つて、そして令嬢についても同様に甚だ不利益なことを言つた、そこで父は彼女をおどしたさうである。

『そして此の不幸はみな、』とフィリップは言ひつゞけた。『ある一通の匿名の手紙のためです。誰がそれを書いたかは分りません。けれどもこの事件が世間の耳にはひる筈はちつともないと云ふことでした。』

『それでは何かあつたんだな！』と私はやつと口に出した、両手も兩足も凝結させて、心の底であるもののふるへてゐる間に。

フィリップは意味ありげにまばたきをした。

『さうです、こんな事は隠せるものぢやありません。此の一件でお父さんがいくら御用心なすつたところで——たとへばたび／＼馬車を借りたり、其の外何かとものが要りますから：：人手を借りなくては何事も出来ませんからね。』

私はフィリップを退けて、寢床の上に身を投げた。私は啜泣きもしなかつた、絶望にも身をゆだねなかつた。いっとうして此の一切の事が起つたかも知分に問はなかつた。私がつと早く、もうつと以前に、此のことを推量しなかつたのに驚きもしなかつた——のみならず私はまた父の事を怒りもしなかつた：：私の聞き知つたことは私の力の及ぶところでない。此の不意の発見は私を打ち砕いた：：すべての事は過ぎ去つた。すべての私の花は一時にもぎとられ、打ち散らされ、ふみにじられて、私のまはりに横はつた。

## 二十

翌日、母は市の方へ引越すのだと言つた。早朝、父は彼女の寢室へ入つて長いこと二人でゐた。何人も彼が彼女にどう言つたか聞かなかつた、けれども母はもう泣かなかつた。彼女は落着いて、食事を求めた。しかし彼女は部屋の外へは出ず、其の決心をひるがへしもしなかつた。私は覚えてゐるが、其の日は一日歩きまはつてゐたけれど、

庭へは一步もふみ出さず、其の上翼の方へは一瞥だに投げなかつた。けれども晩方に私はある不思議な出来事を目撃した。父はマレフスキ伯爵の腕を取つて客間から控室に連れ出して、別當の前で彼に冷かに言つた。『數日前に閣下はある家で拒絶をお受けになりましたね。私は今あなたに説明を申上げようとは思ひません、しかし私はもう一度あなたが私のところへお出でになつたら、窓から投げ出すようにする事をあなたに通告するの光榮を有します。あなたの御筆跡は私の氣に入りましたよ。』

伯爵はお辭儀をして齒を喰ひしぼり、身をかどめて消え去つた。

アルバート街へ移轉の準備が爲された。そこに私たちは一軒の家を持つてゐた。おもふに父自身もはや別荘には留まらうとは思はなかつたらう。けれども、彼が母に面白からぬ事件をはじめさせたいとしたのは明かである。萬事は靜かに、またあまり急ぎもしないで行はれた。母は其の上公爵夫人にも挨拶の使をやつて、彼女が不快なために出發までにお目にかゝることが出来ないのは残念だと言はせた。私は狂人のやうに歩きまはつて、そしてたつた一つの事を希望した。それは此の一切の事が出来るだけ早く結着してしまふやうにと云ふのであつた。たつた一つの考へをまとめる事さへ私には不可能で

あつた。どうして若い娘が——しかも公爵の令嬢が！——こんな事をしでかすことが出来ようか、何となれば彼女はベロフゾロフとでも結婚することが出来たのに、私の父が獨身でない事を知つてゐたではないか！ 彼女は一體何を望んでゐたのだらう！ 一體彼女はその凡ての未來を破滅させることを恐れなかつたのだらうか？ さうだと私は考へた、これは戀だ、熱情だ、犠牲だ——そして私はルウシンの言葉を思ひ出した。『あらゆる種の人にとつては自分を犠牲に供することは楽しいことなのだ。』

一度私は翼の窓の一つの中に、一個の白い點を見る機會をもつた……あれはジナイイダの顔だらうか？ と私は考へた……いかにもその通り、それは彼女の顔であつた。私はもう辛抱が出来なかつた。私は彼女に訣別の辭をのべないでは、彼女から別れる事は出来なかつた。私はいゝ折をうかゞつて翼へ行つた。

客間では公爵夫人がいつものだらしのない、だるさうな挨拶で私を迎へた。

『まあ、どうした譯でこんなに早くからお引越しになるのです？』と彼女は言つた、ひとつまみの煙草を取りながら。

私は彼女を眺めた、そして氣が軽くなつた。フィリップのつかつた手形と云ふ言葉が私

を苦しめた。彼女は何も氣がつかなかつた——少くとも私にはその時さう思はれた。ジナイイダが次の部屋から出て來た、黒い着物を着て、青さめて、髪は解けたまゝであつた。彼女は黙つたまゝ私の手を取つて、自分と一緒につれて行つた。

『私はあなたの聲を聞きました。』と彼女は言ひ出した。『それですぐに來たのですわ。私たちと別れるのが、あなたにはそんなにたやすい事でせうか？ あなたはいけない子供ね。』

『私はお別れに來ました。』と私は答へた。『多分永久の別れでせう。あなたはきつともうお聞きになつたでせう——私たちは引越して行きます。』

ジナイイダはちつと私を見つめた。

『さう、聞きましたわ。私、あなたの來て下すつたのを感謝しますよ。私はもうあなたには逢へないだらうと信じておきました。私のことをもう怒らないでゐて下さいな。私はあなたを時々苦しめました、けれども私はあなたの思つていらつしやるやうな女ぢやないのですから。』

彼女は身をそむけて窓にもたれた。

『本當よ。私はそんな女ぢやないことよ。私はあなたが私のことを悪くおもつていらつしやるのを知つてますわ。』

『私がですか？』

『ええ、あなたがです……あなたがです！』

『私がですか？』と私は悲しげにくりかへした、そして私の胸は以前のやうに退ける事の出来ない、何とも言ひがたい魔力の影響のもとにふるへた。『私がですか？ ジナイイダ・アレクサンドロフナさん、うそは言ひません。あなたが何をなさらうと、どんなに私を苦しめなさらうと、私は私の生涯の終る時まであなたを愛し、また崇拜しますよ。』

彼女は急に私の方にふりむいて、兩腕をすつとひろげて、私の頭をかへて、私を接吻した、激しく、燃える様に。この長い別れの接吻は何人を求めてのことか誰か知らう、けれども私はその甘味をむさぼるやうに味つた。私は決してかやうな接吻を二度とは受ける様な事はないと知つてゐた。『さやうなら、さやうなら。』と私はくりかへした……彼女は身を引きはなして立去つた。私も亦辭し去つた。私はその辭し去る時の感情をしるす事は出来ない。私はそれを又くりかへす事を望みはしない。けれども私がそれを

一度も感じなかつたならば、私は自分を不幸だと思つたらう。

私たちは市へ移つた。私が過去から身を引き離して、勉強に身をさへげる事が出来るまでにはよほどの時がつゞいた。私の傷はたゞ徐々として癒えた。けれどももと／＼私は父に對しては別に激しい感情を抱かなかつた。反對に彼は私の眼に、いはばなほ大きくなつて見えたのである……心理學者はこの矛盾を出来るだけよく説明するがよからう……

ある日、私は遊歩場<sup>プレイグラウンド</sup>を歩いてゐた。其の折ルウシンに出逢つて筆紙につくしがたい喜びを感じた。私は彼の卒直な潤然たる性格のために彼を受した、且つまた彼は私の心中に呼びさました思出によつて、私にはより貴重であつた。私は彼の方へ駆け寄つた。

『ああ。』と彼は言つて額に皺をよせた。『ああ、あなたでしたか、若いお方！ どうぞあなたの顔を見せて下さい、あなたはやはり黄色ですな。しかしあなたの眼はもう以前のやうには曇つておませんな。あなたは一個の男子のやうに見えます、客間<sup>サロンの</sup>の犬ころのやうには見えませんな。それは結構ですよ。ところで、あなたは何をしていらつしやるか、御勉強ですか？』

私は嘆息した。私は嘘をつきたくはなかつた、が、眞實を言ふのを耻ぢた。

『いや、いいですよ。』とルウシンは言ひつゞけた。『さう氣を落さなくてもいいですよ。几帳面な生活をして、戀愛などには耽らないのが何よりですよ。あんなことが何の役に立つものでせう？ あんなことをやつてゐると、どこへ波が打寄せようと——それは常にいけないです。男子と云ふものはたとへほんの石の上だらうが、自分の足で立たなくちやありません。御覽でもありませんが、私は咳嗽をします……それからあのペロフゾロフですね——あなたはお聞きでしたか？』

『どうしたのです？』

『あの男は跡方もなく消えてしまいましたよ。何でもコウカサスの方へ旅行したと云ふ噂です。これはあなたに取つてはいゝ見せしめです、若いお方。それと云ふのも、いゝ時分に見切をつけて、網を破る事が出来なかつたからのことです。だが、打見たところ、あなたは仕合せにも飛び出さなかつたやうだ。二度と再びその中へ陥らないように注意なさい。ぢや、さやうなら！』

『私は二度と再び陥らないだらう。』と私は考へた……『私は彼女に決して逢はないだらう。』

『けれども私は今一度ジナイイダを見るべき機会があつた。』

## 二二一

父は毎日馬に乗つて出掛けるのが常であつた。彼は長く細い首と、細い足をした立派な赤い栗毛馬を持つてゐた。其の馬は疲れる事もしらなかつたが、同時に意地悪だつた。人は彼に「エレクトリック」と云ふ名を與へた。父の外には、何人も此の馬に乗り得なかつた。ある日、父は上機嫌で私の部屋へ入つて來た。こんなことは長いことなかつたのである。彼は馬で出掛ける用意をして、もう拍車の留金を結んでゐた。私は彼と一緒に連れていつてくれるようにと願つた。

『それより波蘭土式の木馬に乗つた方がいい。』と父は答へた。『お前はあの果下馬とさじまでは俺について來る事は出來まい。』

『いや、ついてまわります。私も同じやうに拍車に留金を付けませう。』



『それぢや、勝手にするがいゝ!』

私たちは出かけた。私は一頭の黒い毛のふさふさした小馬を持つてゐた。それは歩調がたしかで又かなり活潑だつた。もとよりエレクトリックが一杯の並足で行く時には、私の馬は力一杯駈けなくてはならなかつた。けれども私は取りのこされはしなかつた。私はまだ父に比較すべき乗馬家を見たことがない。彼は立派な姿勢で、悠然と巧みに乗つてゐたので、まるで馬が彼の騎つてゐることを知つて彼を誇としてゐるやうに見えた。私たちはあらゆる遊歩場を過ぎて處女地へ達し、いくつかの垣根を飛びこえ、(最初私は飛ぶのを恐れた、けれども父は卑怯ものを輕蔑した——それで私は恐れるのを止めた。)二度もモスクワ河を乗り越した。私はもう私たちが家へ歸ることだらうと思つた。私の馬が疲れた事を父が認めたから猶更である。ところが突然彼はクリムの淺瀬の方へ曲つて岸に沿うて駈け出した。

私は彼のあとを追うた。私たちが古い材木を高く積み上げたところへ到着した時に彼は馬からひらりと飛び下りて、私にも下りるように命じ、私に彼の馬の手綱を與へて、この材木のところで待つてゐてくれと命じた。彼自身はある小さな横町へ曲つて消え失

せた。私は馬を後に曳きながら、且つエレクトリックを叱りながら、河岸をあちらこちらと歩き出した。エレクトリックは歩きながら始終頭を振り身をふるはせ鼻息をし、且ついなないた。そして私が立止ると或は一方の蹄で地を蹴つたり、或はいなゝいて私の果下馬の首を噛んだり、つまり彼は癖の悪い純種馬のやうに振舞つた。父は歸つて來ない。河からは氣持のわるい濕り氣が上つてくる。小雨が靜かに降つて來た、そしてその傍に行きつ戻りつしてゐた私に、きはめて退屈にまた馬鹿々々しくなつてゐた。灰色の材木に小さな黒い點をつけては濡らした。絶えがたい退屈が私をとらへた、そして父は依然として來なかつた、芬蘭人の巡查の、これまた全身灰色でかため、頭に壺の形をした大きな古い革帽をかぶつて、鞍を持つたのが——(何のために巡查がたつた一人モスクワ河の岸にゐたのだらうか?)——私に近附いて彼の老人のやうに皺のよつた顔を私に向けて言つた。

『若い旦那、あなたは此の馬を持つてこゝで何をしていらしやるのです? 手綱を私に下さい、持つてゐて上げませう。』

私は彼に一言の答も與へなかつた。彼は私に煙草をねだつた。彼を離れるために(そ

れに非常な待遠しさが私を苦しめてゐた。私は父の消え失せた方向へ數歩進めた。それから私はとある小さな横町を通つて、そのはづれまで行き、角を曲つて立止つた。私の約四十歩前に、父はある木造の小家の開かれた窓のところで往來とほりに立つてゐた。彼は私に背を向けて、上半身を窓の胸壁にもたせかけてゐた。窓掛によつて半ば掩はれてゐた家のうちには、黒い着物を着た一人の婦人が坐つてゐて父と話をしてゐた。その婦人はジナイイダであつた。

私は化石したやうであつた。私は白狀しなければならぬが、これは私の全然豫期しないことであつた。私の最初の考は逃げ出すことであつた。『父が振向いたならば、』私の頭に閃いた。『其の時には私は運の盡きである。』：：しかしある不思議な感情、好奇心よりも強い、のみならず、嫉妬よりも強く、恐怖よりも強い感情が私を引留めた。私は見渡しはじめた。立聽きしようと試みた。父は何事かを主張するやうに見えた。ジナイイダはそれを承諾しないやうであつた。私は今なほ彼女の顔を見るやうな氣がする——悲しげな、眞面目な、美しい、名狀すべからざる獻身と苦惱と愛情と絶望との表情をしてゐた——私はこれ以外の言葉を見出すことは出来ない。彼女は手短かに、きつぱりとも

を言つて、目を上げないでたゞ微笑した——身をゆだねたやうに、また反抗するやうに。すでに此の微笑に於て、私は私の昔のジナイイダを再び認めた。父は肩をそびやかして、頭の上の帽子をかぶり直した、これは常に彼が苛立つた時のしるしである：：それから、私はかういふ言葉を聞き取つた、*Vous devez separer de cette* (あなたはこゝから離れ)。ジナイイダは立上つて手を差しのべた：：突然私の目の前にはあり得べからざる事が生じた。父は其上着の塵をはたいてゐた乗馬用の鞭を突然振り上げた——そして私は肘のところまであらはした腕の上に激しい打撃の落ちるのを聞いた。私はたゞやつとの事で叫び出さないようにと自分を制することが出来た。ジナイイダは身をふるはして黙つたまゝ父を眺め、それから腕をそろ／＼と唇まで持ち上げながらその赤くなかつた傷に接吻した。父は鞭を投げすてゝ急いで小さな段を飛び上り、家の中へ飛び込んだ：：ジナイイダは振り向いて腕をさしのばし、頭を引いて、同じやうに窓から遠ざかつた。

恐怖のために自失して、心中に疑惑の恐れを抱いて、私は飛びすざつて、横町を駆け下りて、河の岸へ歸つて來た。

私は何も理解しなかつた。私は私の冷靜な控へ目の父が屢々怒りの發作はつさに打ち負かさ

れることを知つてゐた——それにも抱はらず私は自分の見たことを理解することは出来なかつた……けれども私は同時に感じた、私が私の全生涯に於てジナイイダのこの身振、この微笑を決して忘れぬであらう、また彼女の姿、この突然私の前に現はれた新しい姿は永久に私の記憶に刻み込まれてゐるだらうと。何思ふこともなくして私は河の上を眺めてゐた、そして涙が私の頬の上に流れたのをも知らなかつた。彼女は打たれたと私は考へた……打たれた……打たれた……

『おい、お前は一體何をしてゐるのだ？ 馬を俺によこせ！』父の聲が私の後から起つた。

機械的に私は彼に手綱を渡した。彼は鞍へ飛び乗つた……凍え切つた馬は棒立になつて一尋半の一飛躍をなした……けれども父はそれを間もなく押し静めた。彼は拍車を馬の横腹に當て、拳で馬の頸を打つた……『ああ、俺はもう鞭をもたないんだ！』と彼はつぶやいた。

私はさつき耳にしたその同じ鞭の音と、打撃とを考へて身ぶるひした。

『どこにおなくしになつたのです？』と短い沈黙の後に私は父に聞いた。

父は私には答へなかつた、そして駈け出した。私は彼に追ひついた。私はどうしても彼の顔が見たかつた。

『お前は俺のゐない間に、退屈したらう？』と彼は口のうちにつぶやくやうに言つた。

『えゝ少し。どこで一體鞭をおなくしになつたのです？』と私は尙一度訊いた。

父は私を鋭く眺めた。

『俺はなくしやしない。』と彼は言つた。『投げ棄てたんだ。』

彼は物思はしげになつて頭を垂れた……そしてこの瞬間に私は最初に、恐くは又最後に、彼の厳格な顔付が、いかなるもの優しさとも悲しさとも現し得るかを見た。

再び彼は駈け出した。そして私はもう追付く事は出来なかつた……私は十五分間おくられて家についた……

『これが戀だ。』と私は再び考へた、夜、私の机の前に坐つた時に。机の上には既に再び手帳や、本が横はつてゐた。『これが情熱だ！ 我々は誰かの手から——そしてそれが愛する人の手であらうとも——一撃を怒ることなくして身に受ける事が出来るものだらうか？ しかし、それにも拘はらず、若しも人が愛するならば、この事はたしかに可能で

ある：：然り、そして私は：：思ひちがひをしてゐたのだ：：』

此の一月ひとつきのうちに私は非常に年をとつた、そして私の戀は、その昂奮や苦惱を以てしても、かの外の私の知らない或物に比較すると、全くつまらないもの、子供臭いもの、皆無に等しいものだと思はれた。その或物については私は殆んど想像することも出来なかつた、そしてそれは人が薄くらがりて發見すべく無益に努める未知の美しい、しかし脅すところの顔のやうに私に恐怖の念を吹き込んだ、：：：

その晩、私は不思議な恐ろしい夢を見た。私はある低い暗い部屋に入つたやうな氣がした：：私は鞭を手にして其處に立つて、足をばたばたさせてゐた。一隅にはジナイイダがしやがんでゐた、そして——腕の上ではなくて——額の上に彼女は一つの赤い筋をつけてゐた：：ところが二人の後には、全身血みどろになつて、ベロフゾロフが現れて、蒼ざめた唇を開いて、怒りたけつて父に迫つた：：：

それから二月ふたつきして私は大學へ入つた、そして半歳の後には、父は(中風で)ペテルブルグで死んだ。その少し前に父は母と私とを連れて其處に移つたのであつた。彼の死去する數日前に、彼はモスクワから一通の手紙を受取つた、その手紙は彼を極度に昂奮させた

：：彼は母のところへ行つて、何事かを乞ひ願つた、のみならず、彼はその上泣いたさうである、彼が、私の父が！ 中風に罹つたその日の朝、彼は私に宛てた佛蘭西語の手紙を書きかけてゐた。

『我が子よ。』と彼は私に書いた。『女の愛を恐れよ、この幸福、この毒を恐れよ。』……彼の死去後、母はかなり多額の金高をモスクワへ送つた。

## 二十二

四年は経過し去つた。私は今しも大學を出たばかりで、どんなことをしたらいいか、どこの扉を叩いたらいいかをも、まだはつきりとは知らなかつた。それでさしあたって、いたづらに市場に立つてゐる有様であつた。

ある美しい晩方に、私は劇場でマイダノフと出遭つた。彼は結婚をして、官職についてゐた。しかしいさゝかも變つてはゐなかつた。相變らずわけなしに感激してゐた、相

變らず急に阻喪の念におそはれた。

『あなたは御存知でせう。』と彼はいろいろの話をした中で私に言つた。『ドルスキイ夫人がこちらへ來てますよ!』

『ドルスキイ夫人ですつて?』

『ええ、まさかお忘れにはならないでせう? 昔のザシエキン公爵の令嬢ですよ、我々はいづれも——あなただつて御同様に——戀してゐたあの人ですよ! まだおぼえていらしやるでせう、あのネスクチニ附近の別荘で!』

『あの人がドルスキイといふ方と結婚したのですか?』

『さうです!』

『そしてあの人はこの劇場に來てゐるんですか?』

『いゝえ、このペテルブルグに。四五日前にこちらに來たのです。外國へ旅行しようとしてゐるので。』

『その良人といふのはどんな人ですね?』と私は訊いた。

『綺麗な若い男で、金持です——モスクワでは私と役所で同僚でした——御存じでせう

欠

欠

『ファウスト』

九通の手紙よりなる物語

Entbehren sollst du, sollst entbehren.

(Faust, Part I.)

おまへはあきらめなければならぬ、あきらめなければならぬ。

ギョオテ『ファウスト』第一篇

第一信

パヴェル・アレクサンドロキッチ・ペエより  
セミヨン・ニコラエキッチ・ヴェエへ

M 村にて、一八五〇年六月六日

君、僕がこゝへ来てからもう三日になる。で、約束どほり、君に手紙を書くために筆を執る。今朝から霧雨がやみなく降つてゐる。外へ出ることも出来ない。それで、君と少しおしゃべりでもして見たい。さて、僕は再<sup>ま</sup>た昔の家に歸つて来てゐる。この家へは——さう言ふのもすまない位だが——九年間といふもの、足踏みをしたことがなかつた。實際、君も容易に推察することが出来ると思ふが、僕は全く變つた人間になつてしまつた。さうだ、本當に變つた。君は覺えてゐるかね、あの客間にあつた僕の曾祖母<sup>ひおば</sup>さんの少し曇り加減の姿見を。そら隅に妙な小さい渦巻形の裝飾が附いてゐたぢやないか——君がよく、これは百年の昔をもうつしたものに相違ないと考へ考へしたあれさ——僕は此處へ着くや否や、あの鏡の前へ行つて見た。見ると直ぐ、この數年間に、僕がどんなに歳をとり、どんなに變つたかといふことがわかつた。だが、變化したのはひとり

僕のみではない。僕の小さい家はずつと前から古びてひよろひよろしてゐたのだが、今では殆んど支へきれさうにもない。すつかり傾いて地中へ沈み込みさうに思へる。あの女中頭のワシリエフナね、(君はよもや忘れやしまい、いつも君にあんなすてきなジヤムを御馳走したんだからね) あれはもうすつかり皺が寄つて、腰が曲つてしまつた。僕の顔を見ても大きな聲を出すことも出来ず、びつくりして叫ぶことも出来ないで、たゞ唸つて噎せたきりで、椅子にぐつたり倒れかゝつて手を振つてゐるばかりだつた。トレンテイ老爺さんの方はまだいくらか元氣があつて、相變らず體をしゃんと立て、歩くにもふんばつて歩いてゐる。今でも例の黄ろい南京木綿の半ズボンと、例のぎいぎい山羊の革で造つた踵の高いリボンの附いた上靴(これは時々、君をひどく感動させたぢやないか)を穿いてゐる。……だがまあどうだらう！ 此頃ではその半ズボンも彼の瘦せた脛に巻き付いてばたばたしてゐるし、頭髮も見違へるほど白くなつた。そして顔は皺で縮んで、小さな握拳のやうになつてゐる。彼が僕に話しかける時、召使に指圖を始める時、次の部屋で命令を下しはじめるときなどには、僕はつい吹き出してしまふが、また氣の毒にもなつて来る。齒は皆抜けてしまつて、ものを言ふ時には、口がもぐもぐして、ヒュ

ウ、シューと音がする。

それに引きかへ庭園は驚くばかりに榮えてゐる。紫丁香花、アカシヤ、忍冬などの弱く小さかつた植物は(覚えてゐるかね、僕等と一緒に植ゑたんだよ)みごとに繁茂した藪となつてゐる。樺の樹、楓の樹——みな枝は擴がり、たけは高く成長してゐる。とりわけ菩提樹の並木はきれいだ。僕はこの並木が好きだ。僕はあの柔かな灰綠色と、弓形になつてゐる枝々の下の微かな匂ひとが好きだ。僕は暗い地上の、光の輪がつくる編物の移り變つて行くのが好きだ——君も知つてゐるとほり、此處には少しの砂もない、僕の氣に入りの檜の幼樹は成長して若樹となつてゐる。昨日も日中を一時間あまりその蔭の腰掛の上で過した。僕は非常に幸福に感じた。僕の周圍には、草が美しく繁つてゐて、豊かな、もの柔かな黄金色の光はあらゆるものの上に落ち、木蔭にさへも射し込んで来た：その上、鳥の聲さへも聞くことが出来た！ 君も忘れはすまいと思ふが、僕は鳥がたまらなく好きなんだからね。斑鳩はをやみなしに啼いてゐるし、折々、葎切りの笛を吹くやうな聲も聞える。鶺鴒は氣持のいゝ豊句を歌つてゐるし、鶉は喧嘩をしたり、轉り合つたりしてゐる。郭公は遠く離れたところから呼びかける、と急に、氣でも



狂つたやうに啄木鳥が耳を刺すやうな叫びをあげる。僕は此のやはらかな、入り混つた響に耳を傾けて、ちつと聞きとれたまゝ身動きをしようとしなかつた。やがて、僕の胸はだるいとも、柔かなともつかない、或る氣持で一杯になつた。

それに、成長してゐるものは庭園ばかりではない。僕は絶えず身體の頑丈なづんぐりした若者達に出逢つてゐるが、これがみな、昔見なれてゐた小さな子供達だとはとても思へない位だ。君のお氣に入りだつたティモシヤは、今は君の想像も及ばぬ一人前のティモフェイとなつてゐる。君は彼の健康を心配して、肺病になるだらうと言つたものだが、どうして今ならば君は、南京木綿の上衣の狭い袖から出つばつた大きな赤い手や、身體中に目立つて見える肥つた丸い筋肉を見るだらう。彼は牛のやうな頸、密生した美しい捲髪のある頭を持つてゐる、——フアネス・ハアキュリズそのまゝだ。だが、彼の顔は他の者ほど變つてはゐない。その顔の輪郭さへさう大きくはなつてゐず、あの機嫌のいい、『欠伸をするやうな』——君の口癖のやうになつてゐた言草ぢやないが——微笑は今も残つてゐる。僕は彼を侍僕に雇ひ入れた。あのペテルブルグ生れの奴はモスクワで解雇してしまつた。彼奴は僕にきまりの悪い思ひをさせたり、御得意のペテルブルグ風を

僕に感心させようとしたりするのがいやに好きな男だつた。

僕の犬は一匹もゐない。みんな死んでしまつた。ネフカが一番長生きをしたが——それでも僕が歸るまで生きてはゐなかつた、アルゴスはユリシスが歸るまで生きてゐたと言ふけれど。彼奴は運が拙くて、獵の時の仲間であり、主人である人を今一度あつてゐるんだ目で見ることが出来なかつた。然し、シャフカは丈夫で、相變らず噎れ聲で吠えてゐる、そして一方の耳は昔同様に裂けてゐるし、尻尾は犬風がくつついてゐる——すべてかうもあらうと思つたとほりである。

僕は昔の君の部屋を居間に定めた。それは日光も直射するし、蠅も澤山居はするけれど、この部屋は他の部屋ほど古家のにほひがしない。不思議なことには、その微くさい少し酸ばいやうな、ほのかなにほひのために、僕の想像は非常にたくましくなる。僕はそれが嫌やだといふのではない。むしろその反對だが、僕はその爲めに憂鬱になり、つひには壓迫をさへも感ずる。僕は君とおなじやうに、眞鍮の板のついたづんぐりした古い箱や、背が卵形になつて脚が曲つてゐる白い臂掛椅子や、中央に紫いろで裝飾した大きな印のある、古びた燭臺などが此上もなく好きだ——また實際、古の家具はみな好き

だ。が然し、始終それを見てゐるのはやりきれない。一種のいらいらした失望の感じ（全くさう言へる）の虜（とら）になつてしまふ。僕が閉ぢこもつてゐる部屋の家具は、極くありふがかつた緑と赤との杯が一組乗つてゐるが、塵のためにやつとそれとわかるばかりだ。そして壁にはあの女の肖像が掛かつてゐる——覚えてゐるだらう、あの黒框にはまつてゐるのさ——そら君がマノン・レスコオ（譯註 儒蘭西の十七世紀の作家マノンの小説の主人公）の肖像だと言つてゐたぢやないか。それはこの九年間に少し黒ずんで来たが、然し、眼は昔ながらの愁はしげな、敏い（さび）、しかももの優しげな様子をしてゐるし、唇も例の氣まぐれな寂しい笑ひを浮べてゐる。そして半ば捲り取られた薔薇は彼女の華奢な手から軽く落ち散つてゐる。

僕はまた僕の部屋の簾を非常に面白く思つてゐる。かつては緑であつたのだが、今では日光のために黄色に變つてゐる。その上には墨繪で、タルランクウルの「隠者」から取つて来た幾つかの光景（シイ）が描いてある。一つのカアテンの上には、恐ろしく髯の多い、眼のぎろぎろした、足に草鞋を穿いた隠者が、頭髪（かみ）をふり亂した若い女を山の中へ引つ攫つて行くところがある。他の一つには、軍帽をかぶり、肩章をつけた四人の武士の恐ろ

しい争鬭がある。一人の男は大分離れたところに切り倒されてゐる——實際、こゝにはあらゆる恐怖の畫がある。がしかし、その四邊（まは）にはどうしても破ることの出来ない平和がある。そして簾そのものがすでに天井に来る光をあんなにも柔かにしてゐる：：此處を居間に定めてからと云ふもの、僕は心内の平穩と云つたやうなものを覚えて来た。何をしようとも思はない。誰に逢はうとも思はない。楽しみにして待つやうな事もない。ものうくて物を考へる氣にはなれないが、ぼんやり想ひに耽ることが出来ないほどではない。此の二つは君も知つてゐるとほり異つたものである。まづ押寄せて来るのは子供の時分の記憶である——何處へ行つても、何を見ても、その記憶の波は、はつきりとしてどんな微細なところをも現はして、謂はば、昔ながらの明かなはつきりした輪郭をとつて、あらゆる方面から押寄せて来るのだ：：それからこれ等の記憶に續いて他の記憶が起つて来る。それから：：それから僕は次第々々に過去から離れてしまつて、心のうちに残るものは一種の睡たげな重苦しさばかりだ。

まあ何といふことだらう！ 河堤（かはとて）の柳の樹の下に腰をおろしてゐた時、僕は不意に思ひがけなく泣き出してしまつた。若し通りすがりの百姓女が恥かしい思ひをさせなかつ

たなら、僕は年甲斐もなく、長い間泣き續けてゐたかも知れない。その女は僕を不審さうにぢろぢろ見てゐたが、それから、僕の方へ顔を向けなくて、腰をかゞめて丁寧に挨拶をして、そして行つてしまつた。此處を去るまで、即ち九月迄かうした氣分で（勿論もろ泣きはしないだらうが）ゐられたなら、どんなに嬉しいことだらう。そして誰か近所の人達が僕を訪ねて見ようなどといふ氣を起しでもしたら、僕は非常に迷惑するだらう。けれどもまづそんな虞れも無ささうだ、すぐ近くに住んでゐる人はないのだから。君はきつと僕の氣持をよくわかつてくれることと思ふ、孤獨といふものがどの位有益なものであるかといふことは、君も自分の経験によつてよく知つてゐる筈だからね；；さまざまの放浪生活をやつて來た僕には、今その孤獨が必要なのだ。

と言つて、僕はぼんやりしてはゐない。書物も少しは持つて來たし、またこの家にはさまざま恥かしくない藏書もある。昨日も書棚をみんなあけて、暫くの間、微くさい書物の中を掻きまはして見た。すると前には氣の付かなかつた面白いものが澤山ある。千七百七十年頃のもので、原稿のまゝになつてゐる「カンヂイド」（譯註 オプテイミズムや、笑せるヴォルテールの小説）の翻譯や、同じ頃の新聞雑誌や、「勝ち誇れるカメレオン」（即ちミラボオ）や、「ル・ペエザン・ベル

ヴェルテイ」などと云つたやうなものがあつた。子供の本にもでつくわした、僕自身のもあつた、父のもあつた、祖母のもあつた、そしてどうだらう、曾祖母のさへもあつたんだ。さまざまな彩色をした装幀の壞れた一冊の佛蘭西文典には、太い文字で「Ce livre appartient à Mlle Endoxie de Lavrine」（この書物はユウドクシイ、ド・ラヴリン嬢に屬す。）と書いてある、年代は一七四一年と記されてゐる。またいろんな時に僕が外國から買ひ入れた書物もあつた。その中にはギョオテの「ファウスト」もあつた。

おそらく君は知るまいが、僕には「ファウスト」を（無論第一篇だか）一語々々暗誦してゐた時代があつた。僕はそれをいくら讀んでも飽きるといふやうな事は決して無かつたものだ。然し時代が變れば夢想も變る。そしてこの九年間といふもの、僕はギョオテを手にしたことは殆んど無かつた。再びこの昔親しんだ小冊子（一八二八年版の廉價本）を見た時は、僕は何とも言へない感じに打たれた。僕はそれを持つて來て、寢床の上に横たはつて讀みはじめた。あの光彩陸離たる第一の場面はどんなに僕を感動させたことであらう！ 地靈の出現、その言語、君も覺えてゐるだらう——『生命の潮の上に、創造の嵐の中に』を讀むと、僕は長いこと覺えなかつた恍惚のふるへをのゝきを覺えた。僕は

何もかも一ぺんに思ひ出した。伯林、學生時代、フロイライン・クララ・ステック、それからメフィストフェレスの役を演じたツァイデルマン、ラドツイヴィルの音楽、その外何もかも：僕は長いこと寝付かれなかつた。青年時代のことは浮び來つて、幻影のやうに僕の前に立つた。それは火のやうに、また毒藥のやうに僕の血管を走り廻つた。心臓は躍つてなか／＼鎮まらうとしない。何ものかが心の絃をかき亂して、情愴の思ひは波のやうに押寄せはじめた：

君は君の友達が、もう四十にも手がとどかうといふ歳をして、寂しい小さな家にたつたひとりすわつてゐながら、どんな空想に耽つてゐるか察しが付くであらう！ 誰かが僕を隙見したらどうだらう！ 實際、どんなものであつたらう？ 僕は少しも恥かしいとは思はなかつたらう。恥かしいなどと思ふのはまだ若い特徴にすぎないのだからね。そして僕は自分がだん／＼年をとつて來ることに氣が付きはじめた、(どうしてだかわかるかね？) 教へてあげようか。僕はこの頃、出来るだけ快活な心持にならうとして、沈んだ氣持は努めて避けてゐる、若い時にはこれとは丁度正反對だつたものだけれど。時とすると、人はあだかも寶物でもあるかのやうに、自分の陰鬱な氣分を持ち廻つて、快活

な氣分であるのを恥かしく思ふものだからね：

だが、そんな事はどうでもいゝとして、あれだけ世の中の事を經驗して來たのにもかかはらず、ホレエシオ君、僕には、この世の中にはまだ何ものかが、僕がまだ經驗してゐない、そして一番重大なと言つてもいゝ「何ものか」があるやうな氣がしてならないだ。

あゝ、何といふ昂奮のしやうだらう！ 今度はこれで失禮する！ ペテルブルグで君は今何をしてゐるかね？ 序に言ふが、この料理番のサヴェリイが君によろしく申してくれと言つてゐる。あの男も大分年は寄つたが、まだひどく目立つてといふ程ではない。どちらかと言へば、丈夫になつて、全體に肥滿して來て、葱シチュウを入れたチキンスUPや、縁に模様のある牛酪菓子や、パイグウス——これは田舎では名物の御馳走で、食後二十四時間位は舌を白くあらしてしまふ——や、かうした料理は、相變らず手に入つたものだ。が、また一方では、肉の炙り方も昔の通りなので、それで皿を叩くことさへ出来る位だ——板のやうに硬いんだものね。だが、今度は本當にお別れしなければならぬ、さようなら！

## 第二信

おなじ人よりおなじ人へ

M——村にて、一八五〇年六月十二日

君、僕は今君に知らせたいやゝ重大な話があるのだ。まあ聞きたまへ！ 昨日、僕は食事前に少し散歩して見たいやうな氣持になつた——庭園のうちばかりでなしに。で、僕は大通りを街の方へ歩いて行つた。眞直な長い大通りを、疾足おしはやに、何の當てもなしに歩くのは、いかにも愉快なものだ。そして、あだかも何か用事でもあつて、何處かへ急いでゐるやうな氣がするものだ。僕は顔をあげた。すると一臺の馬車がこちらへやつて来る。誰かが僕を訪ねて來たのではないかしらと、僕は内々びくびくものだつた……がさうではなかつた。馬車の中には見す知らずの髭のある一紳士が乗つてゐた。僕はほつとした。が、僕とすれちがひになつた時、突然、その紳士は馭者に命じて馬をとめさせて、丁寧に帽子をあげて、なほ一層丁寧に「……さんではありませんか？」と僕の名を擧げてたづねた。僕も立ち止まつて、法廷に引き出された被告人のやうな態度で、仰せの

通りだと答へた。さう答へながら、僕はまるで羊のやうに、その髭のある紳士を眺めて胸の中で言つた——『たしかに何處かで逢つたことがある！』

『私がおわかりになりませんか？』とその人は馬車から出て來て言つた。

『どうも思ひ出せません。』

『だが、私には直ぐあなただつてことがわかつたのですがね。』

説明がはじまつた。そこで、この人はプレエムコフだといふ事がわかつた——覚えてゐるかね？——そら、我々が昔、大學で知り合つてゐたあの男さ。『なんだ、それが重大な話か？』と君は直ぐ思ふだらう、セミヨン・ニコラエキッチ君、『プレエムコフか、僕の覚えてゐる限りでは、どちらかと言へば鈍い男だつた、悪氣わるきはなかつたが、馬鹿でもなかつた。』と。それはその通りだよ、君。だがまあ、僕等の會話の續きを聞きたまへ。

『私は喜びましたよ。』と彼は言ふ。『あなたがあなたの御郷里へ、即ち私どもの近所へお歸りになつたといふ事を承つた時にはね。が然し、かう感じたのは私ばかりではないのです。』

『どうか承りたいものです。』と僕は訊いた。『そんなに御親切にどなたが……』

『私の妻です。』

『あなたの奥様が！』

『さうです、私の妻です。あれもあなたの昔馴染なのですから。』

『失禮ですが、奥様の御名前は何とおつしやるんで？』

『ヴェラ・ニコラエフナといふので、エルトゾフ家の女ですよ……』

『ヴェラ・ニコラエフナさんですつて！』僕は思はず聲を擧げざるを得なかつた……

これだよ、僕がこの手紙のはじめに重大な話だと言つたのは。

だが恐らく君にはこれさへも何處が重大なかわからないだらう……僕は君に昔の……すつと昔の僕の生涯のことを少しお話ししなければならぬ。

千八百三十年に、僕等二人が大學を出た時、僕は二十三歳であつた。君は軍隊へ入つたし、僕は、君も知つてゐる通り、伯林へ行くことに定めた。が、十月が来ないうちに伯林へ行つたとて何のする事もない。僕はその夏を露西亞で——田舎で——すごして、最後ののん氣な日を送つて、それから眞面目に勉強したいものだと思つた。この最後に言つた計畫がどの程度まで實行されたか、それはこゝで詳しく説く必要はない……『だが

何處で夏を送つたものかしら』と僕は考へた。僕は郷里へは行きたくなかつた。父は少し前になくなつて、ほかに近親とてもないから、僕は孤獨と退屈とを怖れたのだ……そこで、僕は遠くかけ離れた從兄弟から——州の彼の所領地の家へ来て見ないかといふ招待を受けた時は本當に嬉しかつた。彼は暮しむきもよく、人がよくつて、わだかまりのない性質で、田舎大盡といつた風な生活をし、堂々たる邸宅に住まつてゐた。僕はそこへ出かけて行つて滞在した。

從兄弟の家は大家内で、息子が二人、娘が五人あつた。その上、家にはいつも大勢の人がゐた。お客はひつきりなしにやつて來た。それでゐて少しも面白くなかつた。騒がしい御馳走で日が経つて了ひ、一人でゐるやうな機會はまづなかつた。何事も皆と一緒にだつた。何人も御馳走する事とか、何か面白くする工夫とかいふ事ばかり考へてゐた。そしてその日の終りになると、誰も彼れもみな恐ろしく疲れてしまつた。我々の生活の仕方には何處か粗野なところがあつた。僕はすでにどうかして逃げ出したいものだと思ふやうになつてゐた。そして唯もう從兄弟の誕生日の祝の終るのを待つてゐたのだ。ところが、その祝の日の舞踏會で、僕はヴェラ・ニコラエフナ・エルトゾフを見た——そして僕

はまた滞在することになった。

彼女はその折り十六歳であつた。彼女は僕の従兄弟の村から四里ばかり離れたさゝやかな所有地に母親と一緒に住まつてゐた。彼女の父親といふのは——非凡な人物だつたとは聞いてゐたが——急速に大佐の位階にまで昇級し、またその上の榮達をまなし得られたであらうけれど、狩獵に出た時、あやまつて友人に撃たれて若死してしまつた。父親のなくなつた時、ヴェラ・ニコラエフナはまだほんの赤兒であつた。彼女の母も亦人並すぐれた婦人であつた。彼女は四五ヶ國の國語を話し、また學問も博かつた。彼女はその夫と戀仲になつて結婚したのだが、夫よりも七つ八つ年上であつた。彼は彼女をその父の家からこつそり連れ出して、墮落したのであつた。彼女は夫の死をどうしても諦めることが出来ないで、自分の死ぬ日まで（プレエムコフから聞けば娘が結婚してから間もなく死んだといふことである）黒い喪服の外は身に着けなかつたといふ。僕には彼女の顔がはつきり想ひ出せる、表情に富んだ暗い顔、灰色になりかゝつた濃い頭髮、大きなきつい冴えない眼、眞直ぐな立派な鼻などが。彼女の父は——その性はラダノフといつた——十五年間伊太利に住まつてゐた。ヴェラ・ニコラエフナの母はアルバニアのつまらない

農夫娘の子供で、その娘はこの兒を生んだ翌日、自分の許嫁の戀人に——トランスステヴェリノの一農夫に——殺されてしまつた。ラダノフはその男から娘を誘惑して奪ひ取つたのである。……この話は當時大變な評判になつてゐた。露西亞へ歸つてからは、ラダノフは決して家から出なかつた、書齋からすらも出なかつた。彼は化學や、解剖學や、また魔術のやうな事の研究に身をゆだねて、人間の生命を延ばす方法を發見しようと企てたり、精靈と交ふことも出来るし、死人と呼び起すことも出来るかと考へたりしてゐた。……近所の人達は彼を魔法つかひだと思つてゐた。彼はこの上なく娘を可愛がつて、何事につけ自分で教へてゐた。けれども彼女がエルトゾフと墮落したことは決して赦さなかつた。彼は二人が自分のところに来ることを禁じ、二人が悲しい生涯を送ることを豫言して、孤獨の中に死んだ。

エルトゾフ夫人は寡婦となつてからは、自分の時間を残らず娘の教育に捧げ、友達に逢ふことも殆んどなかつた。僕がはじめてヴェラ・ニコラエフナに逢つた時は、この娘は——まあ思つても見たまへ——生れてからまだ都會に出たことがなかつたのだ。自分の地方の都會へさへも出たことがなかつたのだ。

ヴェラ・ニコラエフナはあたりまへの露西亞娘ではなかつた。彼女には何となく他人とは違つた特徴があつた。僕は逢ふと直ぐから、その恐ろしく落着いた舉動や言葉にひどく動かされた。彼女には動亂とか激動とかいふやうな分子は少しもないやうに見えた。彼女は簡単な、聰明な受答へをし、もの事をよく注意して聞いてゐた。彼女の顔の表情は子供の顔のやうに眞面目で信實であつた、然し何處か冷かな動かしがたいやうな所があつた、考へ込んでゐるやうなところは無かつたけれど。陽氣になることは滅多になく、普通の娘とは様子が違つてゐた。罪のない心の晴れやかさが彼女の周囲のあらゆるものに射し込んで、どんな陽氣にもまして人を喜ばせた。身長は高い方ではなく、いかにも格好のいいどちらかといへば華奢な風姿をしてゐた。彼女は感じのいい、きちんとした顔立ちをしてゐた。やはらかな可愛らしい眉、さらつとした黄金色の頭髮、母に似て筋の通つた鼻、やゝ厚ぼつたい唇。暗灰色の眼は上向きの睫毛の下から眞直ぐすぎると云ひたい位に外を見てゐる。彼女の手は小さいが、さして美しいといふ方ではない。器用な人にはこんな手をしてゐる人は見られない……また事實、ヴェラ・ニコラエフナはこれといふ技能は持つてゐなかつた。彼女の聲は七歳位の子供のやうに澄んで響いた。僕は従兄弟の家の

舞踏會で、彼女の母親に紹介されて、それから數日の後に、始めて彼等を訪問した。

エルトゾフ夫人は餘程風變りな婦人であつた。しつかりしてゐて、意志が強くて、凝性の人であつた。夫人は僕に非常な感化を及ぼした。僕は直ぐに彼女を尊敬し、彼女を怖れた。彼女は何事をするにも主義に基いてした、自分の娘を教育するのにもまた主義に據つてやつた、娘の自由を妨げるやうな事はしなかつたけれども。娘も母を受し、また盲目的に母を信じてゐた。エルトゾフ夫人が娘に書物を與へて——『この頁はお読みでないよ』とさへ言つて置けば、娘はその前の頁からして讀まないやうにし、その禁ぜられた頁などは決して見ようとはしなかつた。だが、エルトゾフ夫人もまた謬見を、偏癖をもつてゐた。例へば、何でも想像力に訴へるやうなものを恐ろしく嫌つてゐた。それだから、彼女の娘は十七歳にもなつてゐながら、曾つて小説や詩の一篇も讀んだことがなかつた。然るに、地理だとか、歴史だとかにかけては、また博物學にかけてさへも、彼女は屢々僕を赤面させた、大學の卒業生で、しかも君も知つてゐる通り、決して成績の悪い方ではなかつた僕のやうなものをさへも。

エルトゾフ夫人を會話の中へ引き込むのはなかく、骨が折れたけれど、僕は常に彼女



の偏見について、彼女と大に論じて見ようと努めた。彼女は極めて寡黙で、たゞ單に頭を振るばかりであつた。

『あなたは』と彼女はたうとう言つた、『詩を読むのは爲めにもなりまた面白くもあるとおつしやいますけれど：私の考へでは、人は若い時分に自分の好むものを選ばなければならぬ、爲めになるものか、面白いものか、そのどちらかをね、そして一度定めた以上は、それを守つて行かなければならないと思ひますよ。私も一時はこの二つを結合させようと試みたこともありますが：それは出来ない相談で、つまりは身をあやまつてしまふか、野卑になつてしまふかです』

實際、驚くべき人間だつたよ、あの婦人は。眞直な氣位の高い性質で、自分獨特の一種の狂信や迷信をもつてゐないでもなかつた。『私には人生といふものが恐ろしく思はれますわ』と一日彼女は僕に語つた。また實際、彼女は人生を恐れてゐた。人生の基礎をなしてゐるかの不可思議な力を、稀なことではあるが、不意に現れて来るその力を恐れてゐた。その力の醜弄物になるものこそ禍である！ しかもエルトゾフ夫人へはこれ等の力が恐ろしい形をとつて現れて來たのであつた。彼女の母の死、夫の死、父の死を思へば

：誰れとてもその恐ろしさに打たれずにはゐられまい。僕は彼女の笑つたのを見たことがなかつた。まあ言つて見れば、彼女は自分を封じ込めてしまつて、その鍵を水の中へ投げ込んだやうなものである。彼女はそれ迄に随分悲しい目に遭つて來たに違ひない。そしてその悲みを何人にも分たないで、それを自分自身の中に包み隠してゐたのだ。彼女は感情に制せられないやうに立派に自分を訓練してゐたので、自分の娘に對する熱愛の情を表はすのをさへも恥ぢとしてゐた。彼女は僕のゐる前でたゞの一度も娘にきずしたことはなかつた、またどんな愛稱をも用ゐたことはなく、いつでもヴェラと呼んでゐた。僕は彼女の名言を一つ覚えてゐる。僕が何かの機會で、我々近代人はみな半ば生活に敗れてゐると言つた。すると彼女は言つた、『半ば敗れてゐるといふことはよくない事です。人はすつかり敗れてしまふか、でなければ、ちつともそれに觸れないことです。』

エルトゾフ夫人を訪ねて來るものは滅多に無かつた。けれども僕は屢々彼女を訪れた。僕は内々彼女が僕に好意を持つてくれてゐる事を承知してゐた。それに實際、僕はヴェラ・ニコラエフナが非常に好きであつたのだ。僕等ふたりはよく一緒に話したりしたものだ：夫人は決して僕等の邪魔にはならなかつた。娘は母親のところを離れてゐる事を

好まなかつたし、僕の方でもまた強ひて二人きりで話したいとは思はなかつたのだから

……

ヴェラ・ニコラエフナは獨語を言ひながら考へ事をする妙な癖があつた。また、彼女はよく夜寝てゐて、その日の中に感じた事を聲を立てゝはつきりとしやべる癖があつた。ある日、いつもの癖で、僕をぢつと視つめながら、かろく片手で身を支へながら彼女は言つた、『Bさんはいゝ方だけれど、何だかたよりにならないやうな氣がするわ』僕等二人の關係は、極めて親密で、また極めて平穩なものであつた。たゞ一度、僕は彼女の澄んだ眼の奥底の何處か遙かなところに、一種妙なつかしさ、もの優しさと云つたやうなものを見付けたやうな氣がした：が、多分それは僕の思ひ違ひであつたらう。

兎角するうちに、時は経つて、僕は出發の準備をしなければならぬ時となつた。が、僕はそれを延ばしてゐた。時々、そんなにまで好きになつた此の可愛いゝ娘とやがて別れてしまつて、また逢ふことも出来ないであらうと考へたり、それをまざ／＼と目の前に見たりすると、僕はしみ／＼情なかつた。……伯林もその魅力を決ひはじめた。僕は自分の心の中にどんな事が起つてゐるかはつきり認めるだけの勇氣がなかつた。また實

際それがどんなものであるかわかりもしなかつた。——それは僕の心を覆うてゐる一片の雲のやうなものであつた。ところが或る朝、とうとうすべての事が急にはつきりわかつて來た。『何故この上求めようとするのだ、求め行くべき何ものがあるか？ どうしたつて眞理に到達することが出来るものか？ いつそ此處にとゞまつて、結婚した方がましではないか？』してまた考へても見たまへ、その當時、僕は結婚といふものについて少しも恐怖を持つてはゐないで、むしろそれを喜んでゐたのだ。まだひどい事には、僕は即日その意向を洩らしてしまつたのだ。ヴェラ・ニコラエフナへ（これは誰れでも普通想像するところだらうが）ばかりではなく、エルトゾフ夫人にまでも打明けてしまつたのだ。すると老夫人は僕をぢつと見て、

『それはいけませんよ』と言つたよ、『あなたは伯林へいらつしやい、そして十分に修業をなさい。あなたはいゝお方です。しかしヴェラに必要なのはあなたのやうな夫ではありません』

僕は頭を垂れて、面をあからめた、そしてこれは一層君を驚かせさうな事だが、僕はその場で内心ひそかにエルトゾフ夫人の言葉をもつともだと思つた。一週間の後に、僕

はその地を去つてしまつた。それからといふもの、僕は夫人にも、ヴェラ・ニコラエフナにも逢はなかつた。

僕は簡単にこのエピソードを記した、君が『長談義』をあまり好まないと言ふ事をよく知つてゐるからね。僕は伯林ベルリンに行くとき、直ぐもうヴェラ・ニコラエフナのことなどは忘れてしまつた。：然し白状するが、かうして思ひがけなく彼女のことを聞いたとき僕は昂奮してしまつた。彼女はそんなに近くにゐるのだ、彼女は自分の隣人だ、二三日中には彼女に逢へるんだといふ考へがはつきり頭にのぼる。過去が僕の眼の前の大地から湧き出でて、僕の方に襲ひかゝつて来るやうに思はれる。プレエムコフは舊交を温めんがために近いうちに僕を訪問する旨を告げ、それからまた僕が出来るだけ早く彼の家を訪ねるのを待つてゐると言つた。彼は騎兵隊にゐたのだが、中尉の位階くわいの時に退職して、僕の村から六哩ばかりのところこゝろに土地を購つて、その管理に身を委ねようとしてゐるといふ事や、子供は三人あつたが、二人はもうなくなつて、五つになる小さな女の兒が一人生き残つてゐるばかりだといふ事などを話した。

『だが、奥様は僕を覚えていらつしやるでせうか？』と僕は訊ねた。

『えゝ、覚えておます。』と少しためらひ氣味で彼は答へた、『勿論、あの頃あれはまだほんの子供だつたと言つてもいゝ位ですがね。何しろあれの母親があなたを大層賞めてゐましたからね。そして、あなたも御存じでせうが、あの氣の毒な母親の一語一語が、あれにはどんなに尊いものか知れないんですよ。』

僕は『あなたはうちのヴェラには似合ひません。』といふエルトゾフ夫人の言葉を思出した。：『さては君が似合つてゐたんだな。』と僕は思つた、プレエムコフを横目で見やりながら。彼は何時間か僕と話してゐた。彼は極めて感じのいゝ、愛すべき、善良な男で、話をするのにも謙遜で、僕を見る様子もいかにも人がよささうであつた。誰でも彼を好きにならずにはゐられないであらう：然し彼の智力は僕等の知つてゐた頃よりも進歩したあとは見えない。僕は多分明日にも僕を訪ねて行くことになるだらう。ヴェラ・ニコラエフナがどんなになつてゐるか見たくてたまらない。

君は意地悪だから、例の支配人の椅子によつて、この手紙を讀んで、きつと僕を冷笑するだらう。だが、僕はこれまで通りに書いて知らせよう、彼女が僕にあたへる印象をね。さようなら——後便で。

## 第三信

おなじ人よりおなじ人へ

M——村にて、一八五〇年六月十六日

さて君、僕は彼女の家へ行つて来た。僕は彼女に逢つたんだ。まづ第一に、僕は一つの驚くべき事實を君に告げなければならぬ。信じようと信じまいと、それは君の勝手だが、彼女は顔も姿も殆んど變つてゐないのだ。彼女が僕に挨拶に来た時、僕は吃驚して今少しで聲を立てるところだつた。まったく十七歳の少女ではないか！ たゞその眼だけは少女の眼ではない。だが、その若い時分ですらも、彼女の眼は子供の眼ではなかつた、——子供の眼にしては訝えすぎてゐた。然しおなじ落着き、おなじ迫らぬ態度、おなじ聲、額には皺一つなくて、あだかもこの數年の間雪の中にでも漬つてゐたやうだ。それで今年二十八歳で、しかも三人の子の母親だ。……どうもわからない！ どうか、僕が前以てさうあればいゝと考へてゐて、そして大袈裟に言ふのだと思つてくれたまふな。全くさうではない。僕は彼女に何の變化も見えないのをちつとも嬉しいとは思はな

いのだから。

二十八歳にもなつて、人の妻であり、人の母である女が少女のやうに見える筈はないんだが。彼女も人生から何物かを得て來てゐる筈だからね。彼女は心から私を迎へた。プレエムコフは僕の來たのがたゞもう嬉しくてたまらないといふ風だ。この男は歡待すべき人を探してゐるやうに見える。家は非常に氣持がよくて小ざつぱりとしてゐる。ヴェラ・ニコラエフナは服装もやはり少女のやうだ。青い飾帯のついてゐる眞白な着物を着て頸には細い金の鎖をかけてゐた。彼女の娘は大層可愛い兒だが、少しも母親には似てゐない。この娘は母親よりもその祖母を思出させる。客間には、長椅子の丁度上のところにあの不思議な婦人の肖像が、生前の姿そつくりの肖像がかゝつてゐる。部屋へ入つて行くと、直ぐそれが僕の眼にとまつた。それはあだかも嚴格に熱心に僕を見つめてゐるやうであつた。我々は腰をおろして、昔の事を語り出した、そして話はだん／＼と進んで行つた。僕は始終エルトゾフ夫人の陰氣な肖像を眺めずにはゐられなかつた。ヴェラ・ニコラエフナは丁度その眞下にかけてゐた。彼女はその場處が好きなのだ。

ところで君、僕の驚きを想像してくれたまへ。ヴェラ・ニコラエフナはまだ小説の一冊

も、詩の一篇も讀んだことがないのだ——實際、彼女の言葉で言へば、作りごとを書いた書物ほんの一冊も讀んだことがないと云ふのだ！ 智力の最高の快樂に對する此の不可解な無頓着が僕をいら／＼させた。知識があつて、また僕の考へる限りでは、感情的な女にあつては、それは全く恕すべからざることだ。

『何ですか？』と僕は訊ねた、『あなたはさうした種類の小説を讀まないのを主義になさうといふんですか？』

『でも、私はこれまでさういふ機會がなかつたものですから』と彼女は答へた、『時間もありませんでしたし！』

『時間がないんですつて！ 驚きましたね。私はまた』と僕はプレエムコフに向つて言葉續けた、『あなたが詩でも讀んで奥様を慰めておあげになる事とばかり思つておましたのに。』

『私は喜んで讀みもしたでせうが……』とプレエムコフは始めたが、ヴェラ・ニコラエフナは彼をさへぎつて、——

『あんなことを言つてらつしやる。あなた御自身が詩なんかさうお好きでもいらつしや

らない癖に。』

『詩は、さうだね、』と彼は始めた、『私は詩はたいして好きではないが、しかし小説だと……』

『然し、あなた方は何をなさるんです？ 夜分などどうしてお過しなさいますね？』僕は訊ねた。『骨牌かるたでもおやりですか？』

『たまにやる事もあります』と彼女は答へた、『然しする事は澤山でございますよ。私たちだつて讀書もいたします。詩の外にだつて、讀んでためになる書物ほんはいくらもありませんから。』

『何故、あなたは詩と言ふとさう反對なさるんでせうね？』

『私は別に反對するといふわけではございませんわ。たゞ子供の時分からさういふ作り話は讀まない習慣になつてゐますものですから。それが母の願ひでもありましたし、また私が年をとればとる程、母のした事言つた事は、何もかも正しかつた、本當に正しかつたつてことを信じてまわりましたので。』

『なる程。それはあなたの御勝手ですが、私はあなたに御同意が出来ません。私はたし

かに、あなたは徒らに至純な合理的な快樂を捨て、おしまひになつてゐるのだと思ひますよ。あなたは音楽や繪畫には反對なさらないぢやありませんか。さうでせう。それに何故、詩だといふと反對なさるのでせう？』

『反對するのぢやございません。私は詩については何も教はつてをりません——たゞそれだけのことですわ。』

『なる程、それぢや考へて見ませうね！ おもふにあなたのお母様は、あなたが一生の間、詩とか小説とか云つたやうなものをお知りになるのを妨げようと思ひではなかつたでせうから！』

『はい、さうですとも。私が結婚しました時、母は束縛といふ束縛を取つてくれました。私にはそれを讀むやうな——何とかおつしやいましたね……さうく、小説を讀まうと云ふやうな考へが起らなかつたのですよ。』

僕は驚いてヴェラ・ニコラエフナの言ふ事に耳を傾けてゐた。かうとは思ひがけなかつた。

彼女は穩かな眼で僕を見た。小鳥が驚いてゐない時はこんなに見える。

『私が何か持つて來てあげませう！』と僕は力を入れて言つた。(僕は丁度讀みかけてゐる『フアウスト』の事を思ひ出した。)

ヴェラ・ニコラエフナは靜かに溜息をついた。

『それは——それは、ジョルジュ——サンドではないでせうね？』と彼女はいくらかおつおつしてたづねた。

『あゝ！ ではあなたはジョルジュ・サンドの事をお聞きになつてゐるんですね。さう、それだつて別に差支へはありませんが……それでなく、他の作者の持つて來てあげませう。獨逸語はお忘れにはなりませんでせう、ね。』

『ええ。』

『これは獨逸人のやうに話しますよ。』とプレエムコフが口をはさんだ。

『さうですか、それは結構です！ 持つて來て差上げませう——だが、まあどんな驚くべきものを持つて來てあげますか待つていらつしやい。』

『よろしうございます、待つておませう。ですが只今は庭園へまゐらうではありませんか。でない、ナタアシャの守をするものがありませんから。』

彼女は圓い麥藁帽をかぶつた。子供の帽子で、彼女の娘がかぶつてゐたのとそっくりだが、たゞ少し大きいだけである。それから我々は庭園へ出て行つた。僕は彼女と並んで歩いた。爽やかな空氣の中を、たけの高い菩提樹の木蔭へ来たとき、僕は彼女の顔がこれまでよりも可愛く見えると思つた、とりわけ、少し振返つて、帽子の縁の下から僕を見上げるやうにして頭を後にそらした時などは。若し我々の後からプレエムコフが歩いて來なかつたなら、小さな女の兒が我々の前を飛び歩いてゐなかつたならば、僕は自分の自分が三十五歳ではなくつて、まだ二十三歳のつもりになつたであらう。殊には、我々の歩いてゐる庭園がエルトゾフ夫人の家の庭園にいかにもよく似てゐたので、僕は自分がまさか伯林に向つて出發しようとしてゐるところだとも思ひなしたであらう。僕はこの感情をヴェラ・ニコラエフナに語らずにはゐられなかつた。

『皆さんが私の様子がちつとも變らないとおつしやいます。』と彼女は答へた、『さう言へば心持だつて昔の儘ですけれど。』

我々は小さな支那風の園亭までやつて來た。

『オジノフカにはこんな園亭なんかありませんでしたのね。』と彼女は言つた、『あんなに

傾いて、色が剥げてをりますけれど、お氣になさいますな。あれでも内部は大層涼しくて、氣持がようございますよ。』

二人は亭の中へはひつて行つた。僕はあたりを見廻した。

『いゝ事があります、ヴェラ・ニコラエフナさん』と僕は言つた、『此處へテエブルを一つと、椅子を幾つかはこばせて下さい。此處はまことにいゝ場所です。此處でギョオテの「フアウスト」を読んで差上げませう——あなたに読んで上げようと云ふのはあの書物ですよ。』

『さうですか、此處なら蠅もをりませんし、』と彼女は事もなく言つた、『いついらしつて下さいますか?』

『明後日でも。』

『よろしうございます。』と彼女は答へた、『その支度をいたして置ませう。』

ナタアシヤは我々と一緒に園亭に入つて來てゐたが、不意に大きな聲を立て、眞青になつて飛び退いた。

『まあどうしたのです?』とヴェラ・ニコラエフナは訊いた。

『あゝ、母ちやま、』と片隅の方を指しながら女の兒は言つた、『あれ、あんな恐ろしい蜘蛛が！』

ヴェラ・ニコラエフナは隅の方を覗き込んだ。ふとつた斑のある蜘蛛がのろ／＼と壁を這つてゐた。

『何も恐いことはありませんよ。』と彼女は言つた、『咬み付きやしないことよ、それ御らん。』

さう言つて、僕が止める間もなく、彼女は見るも厭やな蟲をつまみ上げて、手の上を這はせて、それから投げすてた。

『まあ。お氣丈な！』と僕は叫んだ。

『何が氣丈な事がありますものか？ あれは毒蜘蛛ではございませんもの。』

『相變らず博物學はお精しいものですね。兎に角私なら蜘蛛などを手に取り上げてゐる事は出来ませんね。』

『何も恐がる事はございませんわ！』とヴェラ・ニコラエフナは繰り返して言つた。

ナタアシヤは僕等二人を黙つて見てゐたが、やがて笑つた。

『このお兒様は實によくあなたのお母様にお似になつてゐますね！』と僕は言つた。

『はい、ね。』とヴェラ・ニコラエフナは嬉しさうに笑つて答へた、『私にはそれが大變幸福でございますの。どうぞ、顔ばかりでなく、この兒がお母様のやうになつてくれ、ばよろございますが！』

我々は食事に呼ばれた。食事が終つて僕は歸つて來た。

二伸——食事は大變な御馳走で料理もよかつた。これは特に君のために書いておく、この食道樂やさん！

明日、僕は『ファウスト』を持つて行つてやる事になつてゐる。老ギョオテと僕とがうまく調子が合ふかどうか心配だ。それについては出来るだけ詳しく書いてお知らせしよう。

さて、それで、君はこれ等の記事を見てどう思ふかね？ 疑ひもなく、彼女は僕に大なる印象を與へた、僕はまさに戀に陥らうとしてゐる。が、それからさきはどうなるだらう？ つまらない事だよ、ねえ君！ 何事にも制限といふものがある。僕も随分と馬



鹿を盡した。もう澤山だ！ 僕の年輩になれば、とても生活をやり直す事は出来ない。その上、これまで僕はかうした種類の女に氣をとめた事なぞなかつたぢやないか……ぢや美人ならと言ふなら、そりや好きではあつたさ！

我が身はをのゝき——我が心は痛む——

我は我が心の愛するものを恥づ。

兎に角、僕はかうした隣人のあるのを喜んでゐる。よく物のわかつた、素直な、生き生きとした人に逢ふ機會のあるのを喜んでゐる。で、これから先き、どんなことになるか、その時節ときが來たらばお知らせする。

P B 生

#### 第四 信

おなじ人よりおなじ人へ

M——村にて、一八五〇年六月二十日

君、例の朗讀は昨日やつたよ。その次第は次の通りだ。まづ第一にお知らせするが、

成功は全く豫期以上であつた——實際成功といふだけでは適切でない。……まあ、話して見よう。僕は食事の時分に行つた。我々は六人で食卓についた。彼女プレムコフ、彼等の小さな娘、家庭教師（面白味のない、特色のない女だ。）僕、それから年とつた獨逸人とで、彼は短かい肉桂色フロクコヤトの上衣フロックコヤトを着て、さつぱりと、きれいに顔を剃つて、刷毛はけを當てゝゐる男で、いかにも優しい正直さうな顔をしてゐて、齒の見えない口で笑ひ、珈琲に菊ぢさを混まぜたやうなにほひをもつてゐた……年とつた獨逸人にはみな、身のまはりまりにこの妙なにほひがある。僕は彼に紹介された。彼はその名をシムメルといつて、獨逸語の家庭教師で、プレムコフ家の近隣の且まといふ公爵家にゐた。ヴェラ・ニコラエフナはこの男が氣に入つてゐる様子であつた。それで、朗讀の席に列するやうに彼を招いたのであつた。

我々は遅く食事をし、長い間食卓にすわつてゐて、それから散歩に出かけた。天氣は非常によかつた。朝のうちは雨が降り、風が荒れてゐたけれど、夕方になると何もかも再び静かになつた。我々は廣い牧場へ出て來た。牧場の眞上には、空高く大きな薔薇色の雲が軽くかゝつてゐて、縞になつてゐる灰色の空が煙のやうにその上にひろがつてゐ

た。その端のところに絶えず出でつ隠れつして、小さな星が一つふるへてゐる。その少し離れたところには、微かな紅を帯びてゐる淡碧の空を背景にして、三日月が白く輝いてゐる。僕はこの雲の方へヴェラ・ニコラエフナの注意を喚んだ。

『さう、』と彼女は言つた、『綺麗な雲ですことね。だが、こちらの方を御らんない。』

僕は見廻した。大變な暗青色の險惡な雲が入目を蔽ひ隠しながらのぼつてゐた。それには峰が出来て、空に向つて投げ上げられた太い束のやうに立ち、脅すやうな紫色の輝く縁にとりまかれてゐる。またこの紫色の輝く縁は、この大きな塊をつきぬけて、一ヶ所即ち眞中のところで、燃え上る噴火口の火のやうに輝いてゐる。……

『嵐が来さうだ』とプレエムコフが言つた。

だが、僕は本題から離れてしまつたね。

僕は前の手紙に書くことを忘れてゐたが、プレエムコフの家から歸つて来た時、僕は『ファウスト』を選んだことを後悔した。若し何か獨逸のものでなければならぬとすれば、最初には、まづシルレルのものがすつとよかつたと思つた。僕は特にあのグレエトヘンとの會合の前のはじめの數場を恐れた。メフィストフェレスについてもまた全然安心はな

らなかつた。が然し、僕は『ファウスト』の魅力に囚へられてゐたし、また熱心に讀む事の出来る書物はこの外になかつたから仕方がない。

我々が園亭へ入つて行つた時はもう眞暗だつた。もう前日から我々のために準備が出来てゐた。入口の眞向うの小さな長椅子の前に、布のかゝつた圓卓が一つ置いてあつて、その周圍には、安樂椅子だの腰掛だのがあり、テエブルの上にはランプがついてゐた。僕は長椅子の上に腰をおろして、書物を取り出した。ヴェラ・ニコラエフナは少し離れて、入口の近くの安樂椅子にかけた。入口を通して、アカシヤの緑の枝がランプの光に浮び出て、闇の中に軽くゆらいでゐるのが見える。時々夜風が部屋の中へ流れ込む。プレエムコフはテエブルに向つて僕の近くに腰をかけ、獨逸人は彼の傍らに席を取つた。家庭教師の女はナタアシヤと母家に留まつてゐた。僕は簡単に前置きを述べた。ドクトル・ファウストの古傳説のことから、メフィストフェレスの意義、ギョオテその人の事などにも言ひ及んで、若し何か不明なところがあつたら、僕の朗讀を止めてくれるやうにと願つた。それから僕は咳拂ひをした。……プレエムコフは砂糖水は要らないかと訊いた。彼は僕にかう訊いて、それで自分ではひどく満足したやうに思はれた。僕はことわ

つた。あたりはしんと静まり返つた。僕は眼を伏せたまゝで読みはじめた。僕は胸騒ぎがした。心臓は鼓動し、聲はふるへた。第一に感動の叫びを發したのは獨逸人であつた。僕が讀んでゐる間、沈黙を破るのはこの男ばかりであつた。……驚嘆すべきものだ！ 莊嚴だ！』と繰返して、折々は『あゝ！ 實に深遠なものだ。』とつけ加へる。プレムコフは僕の見た限りでは、退屈してゐた。彼は獨逸語をよくも知らないし、また自分でも言つたやうに詩はあまり好きでなかつた！ ……なに、それは自業自得だ！僕は食事の時に、彼が朗讀の席に來なくてもいゝといふ事をほのめかさうとも思つたがさう云ふのもといふ氣がしたのであつた。ヴェラ・ニコラエフナは身動きもしなかつた。僕は二度ほどちらと彼女を見た。彼女の眼はまともに熱心に僕を見つめてゐた。彼女の顔は蒼白くなつてゐるやうに思はれた。フアウストがグレットヘンと始めて出逢たところからは、彼女はその低い椅子によつたまゝ前に身をかがめて、兩手をかたく握り合せてゐた。そして最後まで、そのまゝ少しも動かすにゐた。プレムコフはそればかりを氣にしてゐるやうに見えた、そしてそれがまた僕を壓迫するやうに、始めのうちには感じただけども、次第に彼の事などは忘れてしまひ、氣が乗つて來て、熱情と感激とをも

つて讀んだ。……僕はヴェラ・ニコラエフナ一人の爲めに讀んでゐたのだ。心内の聲が『フアウスト』は彼女を感動させてゐるぞと言つて僕にさゝやいた。僕が讀み終つた時(インテルメツソ Intermesso)の場(ワルブルキス)は抜きにした、あれは文體から言つても第二編に屬すべきものだ。ワルブルキスナツトの場(ハルツ山 中の場)もまた飛ばしてしまつた)……僕が讀み終つた時、最後の『ハインリッヒ！』を聞いた時、獨逸人は感に堪へないやうに言つた、——『あゝ、實にすばらしいものだ！』プレムコフは非常に喜んだ風を裝つて、(氣の毒な男！)飛上つて、溜息(といき)をついて、それから僕が彼等にしてやつたもてなしのお禮を述べ出した。……けれども僕はそれには答へないで、ヴェラ・ニコラエフナの方を見た……僕は彼女が何と言ふか聞きたかつた。彼女は起き上つて、ためらひ氣味に入口の方へ歩いて行き、一寸戸口に立止つてゐたが、それから靜かに庭園へ出て行つた。僕は彼女を追つかけて行つた。彼女は既に餘程離れたところにゐた。彼女の衣服(きもの)は闇い物影の中に白い布片(きれ)のやうにくつきりと見えてゐた。

『ねえ？』と僕は呼んだ——『あなたはあれは好きではありませんか？』  
彼女は立ちどまつた。

『あの書物を置いて行つて下さるわけにはまわりませんか？』彼女のかう言ふのが聞えた。

『お望みなら差上げませう、ヴェラ・ニコラエフナさん』

『ありがたうございます。』と答へて、彼女は行つてしまつた。

プレエムコフと獨逸人とが僕に追ひついた。

『恐ろしくむし暑いぢやありませんか！』とプレエムコフが言つた。『本當に息がつまりさうだ。それはさうと妻は何處へ行つたでせうな？』

『母家の方でせう。』と僕は答へた。

『もう追つて夕食時分でせう。』とプレエムコフは言つたが、暫く黙つてゐてから、『美事に御朗讀なさいましたね。』とつけ加へた。

『ヴェラ・ニコラエフナさんは「ファウスト」がお好きのやうですね。』と僕は言つた。

『たしかに好きです！』とプレエムコフは叫んだ。

『おゝ、勿論ですとも！』とシムメルが調子を合せた。

我々は家の中に入つて行つた。

『奥様は何處にゐるんだえ？』とプレエムコフがその時丁度我々を出迎へた女中にたづねた。

『御自分の寢室へいらつしやいました。』

プレエムコフは彼女の寢室の方へ行つてしまつた。

僕はシムメルと高臺の方へ出て行つた。老人は大空を見上げた。

『あゝ澤山の星だ！』彼はゆつくりした調子で言つた、嗅煙草を一つまみ取り出しながら。『そしてあれが皆世界なんだな。』と彼はつけ加へて、そして煙草をまた一つまみ取り出した。

僕は彼に返答をする必要もないやうに思つたので、黙つてたゞ天を眺めた。不思議な何ともわからないものが僕の心を押し付けた：星は我々を嚴肅に見下してゐるんだと僕は思つた。

五分間ほど経つと、プレエムコフがやつて来て、我々を食堂へ招いた。ヴェラ・ニコラエフナも間もなく入つて來た。で、我々は席に就いた。

『ヴェロチカを御覽なさい。』とプレエムコフが僕に向つて言つた。